
Red Shot ー二人のスピラ使いー

ひゐらぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Red Shot ―二人のスピラ使い―

【Nコード】

N4727X

【作者名】

ひゐらぎ

【あらすじ】

克蘭・ギルド「ノーウェン」に所属する銃使いのエンジと、魔法使いのルーナ。二人は共に強力なスピラ使いだが仲が悪く、会話すらしようとしない。しかし二人には幼馴染で、昔は仲がよかったという噂もある。一体いつ、どうして二人の仲はこじれてしまったのか。

その頃、ちょうど『黒の日』から十年が経とうとしていた頃だった。魔物たちの行動が目について活発になり、スピラ使い達は各地で退

治に奮闘していた。そのうち見たこともない魔物や、文献にしかない魔物まで現れるようになり、また黒い影も再び行動を起こそうと
していた……。

登場人物紹介

・エンジ

十九歳 ヒューマ族 スピラ使い・銃使い
克蘭・ギルド「ノーウエン」に所属する青年。実力はギルド内でもトップクラス。しかし泳ぐことが出来ない。

・ルーナ

十九歳 ヒューマ族 スピラ使い・魔法使い
「ノーウエン」に所属する女性。美人であるが少し硬い性格。誰よりも強い魔力を持つ。

・カロン

十六歳 レイモン族 スピラ使い・剣士
「ノーウエン」に所属する亜人の少年。精神年齢がやや低め。自身とほぼ等身大の大剣を振るう。

・センファイ

十六歳 ヒューマ族 スピラ使い・弓使い
「ノーウエン」に所属する少女。ネガティブな方面に少し強気でカロンと仲が良い。弓のほかには鞭を使うこともある。

・ロロロネ

十五歳 ウロウ族 スピラ使い・錬金術師
「ノーウエン」に所属。見た目がユニセックスなため性別がわからない。甘いものが好物で、カロン同様に幼い。好奇心旺盛。

・シギ

二十二歳 ヒューマ族 スピラ使い・魔法使い

「ノーウエン」に所属している、口数の少ない男。しかし双子の弟と妹を常に気にかけている様子。

・ウールカ

二十一歳 レイモン族 スピラ使い・槌使い

「ノーウエン」に所属する、いつも笑顔の男。ウサギを髭髯させる帽子を被っている。まともに話したことが無い。

・ディーモ

年齢不詳 見た目は三十代前半 種族も不明 スピラ使い

「ノーウエン」をまとめる謎の多いリーダー。大体おちゃらけている。

・ヴィス

二十八歳 チェイシャ族 スピラ使い

「ノーウエン」に所属する女性のチェイシャ族。主にディーモの秘書のような仕事をしている。

・ネジュア

二十五歳 ヒューマ族 元スピラ使い・短剣使い

以前は「ノーウエン」に所属して魔物と戦っていた女性。いまはスピラ使いをやめて酒場を経営している。

・ジェード

十歳 ヒューマ族

ロゼラスの街に住む子供。シギの弟で双子の兄。怖いもの知らず。

・シェーラ

十歳 ヒューマ族

ロゼラスの街に住む子供。シギの妹であり双子の妹。やんちゃなジェードと違って大人しい。

・フレイヤル

年齢不詳 見た目は二十代半ば 種族も不明。
妙に白い肌をした男。十年前の「黒の日」の首謀者。

・イーシア

年齢不詳 見た目は十代後半 魔人

金髪の少女の姿をした魔物。勝気で高飛車。笛を吹くことで魔物を操ることが出来る。

用語・世界・種族説明

用語説明

・スピラ

全ての生き物に備わっている、魂や心の力。使える者とそうでない者がいるが、大半の者はスピラを使えない。

・魔力

別名上級スピラ。スピラの一種で特殊なスピラ。普通のスピラとは違って自然を操ることが出来る。

※普通のスピラを使った戦闘は、自身からスピラを表に引っ張り出し高密度なエネルギーとして相手にぶついたり、自己強化する戦い方。

魔力を使った戦闘は、普通のスピラと同じ攻撃も出来るうえに、魔力を自然のエネルギー（火や水、風など）にして攻撃できる。

・スピラ使い

上記のスピラ・魔力を使いこなせる者のこと。またその力を使って魔物退治をする者のこと。

・クラン・ギルド

スピラ使いの集まり。どの街にも一つはあり、本部を構えている。魔物退治の依頼を主として様々な依頼が集められ、そしてそこに所属するスピラ使いたちが依頼を任務として受理してこなす。ちなみにどの本部も居住可能になっていて、スピラ使い達が生活している。

・「黒の目」

十年前、ロゼラスの街に大量の魔物が攻めてきた日のこと。魔物の王といわれたドラゴンまでもが十数頭現れ、ほとんどのスピラ使いが戦死し街の住民の多くも死に追いやられた。

舞台となる世界のこと

・イデイルゲニア

物語の舞台となる異世界の大陸。他に大陸は無い。大昔には王国があったというが、いまでは滅んでいる。

・ロゼラス

イデイルゲニアの東にある街。十年前、「黒の日」があった街。

・クラン・ギルド「ノーウェン」

ロゼラスの街にあるクラン・ギルド。謎の多い男ディーモが率いている。

・夕闇の森

ロゼラスの街から南に行ったところにある森。スピラ使いの間でも、非常に危険な場所と噂される。

種族のこと

イデイルゲニアでは八割方が人間であるが様々な種族が生活している。

・ヒューマ族

つまるところ普通の人間。しかし他の種族に比べてスピラが強力。

・レイモン族

亜人の一族。先のとがった耳に鋭い牙、浅黒い肌を持つ。また怪力を備え五感も人間より優れているが、鳥目であるため暗所が苦手。

・ウロウ族

亜人の一族。垂れた大きな耳にロバのような尾を持つ。魔力を備えた者が多い。水が苦手で一族そろって泳げない上に、寒さに弱い。それ以外はヒューマと変わらない。

・チエイシャ族

獣人の一族。小柄で全身が白い毛に覆われている。そして大きな耳、犬のようにふさふさの尾、猫の目を持つ。五感がレイモン族と同じくらいに鋭く、動きも素早くアクロバチックな動きも軽々とやる。

・魔人

人の姿をし、また人間と同じくらいに知力を備えている魔物。本性は人の形をしていない。

chapter 01 (前書き)

誤字脱字やおかしな点があるかもしれません。ご了承ください。
報告してもらえるとありがたいです。

chapter 01

乳白色の、ねっとりとした濃霧が辺りにのしかかるかのようにして漂っていた。その中に飲み込まれている村に人の姿も気配もない。それもそのはずだ、この村は当の昔にかつて住んでいた村人に見捨てられた廃村である。家々を造る木々は所々に苔を付けたり、植物を這わせたり、窓ガラスはみにくく割れていたりと、そして家の中は例の濃い霧が蛇のように居座っていた。

エンジはそんな村の、他に比べてまだ幾分か状態のいい家の中に身を潜めていた。割れた窓の下に片膝をついて屈んでいた。手に真紅の拳銃を握り目を閉じて、感覚を研ぎ澄まさせている。しかししばらくこうしているも、周囲に変化を感じない。ゆらりというよりもぬめりと動く、乳白色の霧が肌を撫でる気味の悪い感覚だけが、先程から感じるものだった。

しかし不意にどこからか乾いた音が聞こえてくると、エンジはゆっくりと目を開いた。だがまだ動かない。その音に、集中する。乾いた音は一定のリズムを刻んで、徐々に大きくなっていく。こちらへと近づいているのだ。

乾いた音。それは紛れもなく蹄の音で、馬の足音だった。

音がエンジのすぐそばまでやって来た。この民家の壁の向こうで鳴っている。それでもエンジはまだ動こうとしない。しかし、この壁の向こうに敵がいる、と認識すると、手に握った赤い銃を無意識に硬く握り締める。そして鼓動が少し早くなる。何度も魔物を倒してきているが、やはり緊張してしまう。しかし恥じることはない。とわかっている。魔物を倒す者達なら、こんな状況に置かれれば誰

もが緊張するはずだ。魔物退治の仕事は、いつだって死と隣り合わせなのだから。命知らずや怖いもの知らずだからといって、それが強者であるとは誰も言わない。そんな者は、孤独な者であり、守るべきものがない者であり、命の価値を知らない者だ。しかし、そういう者ほど恐ろしい。彼らは自分の命すら大切にしないのだから。

と、何を考えているのだろうか、エンジはゆっくり首を振った。どうもこの冷たい空気は気分を狂わせる。

妙な気分だ。いままでの魔物退治の任務で、これほどにおかしな気分、これほど不安になることはなかった。気味の悪い霧のせい、それとも今回のターゲットのランクが普段よりも高いせいかな…または鼓動のリズムとよく似た、この乾いた音のせいかな。

不意に例の音が鳴り止んだ。

エンジは息を止めた。

驚いて無意識に止めたわけではない。息が上がってしまうのを押さえ、冷静を保つために呼吸を止めたのだ。

——見つけたか？

鼓動が一瞬だけ、鳴り止む。

周囲は再び静寂に包まれた。ただ先程とは違い、ぬるりとした霧とは違い緊張感が電撃のように走っている。

しばらくその静寂と緊張感が場を支配した。しかし再び蹄の足音がリズムを刻み始めると、エンジは肩の力を抜いた。

足音は先程とは違い、段々と小さくなっていく。エンジのいるこの場所から、足音の主が遠のいているのだ。

先程から全く動かなかったエンジが、静かに立ち上がる。そして壁に身をびったりとつけ、割れた窓から外をちらりと覗いた。村の中は相変わらず濃霧で満ちていて様子がよくわからない。しかし、その霧の中へ進んでいく黒い馬の姿をエンジは確かに見た。

——あれが今回のターゲットか。

この任務を、エンジは三日ほど前に受けたが、その退治すべき魔物が一体どういった魔物であるのかは、いまの今までわからなかった。そもそも、この黒い馬——クローディと呼ばれている——は全く確認されない、珍しい魔物だ。どのような場所に生息している、何に弱い、どういった力を持っているかなんて、わからなくて当たり前の魔物である。しかし非常に厄介な魔物であることだけは確かで、だからこそ退治の依頼もきた。

エンジがクローディを見たのは一瞬だけだったが、その姿を確認するには十分だった。遠くから見たため断言はできないが、体軀は普通の馬よりも一回り大きい。鋭く長い一本の角を額から生やし、四肢の蹄は白い炎に包まれている。そして同じような炎が鬣のように背で燃えていた。白い炎の先からはまた白い煙が出ていて、それが周囲に広がり、霧になっている。

この霧は、クローディから発せられているものなのだ。

クローディの姿が霧の向こうに消え、エンジは音もなく割れた窓から外へと出た。そしてクローディを追って霧の中を静かに進めば、

先程霧に飲まれたその黒い影がゆっくりと進んでいるのが見える。クローディは止まる様子もなく、かといって足を速める様子もなく、ただ単調に歩いていく。

——一体どこへ行く気だ。

まるで行く当てもなく進むクローディを追いながら、エンジは黒い影を追う。

しかし、不意にその黒い影が霧散するかのようにして白い霧の中に消えた。同時に蹄の足音が消える。

——消えた？

エンジは足を速め、その場へと急ぐ。地面を見ればクローディの足跡が残っている。それを追ってエンジは霧の中を突き進む。しかし彼はすぐに立ち止まってしまった。

クローディの足跡が、何もないところで途切れていたのだ。

——見失った。

周囲の霧中を見回す。しかし黒い影はどこにもない。やはり先程隠れているのがばれて、それで逃げられてしまったのだろうか。はたまた尾行しているのがばれたか。それともただ偶然に消えたのか。

考えている暇はなかった。クローディはまだ遠くには行っていない、この霧の中にいるはずだ。クローディがどこか遠くへ移動するのなら、クローディが原因であるこの霧も消えるか薄くなるはずだ。しかし周囲の霧にそんな様子はみられない。

またクローディを見つけ出さなければ。振り出しに戻ってしまった。

先程のような待ち伏せはせず、エンジは霧の中を歩き出した。この霧の中にいるのは確かなのだ。

手に握った銃を腰のホルスターにしまう。この霧の中、唐突にクローディが飛び出してくることもないだろう。奴が近くにいるのなら、先程のように蹄の足音がするはずだ。

そうして銃をしまった次の瞬間だった。

驚くほど近くで、蹄の音が聞こえた。

エンジは反射的にすぐ横の地面へと転がった。そして先程まで彼がいた場所を、クローディが額の角を光らせて突進して通っていく。だがクローディはすぐに踵を返し、地面に膝を突くエンジへと向かって突進してくる。

「やっぱりばれてたか」

エンジは苦笑いをしホルスターから素早く銃を抜き、構える。そして向かってくるクローディへ引き金を引く。

本来の銃のような重い発砲音はしない。いくつもの鈴を一齐に鳴らしたような発砲音が霧で満ちた大気を振るわせる。そして銃口から放たれるのは鉛色の銃弾ではなく、ルビーのように赤く輝く閃光。それが長い尾を引いて、クローディをめがけて一直線に飛んでいく。そしてその黒い身体に衝突するとまた鈴を鳴らしたような音をたて

て炸裂する。

クローディが嘶き、その場に止まり身体をよじる。そこにエンジはもう二発、閃光を打ち込みながら立ち上がり、クローディから距離をとる。そしてまた発砲。

しかし立ち上がってから発砲した閃光は、何故かクローディに当たることなくその身体をすり抜けて霧の向こうへと飛んでいった。

「！」

エンジは目を開いた。

クローディの黒い身体が徐々に透けゆく。そして周囲の霧に溶け込むように霧散し、姿を消す。

その場にエンジン一人が残った。周囲を見回しクローディの姿を探すも、どこにもない。

——また消えた。姿を透明にする力を持っているのか。

——違う。

背後で何かが動いている。

エンジはすぐに振り返った。

そこでは霧が渦巻き、一点に集まっていた。そして一点に集まった霧は黒く染まり、そして形を作り、クローディの姿を構築していく。胸から上を霧から実体化させたクローディは、その一本角を黒く

く輝かせる。

——こいつ、霧になれるのか。

エンジは動けなかった。クローディの角の先から大きな黒い魔方阵が展開される。そしてそこから放たれた黒い光球がエンジに当たり爆発する。そうしてエンジは突き飛ばされ、すぐ近くの民家の壁に背を打ち付けてくず折れた。

chapter 02

クローディはそんなエンジを見つめながら、体の全てを霧から実体化させる。そして立ち上がろうとするエンジにゆっくりと近づいていく。

エンジは落としてしまった銃を握り直し、片膝をついて顔をあげた。顔の左半分に生温いものが流れているのを感じる。血が流れているのだろう。その血が目に入り、視界がかすれてよく見えない。それでも迫り来るクローディを睨み銃を構え、その先を向けた。クローディもエンジを睨み返し、一本角を輝かせる。

「エンジ！」

と、ボーイソプラノの呼び声が霧中に響いた。それと共に、近くの民家の屋根から小柄な人影が飛び降りてくる。

屋根の上で待機させておいたカロンだ。

カロンは着地するなりクローディへと突進、そして小さな背に背負った巨大な剣を両手に取り、クローディをなぎ払うように振るった。しかしクローディは瞬時に自身を霧にさせ、大剣の刃を逃れる。

だがカロンは剣を振るうことを止めない。剣を振るい続け、霧となり曖昧な姿のクローディをその場から退かせる。そしてある程度クローディを追いつめるとカロンは唐突に後方へ跳ね上がり、頭から血を流しながら立ち上がったエンジの元へと駆け寄り、エンジの血で染まった顔を覗き込む。

「大丈夫かあ？」

「なんともねえよ。血が出ただけだ」

エンジはその血を手で拭く。しかしカロンは、

「でも、なんか変な魔法をかけられたんじゃないの？ さっき魔方阵出してたじゃん、あいつ」

「けどなんともねえって。心配ねえよ」

そうしてエンジがクロードイの消えた霧の向こうを睨むと、カロンは肩に大剣を担いで安心したように溜息を吐いた。エンジはカロンを見下ろした。

「ほら、休んでる暇はねえぞ。――奴は絶対に戻ってくる。人間の感覚じゃ分からない、カロン、お前なら分かるか？」

先の尖った耳に鋭い牙、そして浅黒い肌を持つカロンは人間ではなく亜人だ。また怪力を持ち、そのために自身とほぼ等身大の大剣を振り回すことができ、そして鋭敏な五感をも備えている。

カロンが濃霧の向こうを見つめる。

「――来てるよ。真っ直ぐこっちに。正面から来るよ」

「おし、お前は正面からいけ。俺はお前の後方から撃つ。それからわかってると思うけど、あいつは霧になる。霧になったら俺には奴の気配がわからない。お前、わかってるみたいだからその時は奴を追いかける。そしたら俺はお前についていく」

「りょーかいっ……とっ！」

カロンが返事をすると共に突然剣を振り下ろす。そして剣を滑ら

して空を斬る。時折カロンの剣の流れる先に、黒い霧が見える。クローディがそこにいるのだ。するとクローディは一瞬で姿を作り、カロンの剣を避けて踏み込んだ。そしてカロンに体当たりしようとするも、カロンはそれを避けてまた剣を振るう。同時にエンジはカロンの後方で銃の引き金を引きクローディに攻撃する。しかしクローディは一瞬姿を現したかと思うとまた霧と化してしまい、二人の攻撃は全く当たらない。

——攻守の入れ替えが速い。

エンジは舌打ちをした。これでは一向に攻撃できない。埒が明かない。

相手が霧に戻る前に攻撃しなければならない。しかしクローディが実体化するのは一瞬だけだ。

ならばその一瞬に攻撃を仕掛ければいい。

しかしエンジの銃弾では、クローディのその一瞬に間に合わない。クローディの攻撃は本当に一瞬だけだ。姿が現れてから引き金を引いても、銃弾がクローディの到達するときにはもうすでに相手は霧になっているだろう。……そうすると、カロンに任せるほかない。

「カロン！」

エンジは叫んだ。

「奴からの攻撃がきたら、避けるんじゃないで押し返せ！」
「ふえ？」

カロンが一瞬だけ振り返り、間の抜けた声を出す。エンジは再び叫んだ。

「いいか、奴に攻撃するようにうまく促すんだ。それで奴が踏み込んできたからお前も踏み込んで剣を振り下ろせ！」

「わかった！」

そうしてカロンは大剣を振り回すのを止め、数歩退く。その間にエンジは近くの崩れた民家の影に身を隠し、両手で銃を握った。銃口の先に、小さな赤い光が点る。それはゆっくりと瞬きながら、徐々に大きくなっていく。そうしながら、エンジは少し離れた場所にいるカロンへと顔を上げた。

カロンは剣を肩に担いでその場に突っ立っていた。クローディの様子を見ているらしい。時折一步だけ後退する。と、その次の瞬間、カロンの目の前にクローディの胸から上が現れ、カロンへ向かって黒く輝く頭の角を突き出した。

カロンは避けなかった。クローディの角先から発射された黒い光球がその身体にめり込むも、彼は大きく踏み込み肩に担いでいた剣を振り降ろす。振り下ろされた剣の刃はクローディの首に深々とした斬り筋をつけ、そして重い音を立てて地面に刺さる。それと共にクローディの黒い光球が爆発する。大剣を手放したカロンの小さな身体が宙に舞い、すぐに地面に叩きつけられた。

クローディが頭を振り、首から血を吹き出しながら嘶いた。霧となっていた身体が姿を現し、前足で地団駄を踏む。その目は怒りに燃えていて、角を再び輝かせると倒れたカロンへその先を向けた。角の輝きは、いままでよりもずっと黒く、大きい。

そしてエンジは民家の影から躍り出た。先程よりも数倍に大きくなった赤い光をつけた銃口を、クローディにしっかりと向ける。

「てめえの敵は一人じゃねえぞ」

銃の引き金を、引く。

銃口の先の光が爆発した。否、それは「爆発」というよりも「咲いた」といった方がいいのかもしれない。光の中央から、先程の弾丸よりも輝く大きな銃弾が発砲される。それと共に、小さな銃弾もいくつか発砲される。小さな弾丸は大きな弾丸の周囲を回りながら宙を駆ける。

エンジの発砲した銃弾。それはまさに赤い光の奔流だった。

周囲が赤い光に照らされ、クローディの姿が赤い奔流に飲まれる。赤い光の中、クローディの嘶きが聞こえる。

エンジの銃弾はしばらく経つと、徐々にその光が弱まっていき空気に溶けるようにして消えた。光が消えた濃霧の中、全身から白い煙をたたせるクローディが立っていた。しかし、クローディの身体がゆっくり傾いたかと思うと、大木が倒れるかのようにして地面に倒れた。もう、動かない。

エンジは銃をホルスターにしまうと、カロンの元へ歩いた。少しぼろぼろになったカロンは、そこにぺたりと胡坐をかいて座っていた。

「エンジのスピラ、いつ見てもすごいな」

カロンはエンジを見上げていった。するとエンジは腕組みをして溜息を吐いた。

「でも、あれはそう何回も撃ち出せるもんじゃねえんだ。一発撃つだけで、結構疲れる。……それよりカロン、攻撃を避けるな、なんて無茶言って悪かったな。怪我は？」

カロンは跳ねるようにして立ち上がると、威張るようにして、

「どうってことないよ。そもそもオレは人間のエンジより身体丈夫だし」

そうして、倒れたクロードィの近くの地面に刺さっている大剣を抜いて、その先でクロードィの身体を突つつく。

「一体何なんだこいつ、霧になったりして」

「やっかいだったな」

エンジもカロンの隣で、クロードィを見下ろす。

と、周囲の霧が唐突に渦巻き始めた。激しい風が吹き荒れ、霧はクロードィの死体に吸い込まれていく。そして全ての霧が吸い込まれたかと思うと、クロードィの身体は小さく霧散し、空気に溶けて消えてしまった。

濃霧のためによく見えなかった廃村の中が、よく見える。空を見上げれば、晴れていた。

カロンがあっけにとられて口を開けている。

「消えちゃった」

「ああ、消えたな」

カロンは不思議なものをみた様子で首をかしげた。大剣を、背負った鞆にしまう。

「本当に変なヤツだったな、あの馬。最近は変な魔物ばかりだ。みんないろんなところで暴れてる」

カロンがそんなことを言ったので、エンジは鼻で笑ってしまった。

「ほんと、最近の魔物は活発だな……そのためにも、早くギルド本部に戻るか」

「えー。オレ、疲れたあ。ギルド帰ってもまたすぐ任務だろー？すこし休みたいよ」

不満そうな声をカロンは上げた。しかし、エンジは肩をすくめて、

「おいおい、そんなこと言うなよ。俺達はスピラ使いだ、魔物を退治するのが仕事だろ？」

「……ちえー」

カロンが口を尖らせる。だがエンジはそれを気に留めず、村の外へ向かって歩き出した。

「でも、ま、ゆっくり帰るか？」

後ろを追ってきたカロンへ振り向いて、そう聞く。

「とりあえず近くの村まで戻るぞ。お前、いま、腹減って死にそう

「だろ？」

「おー、ごはん食べる！ お腹すいたよう！」

そうして二人は廃村を後にする。

ふと、エンジは空を見上げた。空は青で澄み渡っている。風が吹けば、どこから運ばれてきたのだろうか赤い花びらが舞っていた。

春だというのにまだ寒い。空気も風も、いまだに冷たい。

プロローグ 冷たい春風 終

chapter 01 (前書き)

誤字脱字やおかしな点があるかもしれません。ご了承ください。
報告してもらえるとありがたいです。

chapter 01

ロゼラスの街にあるクラン・ギルド「ノーウェン」の本部内は、今までにないほど静かだった。とりわけエンジの部屋は二十歳近いためにギルドからもらった一人部屋を使っている上に、その部屋のある三階にはエンジ以外に一人しか住んでいない。しかもそのもう一人の住む部屋はいくつもの空き部屋を挟んだ先にあり、またその一人もいまはギルドにいない。ギルドに所属するスピラ使いのほとんどが、魔物退治の任務のために不在なのだ。そのため静寂の中、エンジは一人自室のベッドの上に横になっていた。

窓の外を見ると、太陽はもうすでに空高くにある。それでもエンジは身体を起こそうとしなかった。寝ているわけではない。目を覚ましたのは何時間も前のことであるし、そのときに寝巻を着替えていつでも魔物退治にいけるようにした。それでもこうして部屋にいるのは、任務がないからだ。ならば射撃の練習でもしようと思ったが、上から「休め」と言われて禁止された。

だからエンジはこうして一人暇を持て余していた。街へ出歩く気もなく、ただただ自室で物思いにふけて時間を潰す。たいしたことは考えていない。とりとめのないことを考えながら、エンジはベッドに横になり、天井を見上げていた。

ふと寝返りをうつと、ベッドの横に備え付けられた小さなテーブルが目に入る。その上に、ホルスターに入ったままの銃が置かれている。通常の弾丸ではなく、使用者のスピラを撃ち出すように錬金術師達が作った銃だ。それをホルスターから出し、手に取る。

美しい赤色の銃身だが、よく見ると小さな傷がいくつもあ

こ十年間大切に使ってきたが、傷付くのは避けられなかった。戦場で使う武器だ。傷付くのが当たり前だ。おまけに古いものだから、毎日欠かさず手入れをしないと調子が狂ってしまう。

と、突然ドアがノックされる。エンジは身を起こし、ホルスターを腰に付けて銃をそこにしまった。そしてドアを開く。

「昼間からもう寝ているんですの？ それとも昼間まで寝ているんですの？」

ドアを開けた向こうには、緑の服を着た犬とも猫ともつかない生物が手を後ろに回して立っていた。身長は十歳ほどの子供と同じで、全身は白くて長い体毛に覆われている。犬のように柔らかそうな尾があり、頭には大きな耳、そして瞳は猫のようである。

チェイシャ族のヴィスだ。

「寝てねえよ。横になってただけだ」

エンジはヴィスを見下ろした。ヴィスはふむ、と鼻で笑うように目を細めた。尾がゆらりと揺れる。

「それで？ なんの用だ？」

ヴィスが悪い奴では無いことは分かっている。ただ時折このような意地の悪いからかい方をするのが、エンジは苦手だった。エンジはドア枠に寄りかかり、ヴィスにそう聞く。

するとヴィスは片目だけを閉じ、諭すような素振りで答えた。

「デューモが呼んでいますわ」

それだけ言うと、ヴィスはエンジに興味を無くしたのか廊下の向こうへと行ってしまった。その後ろ姿を見ながら、エンジは部屋の外へ出てドアを閉めた。そしてなぜ呼ばれているのかを疑問に思い、首をかしげる。

そうして廊下を進み、階段へ向かう。それまでに誰ともすれ違ふことがなかった。階段まで来ると、上の階へ向かう。四階を通り過ぎ、その上の五階へ――最上階である。

最上階には廊下がない。階段が終わったかと思うと小さな間があり、その向こうに扉が一つだけある。エンジはそのドアをノックする。

「入っていいぞ」

中から声が返ってきた。エンジはドアを開けて中に入った。

部屋の中は、書物と書類、それから白い鳥の羽で散らかっていた。書物のほとんどは図鑑のように分厚いものばかりで、見たことも無い文字で書かれたものもちらはらと散らばっている。書類は白紙のものから任務の内容が書かれたものまでがあり、果てには落書きのようなものである。そして何故あるのか理由のわからない白い鳥の羽は、枕に詰められているような小さくて柔らかいものから、羽ペンに加工すれば立派なものが出来そうなほど大きなものまで散らばっている。他にも棚やテーブルがいくつかあるが、骨董品のような妙な代物で溢れている。それらが、ドアの正面にある大きな窓から差し込む陽光に照らされていて、エンジがドアを開けた瞬間、数枚の書類といくつもの羽がその光の中に舞った。

これがクラン・ギルド「ノーウェン」のリーダーの部屋である。窓の前には大きな机があり、その向こうでこのクラン・ギルドのリーダーである男、デイーモが回転椅子に座ってぐるぐると回っていた。

「デイーモ、俺に――」

何の用だ、とエンジは聞こうとしたが、その瞬間くしゃみが出てしまった。この部屋にある羽のせいか、埃のせいだろう。するとデイーモはぴたりと回るのを止め、しかし次は、先とは反対周りに回転し始めた。デイーモの座る椅子の近くにある羽が、ふわりと舞い上がる。そんなデイーモの様子を、エンジは鼻をすすって見ていた。

「デイーモ、俺に何の用だ？」

今度こそは聞く。しかし、回転するデイーモは答えようとしないうるぐると回転し続ける。だがエンジは彼に問いただすようなことはせず、ただじっとその場に立って返事を待った。

しばらくすると、デイーモは窓の方を向いて回転をやめた。そしてエンジへと向き直り、

「……おお、目が回る、回る、世界が回転しておる」

「目え回すなら回り続けるなよ……」

エンジは呆れてデイーモを見た。デイーモはけらけらと笑っている。

「いやあ、すまんの。日に当たっていたら心地よくての、つい楽し

くなって回ってしまったんじゃ」

ディーモは見た目は三十代半ばだが、何故か口調は老成している。

「しかし本当に目が回ってしまったのう。少し気持ち悪いくらいだ。……うむ、わしはエンジを見ているつもりなのに、わしの目はお前の隣にある小箱を見ようと勝手に動いてしまう」

そう言われてエンジは自分の傍らにある小さなテーブルの上を見た。そこに積み重ねられた書物の山の中に、蔦の細工が施された小箱が一つだけ埋まっている。

「美しい小箱じゃろ？　これほど珍しいものは他にないぞ。中には希望が詰まっている」

そしてまたけらけらと笑う。そんな様子のディーモとは反対に、エンジは無表情だ。

「それで俺に何の用だって、聞いてるんだ。気まぐれで呼んだのか？」

「いやいや、そんなからかうために呼んだわけではない。――そうかりかりするんじゃない、練習を禁止されたくらいで苛立っているなんての」

ディーモの笑いは止まらない。ついにエンジは眉間にしわを寄せた。

「休息も大事だって事はわかってる。練習禁止されたぐらいで苛立たねえよ」

「そんなことはわかつとるわい。ふむ、わしにはわかってるぞ、エ

ンジ。何故お前が苛立っているのか。それはつまり、このわしの態度に問題があるのだな」

またデイーモは声を上げて笑う。しかし不意に黙ったかと思うと、「そして昔のことを思い出していたのに、そんなときにヴィスがやって来て、わしのところへ来いなんて言って回想の邪魔をしたから、余計に苛立ってるのだな」

エンジは表情を一切変えなかった。しかし内心では驚いていた。

デイーモは時折、このように凶星を当ててくる。というよりも、何もかもを知った上で相手をからかっている気がする。どういうわけだか、デイーモは他人の考えていることや過去をわかっている様子がある。それは知ったかぶりの可能性もあるが、この得体の知れない男はやはり何もかもがわかっているような気がしてならない。

「さて、まあ、お前の有意義な時間を邪魔して悪かったの。しかしこちらでも緊急での」

そうしてデイーモは、机の上にあった書類の一枚を手に取り、エンジンに差し出した。エンジはそれを受け取る。

chapter 02

「任務か？ さっきは休めだの何だの言っていたくせに」

「うむ。だが急ぎである上に、いまこの本部に残っているスピラ使いではお前が一番暇そうだったからな。お前、退屈で退屈で死にそうだったろ？ 昔のことを考えてしまいうくらいにの」

「その話は終わりだ」

その書類には、任務の内容が書かれていた。どうやら、このロゼラスの街を取り囲む防壁の外、そのすぐ近くにやっかいな魔物が巣を作ってしまったらしい。ターゲットとなる魔物は、このあたりでは『毒狐』と呼ばれるたちの悪い魔物だ。名前の通り狐の姿をしていて、毒を持っている。この毒が非常にやっかいなもので、死には至らないものの、体内に入ってしまうと高熱や感覚の麻痺といった症状が二週間は出てしまう。

「久しく大型の毒狐らしい。まあ所詮は雑魚なんだがの、ふふ、最近は本当にどの魔物も活発じゃ」

元気がありすぎて困る、とデューモは腕を組んだ。

「とにかく、その任務は任せたぞ。……あー、カロンもいま本部内にいるが、あいつは置いてってやれ。接近戦タイプだから、もしものことだがうっかり狐の毒を受けましたなんて、この時期非常に困るからな。ただでさえ少ないスピラ使いが、これ以上減ってしまうと話にならない。ま、頼んだぞ」

「行ってくる」

そうしてエンジはリーダー室を出た。そのまま階段を降り、一階へと向かう。ギルド本部内には、やはり誰もいない。人影一つすらもない。エンジが階段を降りてゆく音が、妙に響く。

だが二階と三階の間まで降りてくると、人の声が聞こえてきた。二階まで降りてくると、廊下に二つの人影があった。

「ティラティラ・ミュティララ草なんて、ボク、五年間錬金術師やってるけど、初めて聞くよ。他の錬金術師に聞いても、こんな草聞いたことないっていうし……」

「なんだかよくわかんないけど、とりあえずおいしそうな名前だね！」

「んー……見つけても食べないほうがいいと思うよ？　錬金術で使う薬草なんて、生だとほとんどが毒草になるみたいだし。いくらカロンでもおなか壊すよー？　でも確かにおいしそうな名前だね！」

そんな会話をしながら階段の方まで歩いてきたのは、レイモン族のカロンとウロウ族のロロロネだった。

「あ、エンジだ」

ロロロネがエンジに気付き、走り寄ってくる。ウロウ族の特徴である垂れた耳と、先端が筆のようになったロバのような長い尾が揺れる。ロロロネはポケットからくしゃくしゃの紙切れ一枚を出すと、広げてエンジに見せた。紙切れにはいくつかの文字列が書かれている。恐らく、錬金術のレシピとそれに使う材料が書かれているのだろう。ロロロネは錬金術師だ。

「エンジー、これ、知ってる？」

ロロロネはその文字列の一つを指差す。

『ティラティラ・ミュティララ草』

そう書かれていた。

「いや知らないな。つか、変な名前だな」

エンジは正直に答えた。すると、ロロロネはがつくりと肩を落とした。

「エンジでも知らないかぁー……」

そうしてレシピの書かれた紙を再びポケットへねじりこんだ。そこへカロロンがロロロネに声をかける。

「みんな知らないみたいだな。でも、ディーモなら絶対知ってるはずだよ。聞いてみれば？ ディーモなら、いつも部屋にいるし」

「そーだなあ。ディーモ、何でも知ってるからなあ……うん、行ってみる」

ロロロネは嬉しそうに尾を振ると、エンジの横をすり抜けて階段を上がっていった。その際に、エンジはロロロネの尾を掴んだ。ぴん、と尾が張る。

「おい、ロロ」

尾を掴まれたロロロネは「ぎゃあ！」と悲鳴を上げて振り返った。そして自分の尾の付け根の辺りを手で掴みながら、

「尻尾は掴まないでよう」

だからエンジは手を離れた。しかし腕を組んでロロロネに尋ねる。

「そんな妙な薬草使って、一体何を作る気だ？」

「それはねえ、ええっと……」

ロロロネは言葉を詰まらせ、そして首をかしげた。答えを探すように、目が泳いでいる。そうして出した答えは、

「ビヤク作るの！」

それだけ答えて、ロロロネは上の階へと行ってしまった。カロロンが首を傾げる。

「ビヤクって、何だ？ エンジ知ってる？」

「……お前は知らなくていい」

——媚薬って、あいつ、何企んでるんだ。

エンジはロロロネの上がっていた階段を見上げる。ロロロネと媚薬。一体何のために作るのだろうか。否、一体誰に飲ませる気なのだろうか。媚薬は誰かに飲ませるものだ、しかしロロロネが誰に飲ませる気なのか、誰に気があるのか、全く検討もつかない。そもそも、エンジはロロロネの性別を知らない。恐らくカロロンも知らない。ロロロネは男子にも見えるし、女子にも見えるのだ。——恐らく、男子だと思われる。ロロロネはカロロンと相部屋だ。

首を傾げるカロロンを置いて、エンジは階段を降りる。すると、カロロンが後を追ってきた。

「エンジ、どっか行くのか？」

「ああ、任務にな」

エンジは腰のポーチから任務内容の書かれた紙を取り出し、カロ
ンに渡す。カロンはそれを見るなり顔を上げた。

「オレ、手伝おうか？」

「いや、大丈夫だ。俺一人で十分だ」

カロンから任務内容の書かれた紙を返してもらう。それをポーチ
へ戻した。その時にちょうど階段が終わり、二人は一回のエントラ
ンスを進む。普段は多くのスピラ使いがこのあたりで会話をしたり、
任務の手伝いを募集したりしているが、今日は誰もいない。

「誰もいないね」

カロンがエントランスの中央に立って、周囲を見回す。

「ほんと、みんな忙しいのか……」

エンジも見回しそう言った。するとカロンが笑顔を向けてきた。

「でも、今日は帰ってくる人が多いみたいだぞ。センフィとシギ、
今日戻ってくる予定だし。オレ、あいつらと昼食食べる約束してん
だー」

「フレンフィールか？」

「そう」

フレンフィールとは、このノーウェン本部の近くにある酒場のこ

とだ。

「俺も任務が終わったら行こうかな」

エンジは開け放たれた外への扉へと進む。その後をカロンが追う。

「来るか？」

「ああ、多分行く」

そうして二人は本部の外へ出て、別々の方向へと向かう。

「じゃあ、後でな！」

カロンがエンジへ振り返って手を振る。

「ああ」

エンジも手を振り替えし、そして任務の場所へと向かった。

chapter 03

克蘭・ギルド「ノーウェン」の本部は、ロゼラスの街の中央広場に面してある。普段から人通りの多いこの場所から伸びた大通りを進み、そして裏路地へと少し入れば、酒場「フレンフィール」がそこにある。小さい酒場ではあるが、賑わいに溢れているのが常の酒場である。「ノーウェン」のスピラ使いはもちろん、他の街から来た別の克蘭・ギルドのスピラ使いや、どこにも属さないスピラ使いが食事のためや欲しい情報を入手するために利用している。スピラ使いだけではない。街の住人達や、旅人、商人も利用する。「フレンフィール」はその料理の味と店主の容貌で、ロゼラスの街の外でも有名な酒場だ。

そして今日も、「フレンフィール」はいつもと変わらず賑わっていた。ただ、その賑わいが普段よりも弱い。店内は人で溢れているが、それも普段と比べて少ない。スピラ使い達が多忙である影響が出ているのだ。

弓使いのヒューマ族の少女、センフィはそんな酒場の二人席であるテーブルに、一人座っていた。椅子に弓矢をかけ、テーブルに頬杖をついている。テーブルには水の半分入ったグラスが一つだけで、まだ何も注文していないらしい。暇そうに店内を眺めている。

ドアベルを鳴らしながら扉を開け酒場の中に入ってきたカロンは、すぐにそんな様子のセンフィを見つけた。カロンは少し大股で進み、そんな仲間のテーブルへとやってきた。

「早くない？」

そう苦笑いして、背負った剣を降ろし壁に立てかける。センフィは頬杖をつくのをやめて、

「早く帰ってこられたのよ。簡単な任務だったし」

グラスを手に取り一口飲む。カロンはセンフィの正面に座って、周囲を見回す。

「シギとウールカは？」

そしてセンフィにそう尋ねる。今日は、任務に出ていたセンフィとシギ、そしてウールカの一行が帰ってくる予定であり、またカロンは彼らと昼食を摂る予定だった。だがセンフィは目前にいるが、シギとウールカの姿が見あたらない。

「あの二人はね、続けて任務があったのよ」

センフィが答える。

「三人での任務が終わった後、俺たちはまだ任務があって行くところがあるから先に帰ってろって、言われてね。それで二人と別れて帰ってきたのよ。帰ってくるのが少し早かったのはそのせいよ、一人旅は自分のペースで進めるから」

「そっか、シギとウールカは明日か……」

今日は久しぶりに会えると思っていたカロンは、少しだけ気落ちした。なにせ、シギとウールカはここ一週間以上顔を合わせていない。そうになると、スピラ使いとして不安になる。スピラ使いは死と隣り合わせだ、もしかすると一週間以上前にあったその日が彼の最後の会話になってしまった、なんてことが起こりかねないのだ。

だから普段から仲間達とよく顔を合わせるようにし、任務から帰ってきた仲間がいればその無事を喜ぶようにこうして共に食事をした
りする。

「ま、あの二人だから大丈夫よ。あの二人、一人でも強いし。それ
にあの二人と一緒に戦うときは息ぴったりだしね」
「そうだな！」

センフィにそう言われて、カロンは笑顔になる。仲間に出会えない
ことを悔やんでいると、そのうち嫌な考えが出てきてしまう。縁起
でもないし、いつまでも気にしては自分のことに不注意になる
ため、こんなことはすぐにやめた方がいい。任務に出ている仲間達
へすることは、彼らが無傷で帰ってくることを願うことだけだ。

「よし、ごはん、ごはん食べよう」

カロンは椅子から立ち上がると、店内を見回し店主の姿を探した。
しかし店主の姿はない。この店主の姿は目立つため、普段ならい
つもすぐに見つけられるのだが、今日はどこにもいない。

「残念だけど、ネジューアはここにいないわよ？ 忙しいみたいで、
店の奥ですつと料理を作ってるみたいよ」

センフィがカロンを見上げる。

「料理を頼みたいなら、さっきから店と厨房を出入りしてる双子に
声をかけたら？ あの二人、今日はネジューアのお手伝いをしてい
るみたいだから」

「センフィは何食べる？」

「あたしはまだいいや。もうちょっと店が空いたら食べようかな、

ネジユアもあの双子も忙しそうで、ちょっと声かけにくいのよ」

「なるほどね。そう言われると、声かけにくいなあ」

すると、カロンは座ってしまった。そしてがっかりした様子でテーブルを見下ろす。何かもの欲しそうに、しかし無心のようにじつとテーブルへ視線を落とす。見かねたセンフィは苦笑いを浮かべた。

「そんなにおなか空いてるのなら、頼めばいいのに。あんたもうおなか空いて死にそうなんでしょ？」

「うう、でもいまお店忙しいんだろー？」

と、不意にカロンは何かに気づいたように顔を上げた。

「てかこのテーブル狭くない？ オレの頼んだ料理、置ける？」

「五皿くらいまでなら平気でしょ？ 四皿があんた、一皿があたしで」

「エンジの分は？」

唐突にカロンがそう言ったので、センフィは「え？」と困惑の表情を浮かべた。

「エンジの分って？」

「エンジを誘ったんだ。後から来るって言ってた」

「なんでそれを早く言わないの？ テーブル移動しなきゃじゃない。ここ、二人しか座れないのよ？」

センフィが呆れる。そして店内を見回し空いているテーブルを探すも、どこもすでに埋まってしまっている。しばらくの間、テーブルが空く様子はなさそうだ。

「来たときにすぐにそう言ってくれば、席とれたかもしれない。エンジはどのくらいで来るの？」

「んー、三十分くらいしたら、かなあ。いま、外壁の毒孤を退治しにいったから」

それを聞いたとたん、センフィははっとした。

「ちょっと待って、外壁の毒孤退治って……どこの門近く？」

そうセンフィに聞かれ、カロンは記憶をたどる。「ノーウェン」本部を出る少し前にエンジから見せてもらった、彼の任務内容の紙には、なんと書いてあっただろうか。毒孤が街を取り囲む外壁近くに巣を作ってしまった、旅人や商人達が街の中に入ってこれない、と書いてあったのは憶えている。大型の毒孤の姿を確認した、というのも書いてあった気がする。数人の旅人達が被害にあったとも書いてあった。場所は……どこだったろうか。

「多分……北門だと思う。北の村からやってきた旅人が被害を受けたって、書いてあったから」

「北門……ね」

センフィは何故か顔をしかめた。しかしそれはすぐに苦笑いとなる。手に負えないわがままな子供を見るような、そんな表情だ。そうしてセンフィは言った。

「エンジ、多分来ないわ。このままこのテーブルで食べよう？」

だからカロンは首をかしげた。

「北門だと、なんかあるの？」

「うん……」

するとセンフィは少し答えにくそうに、

「今日ね、確か、あたしだけじゃなくてルーナも街に戻ってくる予定なのよ、北から」

「あー……」

それを言われて、カロンは全てを悟った。

「あの二人、下手すると会っちゃうのかぁ……」

エンジとルーナ。それは「ノーウェン」の中でも強い二人のスピラ使いとされる反面、恐ろしいほどに仲が悪い二人のスピラ使い。

互いに互いを避けあう、まさに犬猿の仲の二人。互いに会話をしようとしないうし、話題に出そうともしない。しかし、いがみ合うことはあっても文句を言ったり攻撃をしようとはしない。出会ったときはただ睨み合うだけ。不仲であることが一目瞭然の、二人。

「あの二人のスピラのぶつかり合い、ほんと、凄い音がするよなあ」

カロンが苦笑いをしながら椅子の背もたれに寄りかかる。センフィも苦い顔をした。

「あたし、あの音本当に苦手なのよね。特にあの二人のはもう無理！ あたし達もさ、強い魔物に出会ったときにそのスピラとあたし達のスピラが

ぶつかり合って音がするけれど、あの二人の音はそれとは比べものにならないほど大きな音がするし、鋭いじゃない？ しかも空気が

ピリピリするし……敵意むき出しのスピラよ、あの二人」

「センフィはそういうスピラの動きに敏感だからなあ。オレは音が鳴ってるなーってだけしかわかんなかったけど」

「あの二人の部屋が隣同士だったときのこと、憶えてる？ 二人が部屋の前で会うと、いつつもスピラの衝突が起きてたとき。あの頃あたしルーナと相部屋で、毎日部屋の外でキンキンキン音鳴ってて死ぬかと思ったんだから！ あの音、頭にものすごく響くのよ！？」

センフィはそう叫んだとたん、急に萎えた。テーブルに肘をつき両手で顔を覆う。そして思い出したくないのか、か細い声で続けた。

「一番つらいのは外で二人がスピラのぶつけ合いを始めて、その後ルーナが部屋に戻ってきた時よ……その後ルーナが部屋に戻ってくると、部屋の中が急激に冷たくなるのよ……。ルーナのスピラは魔力だから、ルーナがやろうとしなくても勝手にその感情を映し出すのね……。もの凄く冷たいのよ。しかもそれだけじゃない、空気が肌を刺すの。例えばじゃないわ、本当に空気が痛いんだよ」

センフィは長い溜息を吐くと、思い詰めた人のように自分の髪をくしゃくしゃと両手で握り引っぱり、そしてテーブルに自分の頭を落とした。ごん、と鈍い音がする。苦悶した様子で言葉を漏らす。

「あの頃を思い出すと頭が痛くなるわ……」

「そういや、センフィはそれで倒れたっけ……」

カロンは数年前のある日、突然センフィが倒れたのを思い出す。スピラを感じやすい体質だった彼女が、エンジとルーナのスピラにとうとう限界を迎えたときのことだった。それでようやく見かねたデイーモが、エンジとルーナ、センフィ、そしてエンジと相部屋だ

った自分を別々の部屋に移した。自分は二階でロロネロと相部屋に。センフィは一階で見習いのスピラ使いと相部屋に。そしてエンジとルーナは三階の端と端にある一人部屋へ。もともとスピラ使いが減少しているため、三階は誰も住んでいなかった。これなら衝突が起きて誰も迷惑しない、と思ってディーモは二人に部屋を与えたのかもしれないが、どうせなら同じ階じゃなくて別の階にすればいいのに、とカロンは思う。一から二階までは相部屋となる部屋であるが、三階四階は一人部屋となっている。当時も今も、四階の部屋が全て使われているわけではないのに、何故二人を同じ階にしたのか疑問だ。

「今日の北門の見張り番、可哀想ねえ」

センフィがテーブルに突っ伏した状態で顔を上げる。疲れている。

「あの二人の衝突、本当に強烈だから、たとえスピラを使えない人間でも少しだけそういうセンスのある人だったらびり来ちゃうわよ？　しかもそういうセンスがあるだけで、スピラ使いじゃないから衝突に耐性ないし、運が悪いと気絶するわね。あたしの中じゃ、あの二人の衝突の中でまともに立っていられると思うのは、あの二人以上に強い人か本当にスピラを使いこなすセンスのない人か、あんたみたいに鈍すぎる人くらいね」

「悪かったな、鈍くて」

カロンが口を尖らした。しかしセンフィが首を横に振る。

「悪く言ったつもりはないのよ。むしろそれも才能の一つよ。スピラの波を感じないあんたは、例えどんな敵でも突っ込んでいけるじゃない。あたしや他のスピラ使いが、敵のスピラに圧されている中でも」

「でも、それって危機感ないってことだよな？　オレ結構危ないんだぞ」

「こっちは危機感ありすぎて仲間のスピラでダウンするのよ？　しかも敵が強すぎてもあんたみたいに勇敢に立ち向かえない。離れた場所で見てるだけ。それより全然マシじゃない。自分が情けなくて泣けてくるわよ、もう」

そうしてセンフィは半分だけ水が残っていたグラスを手に取り、乱暴に飲み干す。そうして空になったグラスを逆さまにし、中に指を数本入れそれを軸にしてグラスを回す。透明なグラスは店の明かりを反射して輝いている。

「もし、いま北門にルーナがやってきてエンジンと会って、それでそのエンジンがこの店に来たら最悪よ。ルーナと会った後のエンジンのスピラは、もの凄くどろどろしてるのよ？　不機嫌の塊だわ。……ま、エンジン、不機嫌になったら多分こっちこないと思うけど」

chapter 04

この大陸にあるほとんどの街は、厚く高い外壁に囲まれている。街を魔物から守るためである。

ロゼラスの街も例外ではない。ただ、この街は他の街と違ってその外壁が頑丈に作られている。十年前の『黒の日』以来、外壁が強化されたのだ。

大規模な魔物の襲撃。数多の魔物がこの街に押し寄せてきた。魔物の王とも呼ばれるドラゴンまで姿を現し、沢山の命が奪われた。街に住む人々も、戦いに出向いたスピラ使い達も、その多くが死んでいった。一体何故魔物達がこのようなことを起こしたか分からないが、十年経ったいまでも、ロゼラスの街の人々に深い傷を残している日。それが『黒の日』だ。

外壁近くまでやって来たエンジは、その高い壁にある門を見つめた。外壁には東西南北と門が四つあり、普段それらは閉められている。魔物の侵入を防ぐためだ。外から誰がやって来たり外へ出たいと望むものがいれば、門近くの見張り台にいる見張り番が門を開閉する。

見張り台は外壁の上にある。エンジは外壁についた梯子を上り、見張り台を目指す。地上から見張り台まで梯子を上るには、少し時間がかかる。

小さな小屋のような見張り台まで上がると、そこには誰もいなかった。おかしいな、とエンジは思う。見張り番がここにいないとおかしいのだ。

見張り台から周囲を見回す。正面を見ればどこまでも続く街の外、大地が広がっている。ロゼラスの街の近くは土と草原ばかりだが、少し奥を見れば森も見える。振り返れば人々で賑わうロゼラスの街。「ノーウェン」本部が見える。その前にある広場では、小さな子供達が元気よくはしゃいでいる。広場から伸びる大通りでは市が開かれ、普段から見かけるもの、普段あまり見ないものを商人たちが売っている。ロゼラスの街は、今日も平和である。

横を見れば、そんな街を取り囲む外壁が伸びている。見張り台からはその外壁に沿って足場が伸びていて、その先に人影が一つある。エンジはそれを確認すると、そちらへと向かった。

その人影はやはり、見張り番の少年だった。街の外、外壁の下を、口を少し開いて不安そうに見下ろしている。

「おい」

エンジはその少年の隣へ来て声をかけると、少年が気付いて顔を上げる。

「エンジさん、こんにちは」

「おう」

エンジは少年の名前を知らなかった。しかし彼が、確かカロンと同じ十六歳であったのは憶えている。

エンジは少年が見下ろしていたものを見下ろす。その真下の地面にはぽっかりと穴が開いていた。

「毒孤の退治に来た……あれが毒孤の巣か？ やけにでかくないか？」

「はい……ちょっと大きいけど、あれが巣です」

少年がそう答え、エンジはその毒孤の巣をじっと見つめる。暗い上に遠いため巣の中がどうなっているのかわからないが、何かがうごめいている気がする。と、その暗闇に小さな二つの輝きが見えた。それはすぐに奥へと消えてしまったが、間違いない、毒孤の目だ。エンジは少年に聞く。

「何匹ぐらいいるんだ？」

「十匹ぐらいいますよ。さっきまで、そのヘンをうろちよろしてましたから」

「十匹か」

そしてエンジはディーモから聞いたことを思い出し、

「大型の毒孤ってのは、どんなだ？」

「それが……もう毒孤って言っているのか……」

少年は困ったような表情を浮かべ、頭をかく。

「僕、思わず要請書に『大型の毒孤』って書きちゃいましたけど、多分あれ、毒孤じゃないと思うんですよ……」

「毒孤じゃない？」

「はい……その、尻尾が――」

少年が喋っている最中だった。

地面の穴から毒孤が数匹這いずり出てきた。ぴんとした耳、狼に

似たその顔つき、柔らかい毛に包まれた身体、尾。見た目は普通の狐と変わらないが、毒の牙と毒のスピラを持つ狐だ。エンジは素早くホルスターから銃を抜くと、何の予兆もなくその数匹に向かって引き金を引いた。赤い銃弾が毒孤に向かって飛び、当たり、弾ける。毒孤の身体が吹っ飛び、地面に倒れる。

「外に下ります？ 門開けますよ」

少年が見張り台に向かって進む。しかしエンジは首を横に振った。

「いい。ここから撃つ」

外で何かが起きていることに気がついたのか、再び数匹の毒孤が巢穴から出てきた。いま真下を歩いている毒孤は六匹、倒したのは二匹だ。エンジは出てきたばかりの毒孤たちに狙いを定め、また引き金を引く。放たれた三つの赤い銃弾はカーブを描いて毒孤へと迫り、狙ったうちの二匹へと命中する。しかし一匹の毒孤だけは寸前で銃弾の気配に気付き、跳ね上がり慌ててその場から飛びのいた。銃弾は地面に当たり、消滅する。エンジは間髪をいれず発砲を続ける。

「……毒孤がどんどん倒れていく」

エンジの横で、少年が目を丸くして呟く。

「やっぱりスピラ使いの人たちは凄いや……。僕もスピラが使えたらなあ、エンジさんみたいに毒孤を追っ払えるのに」

それから、つとエンジを見る。その視線に気付いたエンジは、銃口を毒孤に向けたまま少年を見返す。

「何だ？」

「いえ……その」

少年は困ったように首をかしげ、しかし口ごもりながらも答えた。エンジの銃と、そこから放たれる赤い銃弾——エンジのスピラを見ながら。

「どうやったら、スピラ使いになれるんですか？ やっぱスピラがないとなれないんですか？」

少年が不意にそんなことを尋ねてきたので、エンジは思わず一瞬だけ呆然とした。すると少年がはにかんだ様子で笑う。

「い、いや、僕もスピラ使いになれば、戦えるのになって思っ……見てるだけしかできないなんて、悔しいんですよ」

「ああ……」

——悔しい、か。

少年は羨ましそうにエンジの握る銃と倒されていく毒弧を見つめていた。他のスピラ使いが来て毒弧を退治しているときも、こんな表情で見つめているのだろうか。

力が欲しい、と思ったことはエンジにもあった。だから強くなろうと思った。

「スピラはな、誰にでもあるんだ」

少年に答えるつもりはなかった。それが少年のためだと思ったか

らだ。

だがいたたまれなくて、思わず言葉が出てしまう。

「スピラは心や魂の力だ。だから、生きているモノすべてに備わっている。俺達人にも、動物にも、植物にも、例えどんなに小さな生き物であっても、な。魂か心がある生き物なら、スピラを持っているってわけだ」

「……じゃ、じゃあ、僕にもスピラはあるんですか？」

少年が目を丸くする。その目には驚きと嬉しさの色が見える。エンジは小さく笑った。

「ああ、お前にもあるさ。だってお前、生きてるだろ？」

少年の表情がいよいよ嬉しそうなそれになってくる。しかしエンジはややしめ面を浮かべた。

銃の引き金を引く。毒孤がまた一匹、倒れる。

chapter 05

「ただ、使えるか使えないかが問題だ」

銃口を巣穴へと向ける、引き金を引く、銃弾が巣穴へと逃げようとした毒孤に当たり、炸裂する。一匹の毒孤が巣穴の前で力尽きる。

「使えるか、使えないか……？」

「そう。これが一番の問題だ。いくらスピラがあるからといって、使えなきゃ意味がないだろ？」

少年が首を傾げる。意味が伝わっていないらしい。

「……試しにやってみるか？」

エンジは握っていた銃の銃身を握ると、グリップの部分を先に少年へと差し出した。スピラを撃ち続けていた銃身は熱い。

少年は差し出された銃を見て、仰天したのかよろめきながら数歩退いた。両手の平を見せて困ったように振る。

「そ、そんな、いいですよ。その銃、大切なものでしょう？」

「ああ、俺がスピラ使いになってからずっと使っている、スピラを撃ち出す銃だ。試しに撃ってみろ、お前がスピラを使えるようなら、発砲できるから。それに、そう脆いものじゃない、壊れねえよ」

エンジは少年に笑いかける。少年はわずかに震える手で銃を受け取ると、握る。

「……結構、重いですね」

少年は銃を両手で握っていた。しかし狙いは定めず銃口を下に向けている。それをゆっくり上へと向けて、顔の前へと持ってきた。そしてそれをまじまじと見つめる。

「あ……傷、多いですね」

「まあ十年間使い込んでるからな。いまじゃ毎日手入れをしないとうまく動かないんだぜ？」

「ええ！」

すると少年は恐怖して銃をエンジの手に押し付けた。

「や、やっぱ返しますよ！　僕なんかがいじったら、壊しちゃいそうで……」

「だから平気だって、発砲するくらい」

そう言うと、少年は恐る恐る銃を握りなおした。そしてその先を、ぎこちない動きで外壁の外へと向ける。

「地面じゃなくて地平線のほうを狙え」

「……はい」

「それから右腕を真っ直ぐに伸ばせ。それで左腕は伸ばさないで軽く折る。じゃないと、狙いがうまく定まらないぞ」

「……はい」

少年がなれない様子で銃を構える。肩から銃を握る指先までが、小刻みに震えている。

「力を抜け。それで自然に引き金を引くんだ。力むな、自然に、ゆっくりだ」

少年は息を吸い込み、そしてゆっくりと吐き出す。不安げな目をゆっくり開き、そして地平線を見つめる。

ゆっくりと、引き金を引く。

カンッ、と、鉄を叩いたような、少しくぐもった音が周囲に一瞬だけ響く。

銃口からは何も飛び出さなかった。ただ少年が引き金を引いた瞬間、銃口の手で小さな光が爆発ししかし跡形もなく消えていった。少年が打ち出した銃弾は、発砲された直後、飛ぶこともなく消えてしまった。

「あ、あれ？」

少年が困惑した表情を浮かべ、銃を引き寄せ銃口を見つめる。銃口の中は、漆黒が続いている。

「エンジンさん、いまの、は？」

「ははっ！ おしいな！」

エンジンは困惑する少年を見て思わず笑った。銃を受け取ると、その銃身を見つめる。銃身はわずかに熱を帯びていた。

「お前、スピラ使えるじゃねえか」

「えっ？」

「ほら、撃ったとき光ただろ？ あれはスピラが使える証拠だ」

「ほ、ほんとですか!？」

少年が困惑しながらも、顔を輝かせた。

「じゃあ、僕、スピラ使いになれるってことですか？」

「ああ、センスはあるってことだ……」

エンジは少年にそう答える。しかしその表情を曇らせた。そのことに気付いた少年が、無言で首を傾げる。エンジはちらりと少年を見た。そして苦笑いを浮かべ、

「でも、スピラ使いにはなるな」

きっぱりと、そう言った。だから少年は啞然とした。

「え……?」

「お前、家族がいるだろ?」

エンジは突として少年に質問を投げかける。少年は「はい」と素直に返事をした。エンジは地平線の彼方を見つめながら、少年に言い聞かせる。

「スピラ使いは死と隣りあわせだ。いつ死んでもおかしくない。それに――」

毒孤の巣穴から、一匹の毒孤がゆつくりと出てきた。エンジが銃を構えて引き金を引くと、赤く輝く銃弾が発砲される。赤く輝くエンジのスピラは、また毒孤を捕えて炸裂し、倒す。

「スピラの使いすぎはな、寿命を縮めるんだ。だから、スピラ使い

にはならない方がいい。危険だし、すぐ死ぬから」

少年は無言でエンジを見つめていた。エンジは続ける。

「だからスピラが使える奴がいても、スピラ使いになることを強制しない。どうしてもなりたいて奴や、家族がもういない奴がスピラ使いになるんだ……死を覚悟でな」

もう毒孤が巣穴から出てくる様子はなかった。十匹の毒孤が真下に倒れている。まだいるかもしれないが、大体は倒しただろう。エンジは銃をホルスターにしまった。

「大体こんなもんだろう。下へ降りる、門を開けてくれ」

「は、はい！」

少年がぱたと見張り台のほうへと走る。そして見張り台にある大きなハンドルを回し始める。ぎぎぎ、と門が開いていく音がする。エンジは見張り台から梯子をつたって下へ降りると、門をくぐって外へと出た。街の中とは雰囲気ががらりと変わった景色が、目前に広がっていた。

毒孤の死体を避けつつ巣穴へと向かう。そうして巣穴近くへと来ると、巣穴の大きさがよくわかる。外壁の上から見たときには、これほどに大きいものだとは思わなかった。毒孤の巣穴は、大人が少し屈んで入れるほどの大きさだ。こんなに大きな巣穴は見たことがない。普通、毒孤の巣穴は子供が四つんばいになってやっと入れるほどの大きさだ。

「随分大きな巣穴だな……」

エンジは恐る恐る巢穴の中を覗いた。漆黒の闇が、どこまでも続いている。まだ数匹、潜んでいるかもしれない。

腰のポーチを開け、小さな茶色のボールを取り出す。クラン・ギルドの錬金術師が作った、手榴弾のようなものだ。中にスピラが詰まっっていて、少しスピラを与えれば時間を置いて爆発する。

「爆弾ですか？」

少年が見張り台からエンジを見下ろしていた。エンジは何も答えずに、そのボールを巢穴へと投げ込んだ。

数秒後、巢穴の中から爆発音が聞こえる。地面がわずかに揺れ、巢穴は砂煙と白い煙を吐き出した。肌が少しぴりぴりするの、スピラボールの中にあった圧縮された大量のスピラの爆発によるものだ。空气中に不可視のスピラが飛び散り、エンジのスピラと彼の周りを漂う彼のスピラをつつき、揺らすのだ。

見張り台を見上げれば、少年がまるで寒いとでも言うように自分の両腕を両手でさすっていた。空気中のスピラの振動を感じたらしい。

「ぴりぴりするのか？」

「はい……」

少年が苦笑いしながら答えるので、エンジも思わず笑い返した。自分もスピラになったばかりの頃、慣れないスピラの振動にあふしたっけ。いまでは強敵に追うことも、クラン・ギルドでのスピラの衝突も頻繁にあるので慣れてしまった。

chapter 06

と、いまだに砂煙を吐き出し続ける巣穴の中に、何かの影が見えた。

エンジは目を細め、巣穴の中を睨む。そしてポーチの中からもう一つボールを出すと、再び中へと投げ込んだ。

二回目の爆発、再び地面が揺れ、空気中のスピラが揺れた。巣穴から出る砂煙の量が増える。

その煙の中で、影が動いた。

——来る。

エンジがホルスターから銃を手にした、次の瞬間だった。

煙を吐く巣穴の中から、数匹の毒孤が牙をむいてエンジへと向かって飛び出してきた。間一髪、エンジは身体を捻って避ける。そして銃をすぐに構え、飛び出してきた毒孤へと振り返りながら発砲した。

背後には毒孤が三匹いたが、どの毒孤にも銃弾は当たらなかった。と、そのうち一匹の毒孤が紫色の光の球を吐きだした。毒のスピラだ。エンジはその光に向かって引き金を引く。発砲された赤い光は紫のとぶつかり合い相殺を起こす。

毒孤たちはその目でエンジをしっかりと捕らえながら彼の周りをゆっくりと進み、取り囲む。エンジは動かなかった。上の方から少

年の叫び声が聞こえる。エンジは銃を自分の身体に寄せ、毒孤の様子を伺う。目前にいる一匹の毒孤が、ゆらりと尾を振り目を細め、空気のおいでもかいでいるのか鼻先をひくつかせている。

不意に視界の隅で、何かが動いた。視線を素早くそちらへ向けると、毒孤が跳ねながらこちらを睨んでいた。尾と耳をぴんと立たせ、口からは牙を覗かせている。その毒孤はまるで挑発するように唸り、身体の前半分を地面につけ、そして尻尾を揺らした。しかしそれだけで、何かをしてくる様子はない。しかし、不意にまた跳ね上がると、そのままエンジへ向かって跳んできた。

エンジはその場から素早く飛び退き毒孤のタックルを避ける。跳んできた毒孤は地面へと落ちたが、そこに間髪を入れずに背後にいた別の毒孤が毒のスピラを吐き出した。エンジはそれも身をよじって避ける。すると今度は地面に寝転がる先ほど跳んできた毒孤が足に噛みつこうと牙をむいてくる。そして正面にいた毒孤も突進してくる。毒孤の一斉攻撃だった。しかしエンジはステップを踏むように突進してきた毒孤を避け、足下に寝転がる毒孤を蹴り飛ばした。そして先ほど毒のスピラを吐いてきた一匹へと振り返り、いままさにスピラを吐き出そうとしていた所に銃口の先を向ける。

だがエンジが引き金を引く前に、突如視界の外から現れた青い炎がその毒孤を飲み込んだ。

「!？」

エンジは驚いて目を見開いた。その青い炎はきらきらと輝いている。まるで夜空の星雲が地上に降りてきたような、炎というよりはダイヤモンドダストが流れになり濃い霞になったようなそれは、風に流されるようにしかし激流を下るような速さで宙を滑り、他の毒

孤をも飲み込みそしてエンジの周りを囲った。その渦巻く動きは轟くように恐ろしいものだが、そよ風が吹いているような音がしない。空よりも醒め海よりも深い青色をした星雲の静かな激流が、エンジを中心に渦巻いていた。エンジはどうすることもなく、銃をおろした。

——あいつか。

空気が肌を刺す。

渦巻く青い星雲は、徐々に勢いを失い弱まっていく。そうして見えた青い炎の向こうでは、一匹の毒孤が尻尾を巻いて逃げているのが見えた。そしてエンジン同様にその毒孤を見つめる人影も見えた。

その人影は、大きな杖を片手に握っていた。その杖の上部には青く輝く水晶が付いていて、青い星雲はその水晶から溢れ出ている。背を覆う長い髪が、風になびいていた。

その人物がこちらへと振り返る。長髪が波打って揺れた。そうして見せたのは眼鏡をかけた無表情で、よく澄んだ綺麗な瞳は射抜こうとするような勢いでエンジを睨んでいた。ほんの少しだけ童顔を残した、しかし美麗でよく整った容貌。肌は白く、唇は赤く、瞳は凛々しく晴れた空の色をしている。

「ノーウエン」の中でも力があるといわれている、ヒューマの魔法使いルーナが、エンジを睨んでいた。

青い炎が空気に溶けて消えていく。その火の粉が風に舞っている。肌に触れると、それは冷たかった。風も冷たく、数秒に比べて気温がずいぶん落ち込んでしまったようだ。ルーナはエンジを睨んだま

ま、動かなかった。ただその手に握る杖の水晶の輝きが弱くなる。スピラの中でも自然を操ることの出来る上級スピラー——魔力の放出を止めたらしい。

エンジもルーナを睨んだまま、動かなかった。銃を握る片手に、自然と力が入る。自分の中で、スピラが徐々に勢いを増しながら燃えているのを感じる。勢いをもったそれはエンジの中に止まらず、姿形をなさずに外へと出て行く。こうした「姿形のない不可視のスピラの放出」はスピラ使いにとって自ずと常に行っていることだが、いまは違う。感情の昂ぶり、強いスピラ、その二つを感じて魂が燃え上がっている。

突としてルーナの杖の水晶が眩しいほどに輝き出す。相手も感情が昂ぶり、こちらのスピラを感じたらしい。水晶の周りでは、星のような小さな輝きがふわふわと漂っている。

ルーナの見えないスピラが彼女の周りに広がる。それはエンジの見えないスピラと共に周辺の空気を混ぜる。とたんに空気がのしかかるように重くなり、どろりとした粘りけのある水のように変化する。まるで時間が質量を持って止まってしまったかのようなだった。その中で、二人は互いを睨み合う。

——余計なことをするな。

エンジは心の中で呟く。するとエンジのスピラがルーナのスピラを押す。きーん、と透き通っているがあまりにも高い音が鳴る。二人のスピラが衝突したのだ。するとルーナのスピラが押し返してくる。またスピラの衝突音がして、今度は空中で輝いた。

それからはスピラの衝突音が続く。二人はスピラの競り合う。衝

突音が激しさを増し、頭が割れそうなほどに大きく高い音となる。
しかし二人は微動だにもしない。

――……。――。

衝突の際、ルーナの感情が一瞬だけちらつく程度に感じる。しかしそれはあまりにも複雑でいりくんでいて、何を考えているのかわからない。だが確かに感じるものはある――怒りと憎悪、この二つだけははっきりと分かる。

――そんなに言わなくても、こっちからお断りだ、馬鹿野郎。

だからエンジンもその感情をそっくりそのまま返す。また、スピラの衝突音がする。

こちらを睨む眼鏡の奥のルーナの瞳には、瞳にルーナを移す自分の姿が映っていた。スピラを抑制せず、ありのままの感情をぶつける。どちらも引かない。どちらかが引くまで、どちらも引かない。

スピラの衝突音が響く。

エンジの背後、上空で物音がした。

すると不意にルーナのスピラが治まり、エンジンもつられてスピラを抑制する。しかし相手を睨んだままだ。だがルーナはエンジンではなく、エンジの背後、上部を見ていた。エンジンも振り返ってそれを見るとそこには見張り台があって、ところが肝心の見張り番の姿がない。

どうやら倒れたらしい。スピラが衝突しあうあの空気に耐えられ

なかったようだ。

エンジは我に返り、走って門をくぐり見張り台へと上った。案の定、そこでは見張り番の少年が青い顔をして倒れていた。

「おい、大丈夫か？」

声をかけ揺さぶり、身体を起こしてやる。少年は気絶していないものの、瞳は小刻みに揺れ呆然とした表情を浮かべていた。これではすぐに治る様子がない。ロロネに、スピラによる症状の気付け薬を貰ってこなければ。

少年を寝かせ、街へと振り返り下を見下ろす。すでに門をくぐって先を進むルーナの姿があった。エンジはその背を、また、睨む。

しかしエンジは知らない。

エンジが少年の様子を見ている際に門をくぐってきたルーナが、一瞬だけ彼を振り返って首をかしげた。

「……」

訝しむように少し不安げな表情を浮かべ、しかし彼女は何も言わずエンジに背を向けた。

chapter 01 (前書き)

誤字脱字やおかしな点があるかもしれません。ご了承ください。
報告してもらえるとありがたいです。

chapter 01

杖の先についた白い半透明の球体が、全てを飲み込むような暗闇を照らしていた。しかし暗闇はそれすらをも飲み込むようとしている。そんな暗闇の洞窟の中を、エンジ達は進んでいた。

先頭に光を灯した杖を握るシギ、その後ろにはエンジとセンフィ、そして最後尾にはカロンとロロネと、五人はまとまって進んでいる。明かりは二つだけ。魔法使いのシギが握る杖と、錬金術師のロロネが被る帽子からひょっこりと生えた二本の触覚の先にある小さな二つの明かりだけ。しかもそのロロネの帽子の明かりは、その目の前しか照らし出さない。実際に周囲を照らしているのはシギの魔法だけだった。

「じめじめするうー、キモチワルイ！」

エンジが後方へ振り返ると、ロロネが跳ねていた。帽子の明かりも跳ねている。

「まだなのぉー？　ボク耐えられない！」

「我慢しろ。俺だって嫌だ」

そう溜息を吐くと、ロロネはふくれ面になりこちらを睨んでいた。不機嫌そうに尾が揺れている。と、その尾をロロネの隣を歩くカロンがシンバルを鳴らすかのように両手で勢いよく捕まえる。ばしん、とその音が洞窟内に響く。

「痛い！」

悲鳴が反響する。ロロロネが飛び上がり、自らの尾を掴むカロンの手に平手打ちした。先ほどのカロンのように派手な音はしなかったものの、それもまた響く。するとカロンは両手をそのままにしたまま、痛がる様子もなく首をかしげて、

「何するんだよー？」

「それはこっちの台詞だよ！ 尻尾はやめて、痛いから」

「でも、ぴこぴこしてると気になるんだけど」

カロンが無邪気な笑顔を浮かべる。しかしロロロネは自らの尾からカロンの手を引きはがすと、その尻尾の先を自分の手で優しく握り、自分の前へと持ってくる。もう尾を他人に触らせる気が無いらしい。

「魔物にまで遊ばれたら困るもんな」

そんな様子のロロロネをエンジはからかう。冗談のつもりだった。しかしロロロネは顔を青ざめさせて震え上がった。

「尻尾ちょん切られたらどうしよう……」

ロロロネは自分の尾を見つめ、そして服の中へと押し込んだ。そんなに心配しなくてもエンジは思ったが、この湿気に寒さだ、ロロロネは大分気が滅入っているのかもしれない。ウロウ族は水や寒さに弱いのだ。特に水に関しては、少しでも濡れること、湿気が多いこと、その程度でも耐えられない。

水が滴る音が洞窟のあちこち反響して耳に届く。五人の足音も響いている。ごつごつとした岩の足下は濡れている上に水溜りがところどころにあり、気をつけていないと滑ってしまふ。空気は冷たく

冬のもののようで、ヒルのような生き物が多く見られる。壁、足下、天井、その青白いヒルのような生き物が多く張り付いている。そのヒルはシギの光に照らされると、それを嫌って五人から離れていくが、時折興味本位なのか、虫のようにシギの明かりを狙って落ちてくる。またエンジ達をも狙って落ちてくる。いままで落ちてきたものは全て避けてきたが、落ちてきたことに気付かず身体にくっついていいるのがいるかもしれない。そう思うと、気持ち悪くて仕方がない。

「わぁ！ やだ！」

センフィが悲鳴を上げる。

「くっついた！ やだ、とって！」

青ざめた顔で自身の手の甲を見ている。手の甲には一匹のヒルがくっついていいる。

するとシギが振り返る。無口な青年の顔が明かりに照らし出されている。シギは無言でセンフィの手の甲にいるヒルを見ると、素手でそれを掴み取って壁へと投げつけた。ぺちやり、と気味の悪い音がする。

「何なのよこの洞窟、ヒルだらけじゃない。こんなところにいたら、いつかヒルまみれになって、血を吸われ続けて、死んじゃうんじゃないの？」

センフィは壁に張り付いている何匹ものヒルを見て、身体を震わせる。

「……こんなところに、大型の魔物なんているのか？」

シギも呟く。確かにその通りである。こんなところに魔物が住んでいれば、この沢山のヒルに襲われてしまわないだろうか。しかし巨大な魔物がこの洞窟を住処にしているという。何らかの方法でこのヒルと共存しているのかもしれない。だがその魔物を早く見つけないと、こうしてさまよい歩いている自分達がヒルの餌になってしまう。

事の発端は三日前。ディーモのものに、一匹の伝書鳩が手紙を携えてやってきた。ロゼラスの街から北東へ大分離れた村からの手紙だった。だがその手紙の内容によると、その村は壊滅したらしい。巨大な魔物に襲われたそうで、この手紙は近くの別の村に逃げ延びたその壊滅した村の住人によって書かれたものだった。要件はその魔物退治の依頼。

そうしてその任務を受けたエンジ達は近くの村を拠点にし、こうして洞窟を探求していた。しかし一向に何も見つからない。長い間この洞窟を歩き続けて数回休みもした。だがこの洞窟はずっと奥が深いらしい。

不意に、先頭を歩いていたシギが立ち止まる。思わずその背にぶつかりそうになるも、エンジも立ち止まった。すると背にカロンがぶつかってきた。全員がその場に立ち止まる。

「どうした？」

エンジはシギに尋ねた。するとシギが杖を正面へとゆっくり振った。これから行く先が光に照らし出され、そこにいたヒルが光を嫌って這い逃げる。そうして照らし出された行く先は、二手に分かれ

ていた。

「どちらへ行く？」

シギが振り返る。エンジは首を傾げ、センフィに聞いた。

「なんか、わかるか？」

「あんまり……」

センフィはそう言いつつ、シギの前へと進み分かれ道の中央へ立つ。そしてまずは左の道へ少し入り、それから出てきて今度は右の道へと入り、そうしてシギの前へと戻ってきた。困惑したような表情を浮かべ、二つの道を睨み、

「正直、何もわからないわ。ただこっちの道のほうから風が吹いている気がする……」

と、左の道の方を指差した。左の道は、右の道よりも広い。

「……左の道にいるかもな、その巨大な魔物。こっちの方の道が広い。でかい魔物なら、こっちの道を通るだろ」

エンジは言った。すると突然背後からロロロネが飛び出し、左の道の前へと躍り出て空気の臭いでも嗅ぐような様子で虚空を見つめ、そして目を閉じた。服の下に押し込んでいたはずの尾が勢いで顔を出し、ゆらゆらと猫のそのように揺れる。

「……乾いた空気」

寝言のように、ぼんやりと呟く。

「太陽の匂いがする……暖かいの……」

そうして左の道へと駆け出してしまった。慌ててシギがその背に手を伸ばす。しかしその手も届かず、ロロロネは洞窟の奥へと姿を消してしまった。小さな二つの明かりが、消える。

「ロロ待って！ 一人じゃ危ないわ！」

センファイが叫び、その声が洞窟内に反響する。しかしロロロネが戻ってくる様子はない。

「追うぞ！」

一人にはできない。エンジが叫ぶと、シギが駆け足で先に進む。明かりが洞窟の奥へと消えていき、その後をセンファイが追う。そうしてエンジも追おうとしたが、不意に背後のカロンに服の背を掴まれた。驚いて振り返ると、エンジではなく虚空を見つめたカロンが、怯えた表情を浮かべていた。

「待って、オレ、真っ暗だと何にも見えないよお……！」

亜人であるレイモン族は、一族そろって鳥目で暗いところでは何も見えない。ロロロネの明かりが消えて、しかしまだ向こうにシギの明かりがあるにもかかわらず、何も見えなくなってしまったらしい。

「シギ！ 戻ってこい！」

エンジは叫んだ。すぐにシギとセンファイが驚いた表情をして戻っ

てくる。エンジは二人がやってくると、シギのもとへとカロンの背を押した。それで二人は何が起こったのかを理解したらしい。

「離れるな」

シギはカロンのそう言うのと、洞窟の奥へと進んでく。カロンはシギの背にぴったりくっついて進む。エンジとセンフィもその後を追った。

chapter 02

四人の足音と水の音が洞窟内に響く。耳を澄ませば、ロロロネの足音らしき音も遙か遠くから響いて聞こえる。暗い中を駆け抜ける光に驚いたヒル達が逃げている。と、エンジはふと気付く。壁に張り付いているヒルの数が、進むにつれて段々と減ってきている。それと共にこころなしか、冷たい空気が暖かくなってきているように感じる。洞窟の幅が、徐々に広がっていく。――そうして暗闇の先に小さな光が見え、四人はその光の中へと飛び込んだ。

エンジはその眩しさに目を瞑り、立ち止まった。しかし瞼を通してその光は眼球を刺激する。周囲が不意に春独特の暖かな空気に変わり、重い湿気も跡形もなく消え去り、眩しい光の中で世界が一変した。全ての音が消え、一瞬だけ静寂になる。清い水のせせらぎ、そよ風に揺れる木々の葉の音が聞こえる。それから心地のよい甘い匂いを感じた。

「何だ……」

目をゆっくりと開ける。それでも視界は光で真っ白に染まっている。しかし段々と目が慣れてくると、その様子が徐々に見えてきた。

そこは岩壁に囲まれた、楽園のような場所だった。ぽっかりと丸く開いた上空から青空が見え、温かい日光が差し込んでいる。その日光の差し込んだ先の地面を綺麗な黄緑色をした草が覆い、また美しい花も咲いている。大樹もその草地を囲むようにしてあり、どの木にも水彩画のように淡くしかし鮮麗な桃色の大きな花をいくつも咲かせている。甘い匂いがするのは、どうやらこの花のためらしい。

周囲を見回せば、花以外にも実をつけた木がある。その桃のような実をつけた木はどれもたわわに実をつけ風に揺れていた。草地の奥、影の落ちる場所には岩壁に面して大きな池があり、日光に照らされた一部がきらきらと輝いている。近くの岩壁の隙間から水が飛び出し、その池に流れ込んでいた。そこは水彩で書かれた鮮やかな風景画が、命をもって実現したような場所だった。

ロロロネはそんな絵に描いたような美しい風景の、草地に寝転んでいた。上機嫌な様子で尾を振り、日光に全身を晒している。

「わー！」

そう声を上げてロロロネ同様に草地に身を投げたのはカロンだった。草地に寝転ぶと仰向けになり、深呼吸する。

「こんなところがあったなんてな……」

エンジンも思わず口に出してしまう。それほどに、ここは美しく、どこか神秘さも漂う場所だった。

日向へと進むと、日光がとても暖かかった。先程まで寒くて暗い気味の悪い洞窟にいた身だ、久しぶりの外の空気と日光がひどく身にしみた。そうしてエンジンは伸びをする。

と、シギが早足で歩き出したかと思うと、寝転ぶロロロネの横に立ち、見下ろす。気持ちよさそうに日光浴をしていたロロロネだが、そこへ影が落ち首を傾げてシギを見上げた。するとシギは、何の前触れもなく、片手に握る杖でロロロネの頭へ振り下ろした。杖の先の先程まで輝いていた球体がロロロネの頭に直撃し、派手な音を立てる。いまだに頭に被っている触覚のような二つの明かりが跳ねる。

「痛いっ！」

ロロロネが強打された頭を手で押さえて飛び上がる。そして涙目になって困惑の表情を浮かべ、シギを見上げた。シギは、怒っているような様子でロロロネを見下ろしていた。

「何……？」

少し怯えた様子でロロロネは身を縮めた。シギは何も言わずに見下ろし続ける。すると、シギの背後からセンフィが顔を出した。

「あんたが勝手に一人で走り出すから、怒ってるのよ。何もなかったからいいけど、もしここに例の巨大な魔物がいたら、あんた、どうなってたと思ってるの？ 危ないじゃないの」

「……ごめんなさい」

ロロロネはそう、悲しそうに誤った。いまになって我に返ったのだろう。シギは深く溜息を吐き、そうしてもう一度ロロロネを見下ろし、周囲へと視線を移した。

「気をつけろよ、お前はいつもそうやって勝手に動くんだから」

エンジは腰に両手をロロロネを見下ろす。あーい、と、ロロロネは拗ねたように返事をし、しかし立ち上がると嬉しそうに周囲を見回した。

「でもここ、すごくない？ まるで夢見たいに綺麗だよ！ 見たこともない花や果物があるし、そうだ、持ち帰って調べてみよう！ それで新しい薬を作るの！」

そうしてロロロネは立ち上がると、近くの花咲く木へと走っていった。

しかしエンジはこの場所に違和感を覚えていた。どうも妙な雰囲気があり、顔をしかめて周りを見回す。カロンが寝転んでいる。ロロロネが木を見上げている。センフィは影にある池を見下ろしている。

シギと目が合う。シギは相変わらず無表情でこちらをみつめていた。そしてつと、首を傾げる。シギもこの場に、何か違和を感じているらしい。

エンジは一体これは何が原因なのかと、その理由を探し今度は細かいところまで周囲を見回す。あの洞窟が地獄なら、ここは間違いなく楽園だろう。清らかな水に沢山の果物、自然に溢れている。もちろん先程の洞窟の中のようにヒルなんていない。あのヒルは洞窟のように寒く暗い場所にしか住めないのだろう。

と、エンジはそう考えて、違和の正体に気がついた。

ここには動物の姿が見られないのだ。

水もあり、食べ物もある。環境もいい。そうであるにも拘わらず、動物の姿が一つも見られない。鳥のさえずりすら聞こえない。こんな場所なら、鳥が群れていてもおかしくないのに。

「動物がないんだ」

エンジはシギに言う。シギは首をかしげたままだ。

「動物がいなんだよ。こんないい場所なら、動物がいてもおかしくないだろ？　てか、動物がいらないとおかしいんだ」

「……何故動物がいらない？」

「それは……」

そう言われて、考える。何故こんなにもいい環境に動物が一匹もいないのか。考えられる理由は、一つ。

「ここはとんでもない奴がいるってことか？」

「……巨大な魔物」

二人は顔を見合わせ、確信した。エンジは足下に寝転がるカロロンをつま先で軽く小突き、「起きろ」と言って立たせる。そしてロロネが向かっていった木の根元へと行き、いつの間にか木に登って花と実を集めていたロロネを見上げる。ロロネはエンジに気付くと笑顔を見せる。そして手に持つ沢山の花と実を見せ、

「ねえ見て！　いっぱい集めたよ」

しかしその笑顔は消えた。

「でも鳥がいらないね。珍しい花と実があるから、珍しい鳥もいるのかなって思ったけど、全くないね」

「ああ、他の動物もいないんだ。とりあえず、降りてこい。どうやら俺達は地獄から楽園へ来たと思ったが、ここはまだ地獄の続きらしい」

ロロネは首をかしげた。しかし何も言わずに降りてきた。抱える沢山の花と実を肩にかけてバッグへと押し込む。

次にエンジはセンフィを呼ぶ。

「センフィ！ ちょっと来てくれ」

しかしセンフィは影の落ちた大きな池のほとりに立ったまま、動かない。池を見下ろしている。

「センフィ！」

もう一度声をかける。しかしやはりセンフィに動く様子はない。聞こえているのだろうか。カロンが呟く。

「センフィ、どうしたんだろう」

と、センフィがこちらを振り返る。その表情は何故か少し青ざめていて。

エンジはセンフィのもとへと駆け寄った。何かあったのかもしれない。しかしセンフィの隣に来てみるも、彼女に変わった様子はない。ただ、顔をこわばらせて池の中を見下ろしている。

涼しげなせせらぎが間近に聞こえる。水面は陽光に柔らかく輝き、静かに波立っている。池は思った以上に底が深いようで、覗き込むと漆黒がどこまでも続いていた。センフィはその闇を指差す。

「何かいる。この奥に、強いスピラを感じるの……」

そうしてエンジへと顔を向ける。

「間違いない。この池の底に、例の巨大な魔物っていうのがあるわ」

chapter 03

「どうする？」

池のほとりに立ったエンジは、振り返って尋ねる。

「センフィが言うには、その魔物、この奥でいま眠ってるらしい。寝込みを襲えば簡単に退治できると思ったけど……相手は水の中だ」「爆弾放り込もうか？ あ、それか魔法をぶち込むのもいいかなあ？」

シギの背に上り肩を掴まったロロロネが尾を振りつつシギを見た。大きく垂れ下がった耳の片方が、シギの頭の上に乗っている。一体いつの間にこうなったのだろうか。しかしシギは頭を傾けているも、迷惑そうな表情は一切していない。いつも通り、無表情だ。

シギはロロロネを背負ったまま池のほとりまで進み、そして中を覗き込んだ。

「……俺の魔法じゃ底まで届かない。そもそも水と相性が悪い」「じゃあ、爆弾？」

ロロロネがバッグから黄色い紡錘形のそれを一つ取り出す。その手に収まる程小さい、レモンのようなスピラボール。しかし見た目に反して恐ろしい威力を発揮する、ロロロネお手製の代物だ。だが、

「お前のレモン爆弾でも、底までいかないだろ」

「うう……」

「じゃあ、どうするの？」

センフィが腕を組み、首を傾げる。エンジも腰に両手をあて、溜息をついた。

「どうするって……潜るか？」

「潜るのか！」

そう言ったとたん、カロンの跳ねた。

「潜って寝てる奴のところまで行って、ぼこぼこにするんだな？」

「ああ、そういうことだ」

「でも……誰が潜るの？」

センフィが困惑した表情を浮かべて両手の平を見せた。そして周囲の仲間を見回し、

「ロロは水ムリでしょ？ ウロウ族はみんな水がダメだから。それにシギも自分の魔法が水と相性悪いって言うし、私も弓矢よ、水の中じゃあ、ちよっとね……。カロンは鳥目だから底まで行って見えるかどうか……。それでエンジは……カナヅチでしょ？ 正直いま、池のほとりに立ってるのも嫌なんじゃないの？」

「ああ……」

そう言われ、エンジは申し訳なさそうに池のほとりから離れた。正直、ここに立っているのは辛かった。水を見ていると吸い込まれそうになり、落ちてしまいそうになる。

「じゃあ、オレ行く！」

と、カロンが両手を挙げた。

「オレ行って、ぼこぼこにしてくる！　それで誘き出してくるから、準備しといて！」

「でもお前、暗いと何にも見えないだろ？」

「大丈夫！　多分見えるから！」

そうしてカロンは体験を手になると、エンジの止める声も聞かずにすぐ池の中へ飛び込んだ。派手な音がし、水しぶきが上がり、水面が波立つ。中を覗き込めば、底のほうへと泳いでゆくカロンの後姿が見えた。その姿が徐々に闇へと消えていく。

「あーあ、行っちゃった」

ロロロネがシギから降り、池のほとりにしゃがみ深みを見下ろす。だがふとエンジを見上げると、

「ていうか、エンジって、泳げないの？」

「……ああ」

エンジはあまり肯定したくはなかったが、そう返事をする。するとシギがロロロネの横にしゃがみ込み、耳打ちする。

「昔リクペ川に落ちて、死にかけたらしい」

「……リクペ川って、ロゼラスに流れてる、あのめっちゃ流れが速くて怖い川？」

「そう」

「よく死ななかったね」

「それ以来水がトラウマらしい」

「……なあシギ、内緒話、聞こえてるぞ」

目を据わらせてエンジはシギを見下ろす。シギは立ち上がり、やはりなんともないような無表情をエンジへと返す。

「お前、変なところでお喋りになるよな」

シギは何も言わなかった。

エンジは再び池のほとりに近づいて、深みを見つめる。カロンの姿はもう見えなくなっていた。

水の中はひどく冷たかった。気持ちの良い冷たさではない、身を凍らせようとするような切れる冷たさだ。あの楽園のような場所にあったにもかかわらず、身体を締めるように冷たく身に染みる。それでもカロンは池の奥底を目指して泳いだ。大剣を握っていない方の手で水をかき、足を動かす。泳ぐことは苦手ではない、むしろ得意だった。しかし思うようにうまく進まない。大剣を握っているせいではない、この水が、この池があたかも地獄へと続いている道であるかのように、得体の知れない何か恐ろしいものをはらんでいる。そのためなのか魚の姿が一つもない。

底へと進めば進む程、空から差し込んでくる日光が薄れ水中は暗くなっていた。そうなっていると、カロンは段々と不安になってくる。「多分見える」と言って四人を置いてこの池に飛び込んだものの、やはり暗いと見えなくなってしまう。もうすでに、ぼんやりとしか見えていなかった。

そうしていいいよ日光がわずかになり、ついにカロンは何も見え

なくなってしまう寸前に来た。カロンは進むのを止め、その場に留まる。これ以上進めば、暗くて何も見えなくなってしまう。このまま奥に進んでも、それでは意味がない。下手するとこの奥に潜む魔物に突っ込んでしまいかねない。

——仕方ねえや。

カロンは上を見上げた。わずかに差し込む日光が揺れている。と、その日光が落ちてきた。

「？」

落ちてくる小さな二つの日光は、まるで沈むかのようにゆっくりと降りてくる。カロンはそれに手を伸ばした。

ロロロネが被っていた、触角のようなライトのついた帽子だった。

こうして自分が暗闇を前に留まってしまうことを予想したのかも知れない。そうしてこれを水の中へ投げ込んだのだろう。だがロロロネのことだ、落としてしまっただけかもしれない。どちらにせよ、ありがたいことだ。

カロンはその帽子を被り、足下の暗闇を見下ろす。まだ暗いが、先ほどよりはずっとよく見える。

息はまだ持つ。カロンは更に奥へ奥へと深みへ泳いでいく。底へ向かえば向かうほど水が冷たくなる。といっても、いくら進んでも底は見えない。底は無いのだろうか。ここは何も無いただの漆黒の空間のようだ。

と、その空間にようやく底が見えた。そしてそこに巨大な丸い影があった。

——これが？

カロンはその巨大な影に近づいてみる。巨大な影には細かな毛が生えていて、それが水に揺れている。しかし、近づいてよく見ると、それは毛ではなく、羽毛だった。羽毛の巨大な塊は、わずかに膨らんだり縮んだりしている。生きているのだ。

——巨大な、魔物？

底にこれ以外のものはない。息もそろそろ苦しくなってきた。

カロンは大剣を両手に握り、そこへ自信のスピラを集中させる。大剣が熱くなり、刃を取り巻く水の中に小さな気泡が発生し、それに包まれた大剣は真っ白な泡の塊となる。

カロンはそれを、足下の羽毛の塊へ振り下ろした。

chapter 04

「――来る！」

池のほとりに膝をつき水面を見下ろしていたセンフィが不意に立ち上がった。目が覚めるような鮮やかな萌黄色の弓と、銀に輝く鏃をつけた矢を背の矢筒から一本手にし水面の奥の深みに狙いを定めて構える。弦が引き伸ばされ、弧がゆっくりと曲がる。すると銀に輝く鏃の先に、震える小さな光球が生まれる。

エンジも無言でホルスターから銃を手にし、水面へと向けて構えた。ロロロネもバッグからレモン爆弾をいくつか取り出し、シギも自身の杖を両手で握る。

池に変わった様子はない。そこは先程と変わらず水の流れる音と風が草木をくすぐる音しかない、静かな場所だった。池の深みにも、変化はない。

だが、突然池が派手で大きなしぶきを上げて吹き上げた。爆発だった。そして楽園に響き渡るのは、甲高く耳障りな獣の叫び声。ビリジアンカラーの巨大な何かが、池の中から飛び出してきた。

それは鳥と魚をあわせたような奇妙な生き物だった。顔は鋭く細いくちばしを持つ鳥の顔、頭には派手なとさかが生えている。背中は深い青緑色の羽毛に覆われていて、尾は蛇のように長くしなやかで三叉に分かれている。だが飛び上がった際に見えた腹は虹色に輝くうろこにびっしりと覆われていて、広げた翼は白いらのようである。

——こいつが村を潰した魔物。

と、その魔物の青緑の背に何かがいた。カロンド。カロンドが魔物に深々と突き刺さったままの大剣を握っている。だが魔物が飛び上がったために、カロンの身体は浮いている。どうやら、魔物は大剣に刺され飛び上がり水の中から出てきたが、大剣を刺したカロンドでもを連れてきたらしい。

「オワソン！」

ロロロネがその魔物を見て何かを叫んだ。飛び上がった魔物は池のほとりへと、ちょうどセンフィがいるあたりへと落ちてくる。

センフィが急いでその場から横へと動き、直後に魔物がその場へと落ち地面に叩きつけられる。その衝撃に平穏だった楽園が激しく揺れ、木々の葉が舞いくつもの実が地面へと落ちた。エンジンも思わず体勢を崩してしまっても銃はしっかりと握り続ける。

魔物が地面に倒れた瞬間、その背にいたカロンドが大剣を手放し地面へと落ちた。カロンの姿が魔物の影へと消える。

その直後、エンジンは銃の引き金を引いた。赤い閃光が飛ぶ。それと同時にセンフィも矢も放たれた。

エンジンの銃弾は真っ直ぐに魔物へと向かって爆ぜたが、センフィの矢は違った。矢が放たれたとたんに鏃の先にあった光が輝き、その光が放たれた矢を囲むようにして広がる。そして光は五つの矢の形になり、宙を飛ぶ矢に引き連れられるようにして魔物へと飛んでゆく。そして矢と光の矢が魔物の青緑の羽毛に突き刺さり、その直後に光の矢だけが輝いて爆ぜた。

魔物がまた悲鳴を上げ、こちらを睨んできた。そして自身のもとへと走ってくるシギに気がつき、その嘴をわずかに開けて目を細めた。しかしそこへ今度はロロロネが攻撃を仕掛ける。

「おーい、こっちだよ！」

ロロロネは声を上げ、手に握ったレモン爆弾を魔物へ投げつける。それが何であるか知らない魔物は避けることもなく身に受け、爆弾は盛大な音を立てて破裂、爆発した。中に詰まっていた圧縮されたスピラが、目に痛いほど激しく輝く光となって放出され、空気中のスピラを揺らす。エンジはその光に耐えられず目を伏せた。それでもしみるように目が痛く、おまけにレモン爆弾の衝撃で周囲と自身のスピラが揺れ、全身を針で刺されているような感覚が襲う。センフィを見れば、弓矢を手にし続けているも彼女は座り込んでしまっている。あの爆弾で攻撃されていなくとも、彼女にはきついのだ。

しかしそれだけのことがありながら、使う価値はあった。魔物が身をよじって悲鳴を上げている。その間に魔物の影に走りこんだシギは、そこに倒れていたカロンを肩に担ぎ、急いでその場から離れる。そして振り返り、片手に握る杖を掲げる。その先についた水晶球が電撃を帯び、電撃は宙を走り魔物を捕えるようにして襲い掛かった。電撃は消えずに、あたかも網のように魔物を縛る。

その間にシギはエンジの隣までやって来た。背負ったカロンを、ゆっくりと降ろす。

「大丈夫か？」

エンジはカロンに声をかけた。地面に降ろされぐったりと座り込

んだカロンは不調そうに目を閉じ首を傾げて、

「うーん、びっくりしたあ。あいつ、いきなり飛び上がったぞ？」

そして目を開けて、目前で電撃の網から抜け出そうと暴れている青緑色の巨大な魔物を見上げた。

「あーあ。剣、置いてきちゃったよ。どうしろっていうんだ……」

と、センフィが疲れた様子でこちらへ走ってきた。息を切ってこちらまで来ると、両膝に手について呼吸を整え、そして顔を上げる。

「あれなんなのよ……。大変そうよ、スピラ、強いもの」

「あれはオワソン」

センフィの背後から、ロロロネが出てくる。

「前、ディーモの部屋にある本で見たよ！　いまじゃあんまり見られない魔物だよ！」

「……ディーモの部屋にある本で見たって？」

ディーモの汚い部屋に山積みになれ崩れているあの沢山の分厚い本のことだろうか。エンジは思わず顔をしかめた。あの中にある魔物について書かれた本は、伝説の魔物であつたりいまは絶滅してしまった魔物について書かれたものばかりだ。ロロロネの言うことが正しいければ、どうやら自分達はとんでもないものに遭遇してしまったらしい。

「しぶとそうだなあ……。どうする？」

カロンがあたかも幼い子供が母親に「あれは何？」と尋ねるように首をかしげる。どんな時でもカロンはこんな調子だ、緊張している様子なんて、微塵も見られない。

その時「あっ」と小さく声を漏らしたのはシギだった。直後に何かが破れるような音と、頭をしめつけるようなオワソンの甲高い咆哮が楽園に響き渡った。魔物の叫びは強力なその不可視のスピラの波を乗せた風となり、楽園の中を吹き荒れる。そしてこちらへと押し寄せ、エンジ達をなぎ払う。

強いスピラの波を感じ、反射的にエンジのスピラが高ぶり身体の中で燃え上がった。それが見えないスピラとなり、周囲を漂う自分のスピラが濃くなる。そして押し寄せてきたオワソンのスピラと目前で衝突した。

高い不協和音が鳴り響き、スピラは火花が散るように輝いた。盾と化した自分のスピラと、押し寄せてきたオワソンのスピラが競り合っている。魔物のスピラに押されそうになるも、エンジは一步踏み込み更にスピラを燃やした。すると先ほどとは違って澄んだスピラの衝突音が爆ぜた。その輝きも火花のようにいくつもの細かなものではなく、拒絶を形にしたような一つの激しい光となってオワソンのスピラを押しつける。

隣をちらりと見れば、シギが自身の前に風のバリアを作って魔物のスピラとその風圧に立ち向かっていた。シギのバリアの後ろにはカロン、センフィ、ロコロネがいる。

と、その四人に大きな黒い影が落ちた。

「お前ら伏せろ!!」

エンジは声を張り上げ銃を四人の上空へと向けた。そして一発、二発と発砲する。放たれた閃光は、四人を狙って落ちてきていた濁った緑色をした巨大な針を貫通した。そのとたん針は空中で粉碎し、粉となって霧散した。――凝固したスピラでできていたのだ。

オワソンの放った不可視のスピラが弱まってきた。顔をあげると、池の前に自由の身になったオワソンが立っていた。低く唸り、こちらを睨んでいる。威嚇している。と、そのえらのような翼を広げた。するとオワソンの前に大きさは先ほどよりも小さいが、針の形をしたスピラの結晶がいくつも形をなして現れる。矛先は全てこちらへと向けられている。

「わお」

間の抜けたロロロネの声。その直後に針が一斉に放たれた。

しかし誰かにも刺さりはしなかった。エンジとロロロネは右へ、カロンとシギは左へと避ける。後方へと跳ね上がり針を避けたセンフィは、地面に着地する前にはもう弓矢を構えていた。針の雨が止み地面に片膝ついて着地すると、構えた三本の矢を握った右手を放した。スピラを纏った三本の矢が、風を切ってオワソンの喉に刺さる。しかしオワソンはそれに構わずセンフィをついばもうと素早く頭を下ろしてきた。センフィはそれをまた跳ね避ける。

「ロロロネ、ゴーレムを」

エンジは銃口をオワソンに向けながら、傍らのロロロネに声をかける。

「奴の動きを止める。あんなでかいのに暴れられたら厄介だ」

「分かった。時間かかるから、助けてね」

そうしてロロロネはバッグの中から透明な液体に満ちた小瓶を取り出すと、そのコルクを抜いて中身を足下の草地へと流す。草地はその液体を全て吸い取った。そしてロロロネはそこにしゃがみ、またバッグから取り出した小さな鉄片を地面に置く。その鉄片に、ロロロネは銀の針で何かを刻み込む。するとそこを中心にして、地面付近に魔法陣が姿を現した。錬金術による、魔力を使った錬成の際に現れるものだ。

chapter 05

向こうではシギが魔法を唱えていた。不意に握る杖の水晶球が輝いたかと思うと、シギはそれを地面へと刺す。するとそこから太い緑のツタが何本も溢れ出し、オワソンの足へと絡みついた。ツタはそこから身体へと這い上がり、オワソンの身体を拘束する。

しかしそれだけでオワソンを止めることはできなかった。オワソンは絡みつくツタから抜け出そうと暴れる。這い上がってくるツタをついばみ、食いちぎっている。そうして魔物がツタに氣をとられている間にエンジはまた発砲した。離れにいるセンフィも矢を放っている。発砲音と矢が風を切る音が鳴りやまない。

すると不意にオワソンが怒った様子で鳴き声を上げた。そして突然長い尾を振った。長く大きな三本の尾は、地面近くを鞭のように風を切ってしまった。

しゃがんでいたロロネには、頭の上を通過するだけで当たらなかった。だがエンジはそれを避けられなかった。鞭のような三本の尾が身体にめり込むようにして衝突する。エンジは踏み込んだがそれもかなわず、そのまま薙ぎ払われ虚空へと投げ上げられた。しかし、銃は手放さない。

「エンジ!!」

自分の名を呼ぶ悲鳴が聞こえた。カロンの声だ。そう思ったとたん、一瞬の浮遊感が失せ落下が始まる。その際にちらりと見えた地面は遠かった。目前を、自分を薙ぎ払い打ち上げたオワソンの尾の先が揺れている。

考えるよりも先に、エンジは銃を握っていない左手をそのオワソンの尾へとのばした。そして何が起きても放さないようにしっかりと握る。その次の瞬間、尾が激しく揺れた。視界に映る景色が飛び、遠心力が襲う。しかしエンジは手を離さなかった。

ちょうどその時、ロロネが練成に成功したようだった。地面がずん、と一回揺れる。すると激しく揺れていた尾が大人しくなり、ようやくエンジはオワソンを見下ろした。見ると、オワソンの前にこげ茶色の岩のように厳つい巨人がオワソンの首と左の翼の付け根を巨大なその手で握り締め、動けないようにしている。土で練成されたゴーレムだ。

と、オワソンがそのゴーレムに抵抗して暴れ出す。しかし身体から土くれを少しこぼすだけでゴーレムは全く動かなかったが、オワソンの動きに伴って尾が激しく揺れた。するとまた飛び始めた景色の中、尾がよくしなって曲がり地面が間近へと迫ってくる。その瞬間、エンジは尾から手放し、地面へと転がった。衝撃が身体を襲い、全身が痛む。しかしすぐに片膝をついて起き上がると、狙いを暴れるオワソンへと定めた。銃に集中し、スピラを溜める。赤い光が銃口の先に灯る。

カロンが駆け出しているのが見えた。武器も何も持たないカロンはゴーレムの背後まで走ると、あたかも木登りでもするよにその土の背に跳び乗った。そしてそこからゴーレムの頭へ、そこでとどまらずまた跳ね上がったかと思うと危険を顧みず、なんとオワソンの身体へと跳び移った。

しかしゴーレムに抵抗しているオワソンは、そんなカロンを気にも留めない。だが、カロンはオワソンの身体の上を駆け、そこに突

き刺さったままの自分の大剣をためらうことなく引き抜いた。切れ目からは黒色のような血が勢いよく噴出す。

オワソンが悲鳴を上げる。そして目の前のゴーレムから自身の上にいるカロンへと標的を変え、振り返った。

刹那、エンジは引き金を引いた。十分にチャージされた強力な銃弾が発射され、それは巨大な流れ星のような形でオワソンの鋭い右目へと飛んでいく。以前クロードと戦ったときに使ったスピラの奔流のようなものではない。一点に狙いを定め、そこに全てのスピラをぶつける、集中型の銃弾だ。

銃弾はオワソンの顔へと向かって宙を駆け、そしてそこで輝いた。オワソンが悲鳴を上げる。それと同時に、カロンがオワソンの身体の上を走り、三本の尾の根元へ向かったかと思うとそこで思いきり剣を振り下ろした。すでに血で濡れていた刃は三本の尾のすべてにやすやすと切り入り、そして三本とも切り落とした。

切り落とされた三本の尾が、地面に落ちる。尾があった場所からはその瞬間血が噴水のように吹き出た。オワソンはもう、悲鳴を上げることもできない様子で痛みに身をよじった。

そこへシギが魔法を唱える。先程から輝き続けていた杖の水晶が、いよいよ増して光り輝き青紫色の電撃を帯びる。そしてそれが音を立てながら天へと打ち上げられた。眩しい日光の中で青紫色の電撃の塊が輝き、それが細長い形を成して棒のようになって下へと落ちてくる。

それは槍だった。落ちてきた雷の槍はその先が真下に向いたと思っただけ、短い大きな音を立ててオワソンの身体を貫いた。

ゴーレムがオワソンから手を放し、一步退く。暴れていたオワソンが、その瞬間不意に止まった。失われていた静寂が、刹那に戻ってくる。しかし雷撃のわずかな音がしたかと思うと巨大な槍が細い電撃に変わり姿を消し、そしてオワソンがゆっくりと倒れた。

オワソンが倒れ、また地面が揺れた。草木もゆれ、水面も波立って揺れる。落ちた葉が、風に待って地面に落ちた。

スピラ使い達は誰一人として動かなかった。ただ、倒れたオワソンを見つめる。

「……倒したの？」

ロロロネがゴーレムの背後からオワソンを見つめる。と、オワソンの青緑の中からカロンが顔を出した。

「死んだみたい」

カロンにそう答えられ、ロロロネは好奇心に満ち溢れた笑顔でオワソンへと駆け出した。ロロロネはこういった未知の魔物が好きだ。その上錬金術師だ、素材となるものを集めたがる。

向こうを見ればセンファイが座り込んでいる。もともと戦闘に向いていない彼女だ、少し疲れたのだろう。

シギは敵がいなくなった今、杖を背負っていた。そしてオワソンの頭の前に立っている。オワソンの頭を、何か奇妙なもの見るような表情で見つめている。

シギが何を見て何を考えているのか、知らずにエンジは分かっていた。エンジはシギの隣まで進むと、シギが見つめている先へと視線を移した。そこにはオワソンの顔がある。開いたままのいまだに鋭い目、人を一口で飲み込めそうな巨大な嘴。しかし嘴は大きくかけていた。自分が放った強力な一撃が、そこに当たってかけたのだろう。

「……お前の腕を疑っているわけじゃない」

シギがその嘴を見つめたまま言う。

「目を、狙ったんだな？」

「……ああ」

エンジは静かに肯定した。

だが銃弾は大きく的を外れて、目ではなくこうして嘴に当たっている。時折狙いがずれるということは自分でも皆も知っている。しかしこれはあまりにも大きく外れていた。

「……少し、休むか」

そうしてシギは座り込んでいるセンフィのところへと歩きだす。エンジはそこに立ったまま、かけたオワソンの嘴を見つめていた。

何故こんなにもずれたのだろう。思い当たることは、何もない。

手に握る銃を見つめる。今日もいつもと同じく手入れをした。銃に問題はないのだろう。

顔をあげる。オワソンの身体の上を、カロンとロロロネが跳ねている。

右目をこする。そしてもう一度顔を上げる。二人は変わらず楽しそうに跳ねている。

chapter 06

街の市場の通りはいつものように活気に溢れていた。多くの人々が会話し笑いあいながら行き交い、通りの横では並んだ露店が声を上げている。その棚に並ぶものは見慣れたもの、あまり見ないもの、果てには知らないもの、用途の分からないものまである。こうした数々の露店は、そもそも街にある店のものだったり、いままでの旅で得たものを売る旅人のものであったり、遠方の地からその土地でしか手に入らないものを売りに来た隊商のものであったりと、売られているもの同様商人も様々だ。市場はこの街だけではなく、遠方の街とふれあえる場だ。そのせいか、こうして見ているだけで楽しくなってくる。

「中々、良い魔石ですわね」

そんな声がして、周囲の店を眺めていたルーナは振り返った。ここでは先ほどからこの店の売り物を見つめていたヴィスが、棚に山積みになっていた輝く小さな石の一つを手にとって見つめている。猫のような髭が、前へ向いていた。

「ふうん。どれも質が良いですね」

「最近採れる魔石はどれもいいものばかりだね」

カウンターの向こうに立つ、この露店の主である鉱山夫が笑う。そう言われてルーナもその山積みになされた魔石を見つめた。どれも濁りが少なく、きらきらと輝いている。長年地の中でスピラや魔力を吸い、力が染み込み満ちている証だ。

「買いましょう、ルーナ」

と、ヴィスがこちらへと顔を上げる。だからルーナは一步前に出た。ヴィスはすでに両手いっぱい荷物を抱えていて、もうものが持てない状態だ。その上魔石は石だ、それなりに重い。ヴィスの抱える荷物の上に置くことができて、ヴィスがそのまま持ち歩けるか怪しい。それに比べ、杖を背負っているとはいえどもルーナは小さな袋を片手に提げているだけだ。魔石を持つのは当然のことだろう。そもそも、ルーナはこのためにヴィスと共に市場へやってきたのだ。

「どのくらい要りますか？」

ヴィスに聞く。しかしヴィスは「さあ？」と首を傾げた。

「何に使うか分からないんですの。なんせ、ディーモに頼まれた買い物ですからね」

それは仕方がないと思う。ディーモは欲しいものだけを口にして、何に使うか、どのくらい必要なのかを全く言わない。

仕方なくルーナは適当な数を鉱山夫に伝えた。結構な数だった。しかし鉱山夫は少し大きめの紙袋にその魔石を全て詰めてくれた。そうして言われた金額は、この量と質よりも安いものだった。

「悪気がしますね」

そう言いつつも、ルーナは言われた金額を手渡し紙袋を受け取った。紙袋は思ったよりもずっと重かった。だがルーナはそれを両手で抱え、ヴィスと共にその店を後にした。

「ごめんなさいね、こんな荷物持ちなんてさせてしまいました。本当はウールカに手伝ってもらうつもりだったのですが、あの野郎、いつの間にか消えてしまいましたの」

ヴィスのしゃべり方はおかしい。丁寧と見せかけて時折そうではない。

だがもう慣れている。ルーナは笑った。

「平気ですよ。少し重いですが」

「カロンやシギに手伝わせても良かったのですが、任務から戻ってきたばかりでは少し言いにくいですし、いつ戻ってくるか分からないですの。そう考えると、あなたしかいませんでしたの」

「カロンやシギ、今日帰ってくるんですか？」

ヴィスが頷いた。

彼らは今、この街から少し離れた村に遠征に出ているはずだ。それが今日、ここへ戻ってくるのか。

つまり——エンジンが戻ってくる。

深い溜息を一つ吐く。するとヴィスがちらりとこちらを見てくる。

「腹立たしいのですか？」

「はい」

正直に答える。あの男は見るのも辛い。顔をあわせるのも嫌だ。会話するなんて論外だ。

「ところで、これらは何のために買ったんですか？」

エンジについては考えるのも煩わしい。ルーナはすぐに話題を切り替えた。

「一部はクラン・ギルド内で使うもの、あとの殆どはデイーモが使うものですわ。最近はやたらと魔物が活潑ですものね、デイーモも何かと対策を練っているようですわ。こうした道具を使って何かしているみたいですからね」

「そうなんですか……」

デイーモについてはよく分からない。

ルーナがクラン・ギルド「ノーウェン」に入ったのは六年前のことだった。その時から今まで、デイーモという人物の下で戦ってきた。しかしデイーモが戦っているところを一度もみたことがない。というよりも、デイーモがスピラまたは魔力を使っているところを一度もみたことがない。おそらく、他のスピラ使いも見たことがないのだろう。隣にいるデイーモの秘書のような存在であるヴィスマでもが知らないのだ。だが、今日市場で買ったのは殆どが錬金術に使う素材だ、いま自分とヴィスが抱える荷物の大半がデイーモの使うものであるのなら、デイーモは錬金術が使えるのかもしれない。

そんなことより、と、ルーナは思う。

そんなことより、どうしてこんなにも魔物が活潑なのだろう。各地から魔物による被害を受けたという話がこの街に流れ込んで耐えない。そのため街の中では十年前のようなことが起きるのではないかと怯えている人々もいる。クラン・ギルドのスピラ使い達も、その殆どが魔物退治の任務で街にいない。かくいうルーナ自身も昨

日魔物退治の任務から戻ってきたばかりだ。しかし今日一日を休んで明日になれば、また新たな任務を任せられるのだろう。

任務を出すディーモも、本当は帰ってきたスピラ使いにまたすぐ別の任務を与えて魔物退治に向かわせたいに違いない。しかしディーモがそうはせずに帰ってきたスピラ使いを休ませる。疲労が残った状態で次の任務に向かわせると危険だ、下手をすると死んでしまいかもしれない、魔物に殺されてしまうかもしれない。任務から帰ってきた後こうして一日休めるのは、ディーモの気配りのおかげだ。謎の多い人物ではあるが、仲間を大切に思っているのは間違いない。

ヴィスの後に続いて歩き、気が付けば市場を出て広場近くの大通りまで来ていた。市場に比べ、少し人氣が減る。道の向こうに広場が見える。「ノーウェン」の本部はすぐそこだ。

帰ったら、傷薬をいくつか練成しようなんて考える。ルーナは魔法使いではあるも、錬金術も一通り使える。そもそも、魔法を教えてくれた師匠は――厳密に言うとなんて腕を磨く他あまりないのだ、魔物退治で忙しいこの頃、せめて仲間の役に立つことを一つや二つしたい。それに薬の練成はそう疲れるものではない。

そうして薬を作って、皆が命を落とすことのないようにしたい。そんなことを願う。

憂鬱に深く溜息を吐き、目を閉じる。通りを行き交う人々の雑踏の賑わいが遠のく。

だが、何か妙な気配を感じ、すぐにうつすらと目を開いた。と、
ヴィスが不意に立ち止まり、ルーナも歩みを止めた。ヴィスの白い
毛に覆われた長い尾が、不思議な動きで揺れている。

「何かが、通り越していききましたわね」

ヴィスはこちらを振り返らずにそう言った。目を閉じ、空気のに
おいをかぐように顔をつと上げる。揺れていた尾がぴたりと止まる。
そうして目を開け、遙か前方を見つめた。

「ふうん、あの女ですわね、妙な気配がするのは」

ヴィスの視線の先に、一人の少女がいた。十代半ばくらいの歳の
少女だ。長い茶色の髪を揺らしながら、向こうの広場へと走って行
く後姿が見える。

特に変わったところはないが、何か違和を感じる。

少女の姿が人ごみに紛れて見えなくなる。ヴィスが早足で進み出
した。

「変なものだったら面倒ですわ。追いかけてみましょう」

そうしてヴィスも人ごみの中へ紛れてしまう。ルーナも慌ててヴ
ィスに続いた。ヴィスの動きは速い。人ごみの中、人を避けてすい
すいと先へ進んでいく。ルーナもその後を懸命に追う。

二人は、広場へと出た。そのとたん、場所が広がったせいか人
ごみが一気に薄くなり動きやすくなる。広場はいつもと変わらない。

中央にある噴水が日光を受けて輝き、その周りでは幼い子供達が駆け回り、スピラ使いと思われる見知らぬ人々が立ち話をしている。街に住む人々もこの広場を横断したり、近くにある店で買い物をしている。

あの少女の姿はどこにもない。そう思ったときだった。

「あのアマ、何の用ですの？」

ヴィスが耳をぴんと立て、そして口から小さな牙を見せて何かを睨んでいた。その視線の先にあるのは「ノーウェン」の本部、その入り口だ。少女はそこにいた。門をくぐり、中へ入ろうとしている。

「魔物にただで侵入される訳にはいけないのですが……」

不意にヴィスが抱えていた荷物を足下に落とすように乱暴に降ろした。そして屈んだかと思うと高く跳躍する。まるで、木葉が強風に吹かれて突然舞い上がるかのように軽々と宙に上がり一回転し、そして離れた場所であつたにも拘わらず、ヴィスは「ノーウェン」本部の門を越え、いまにも中へ入ろうとしていた例の少女の前に着地した。

突如目の前に下りてきたヴィスに驚き、少女が数歩後退る。そこへヴィスが追い詰めるように一步前へ出た。

「我がクラン・ギルドに、何の用ですの？」

少女は何も言葉を発さない。ただ怯えてまた一步退いた。その時、離れにいたルーナは少女の顔を見た。色白で細目である以外、何の変哲のない顔だ。しかし見た目は普通の少女でも、その気配は何故

か妙だ――魔物の気配がする。

chapter 07

少女の顔に一切の表情はない。困った様子も怯えた様子もない。問いつめるヴィスを見下ろしている。ヴィスは目を細めて少女を見上げた。

「ここは、お前のような者が来る場所ではありませんよ。とっとと街から出て行きなさい。さもないと、害をなしていまいが刺身にしますよ」

と、ルーナは周囲の空気が僅かに重くなるのを感じた。

空気中の見えないスピラの濃度が上がり、じわじわと高まっている。

ルーナは抱えた荷物を投げ出した。乱暴に投げ落とされた紙袋から魔石が飛び出し、地面に転がる。しかしルーナはそれを気に留めず、背負った杖を手を取った。

「避けてくださいヴィス！」

そう叫んだのと同時に、少女の華奢な身体が紫の業火に包まれた。そしてそこを中心に、発せられた見えないスピラの波が高い音を立てて広がる。

とっさにルーナは杖を自身の身体の前に立てた。そこから白く輝く大きな魔法陣が盾になるように現れ、迫ってきたスピラの波を防ぐ。スピラの衝突音がし、魔法陣の盾が揺れた。

スピラの波はすぐに治まり、ルーナはすぐに掲げた杖を下ろした。魔法陣が消え失せる。目の前に広がる光景は先程と一変していた。子供達が突然のことに倒れ、泣き叫んでいる。街の人々が悲鳴を上げている。スピラ使いらしき人々は驚いて何かを見つめている――紫の炎に包まれた少女が、こちらへと振り返っている。彼女のすぐそばにいたヴィスの姿はない。

「皆さんいますぐ逃げてください！ 危険です！」

ルーナは叫んだ。紫の炎は爆ぜる音を立てながら勢いを増している。強大なスピラの塊だ。炎の中の少女がこちらを睨み、獣のように低く唸りだす。人々が怯えて逃げ出す。

「そのあなた達、子供達を」

杖を構えて前へと進み、そこにいたスピラ使いらしき人々に声をかける。蒼白な顔をした彼らは言われてすぐに頷き、そして噴水の周りで倒れている子供達を抱えて広場から離れていく。そうして、広場はルーナと少女だけになった。

少女は低く唸り続けたままルーナを睨むだけで何かを仕掛けてくる様子はない。だがその紫の炎は先程よりもずっと勢いを増していた。変化はそれだけではない。低く唸る少女の細面の顔が崩れていく。口が裂け、そこから毒々しいほど赤い、蛇のような舌がだらしなく垂れ下がり涎を滴らせる。目も人間のものではなくなり、残忍な光を宿した巨大なそれになっている。顔ばかりではない。小さな白い手も巨大化し骨張った巖ついそれへと変化し、爪も鋭く細くなる。

人間だった少女が、獣へと変化してゆく。

ルーナのすぐ隣でふわりと空気が揺れた。見れば、ヴィスがそこに片膝をついていた。

「後は任せますわ、ルーナ」

不意にそう言われたものだから、少し驚いてヴィスを見下ろす。ヴィスは少し困ったような表情を浮かべていた。

「刺身にする、とは言ったものの、武器は本部に置いてきてしまいましたの。戦えませんか——私はこの近にいる人を避難させますわ」
それでは、とヴィスが高く跳躍し広場に面した店の屋根に着地する。そしてまた飛び上がったかと思うとその建物の影へと姿を消した。

「……一人ですか」

残されたルーナは溜息を吐き、しかし獣のような少女を見据えた。先ほどまで立っていた少女は四つんばいになっている。指先から生えた鋭い爪が、広場の地を覆うレンガを削り、食い込んでいた。と、少女がいまにも飛びかかろうとするように身を屈める。

ルーナは杖を掲げ、そこで一回転させた。杖についた大きな水晶が宙に弧を描き、なぞられた場所から光球が現れ宙に並び、杖が一周し円を描くと同時にその光球も円を描くように並んだ。そのとたん、すべての光球が少女へと向かって放たれた。

しかし少女は四つんばいになったその手足で地を駆け、飛んできた光球を避ける。そして克蘭・ギルドの本部の門前から、噴水を

通り過ぎルーナへと迫り、目前までやって来ると飛び上がり鋭い爪の生えた片手を振りかぶった。爪先がルーナを狙う。

ルーナは焦った様子も恐怖した様子も見せなかった。

その瞬間、先ほど放ち避けられしたが、いまだに敵を追っていた光球がついに少女を捕らえた。避けられた光球は地にぶつかる寸前でターンし、そして少女へと迫りその背や足、手首に衝突すると輝きを爆ぜさせる。いまにも攻撃しようとしていた少女が悲鳴を上げ、ルーナの足下にうつぶせに倒れた。

少女の背にその輝きがのしかかっていた。背だけではない。輝く縄となった光球が少女の四肢にからみつき地面に根を生やし、少女を拘束する。少女が怒り狂った獣そのものの悲鳴を上げ、地に這った状態でもがく。しかし魔法の縄は切れない。

——これは一体何だろう。

ルーナはもがく少女を見下ろした。もしかすると何か良くない魔物がこの少女に取り憑いているだけかもしれない。それが正体を現すまではとどめが刺させない。

「あなたは一体何者ですか？ 正体を現してください」

少女を睨む。しかし少女は暴れて唸るだけで、意味のある言葉を発しようとはしない。言葉が通じないのだろうか。

正体を現さないのなら、もう少し追い込む必要がある。ルーナは口を固く結んだ。この少女自体は人間であるかもしれないが、仕方がない。

水晶の輝く杖の上部を、少女の顔の目前へと降ろす。そして杖に魔力を注ぐと、水晶が目映いばかりに輝く。

先程から唸っていた少女が、ヒステリックに苦しそうな悲鳴を上げる。水晶の輝きから逃れようとし、更にもがいた。そして不意に――その身体を包む紫色の炎が爆発した。広場中が紫の炎に包まれる。

予期していなかったルーナは身構える間もなくその炎に吹き飛ばされた。握っていた杖が手元を離れ、身体はすぐそばの店の壁に叩きつけられ、そのままくずおれ座り込んでしまった。

それでも顔を上げると、紫の炎に包まれた広場が目に入った。しかしスピラの塊であるその炎は何も燃やさず、その場に張り付いている。

どこかで見たことのある炎だった。それも昔ではない。最近見たような炎――スピラの塊だ。

先程まで自分がいた場所では、うつぶせになった少女が身体を起こしていた。どうやら縄は切れてしまったらしい。少女は元のように四つんばいになると、座り込んでいるルーナを睨んだ。先程まで身に纏っていた紫の炎はない。と、再び少女の身体が紫の炎に包まれ燃え上がる。

その時少女の姿がぐにやりといびつに歪んだ。そして次の瞬間、少女の姿は一匹の狐の姿になった。

――毒狐？

この前北門の近くに巣を作っていた毒孤だろうか。そういえば数匹逃がしてしまったのを憶えている。

と、その毒孤の姿がまたぐにやりと歪む。炎の勢いが増すのにつれ身体が膨れあがり巨大化し、また一本だった尾も、その根本から新しいものが生えてきて九本となる。黄色だった体毛も色素を失い銀になる。

九本の尾を持つ巨大な銀の狐が、そこに姿を表した。

――九尾。

とっさにその単語が頭に浮かぶ。何かの本で見た、九本の尾を持つ狐を表す言葉だった。

九尾はルーナを見て、目を細めた。そしてその巨大な尾を振る。

まずい、と思ってルーナは慌てて立ち上がった。しかし、何故か身体が思うように動かない。非常に重く、だるい。どうやら先程の紫の炎の爆発――毒のスピラの爆発の際、幾分かその毒が身体に入ってしまったらしい。少しの毒だ、魔力を持ってすれば解毒できるだろう。しかしそんなことをしている暇はない。

杖は噴水のそばに転がっていた。噴水までは遠い。それでもルーナはゆっくりと歩き、杖を拾いに向かった。

だがもちろん、九尾は黙っていなかった。九尾はよろめくルーナへと駆け出すと、その牙をむき飛びかかった。避けるすべもないルーナは目を閉じることもなく飛びかかってきた九尾の口の中を見た。

鋭い牙がいくつも生えていて、奥からは深紅の長い舌が垂れている。

chapter 08

九尾の生臭い息がかかる。

鈴をいくつも鳴らしたような澄んだ音が聞こえた。

突如目の前が深紅に染まった。血の色ではない、赤く輝くスピラがルーナの視界を覆った。

再び鈴のような澄んだ音。それに伴い獣の悲鳴。目前まで迫っていた九尾が、飛んできた赤い閃光の勢いに飛ばされ地面に転がった。赤い閃光は九尾の横腹に刺さり、九尾の身体を貫通している。刺さった部分から、閃光とはまた別の赤色をした血がにじみ出し、銀の毛皮を染める。

鋭く刺さった赤い閃光が、空気に溶けるように消え失せる。それと同時に九尾の血の量が増え、銀の身体の下に血溜まりができはじめる。ルーナはそれを見つめ、そして振り返った。

誰もいない通りの向こう、そこに銃を構えたエンジの姿があった。こちらへと向けられた銃口からは、赤い光が漏れている。

――帰ってきたんだ。

エンジがこちらへと走ってくる。ルーナはよろめきながら進むと杖を拾い、しかしその瞬間不意に息苦しくなり胸を押さえた。立つ力も徐々に抜けていき、その場に座り込んでしまう。全身の感覚もわずかに薄れていく。毒孤の毒が回り始めたらしい。

顔を上げて振り返るとエンジがすぐそこにいた。何も言わず、無表情でこちらを見下ろしている。

戦わなくては、と思い、ルーナは慌てて立ち上がろうとする。しかし身体は先程よりも言うことを聞かず、重い。

解毒をしなければ。身体の中の魔力を静かに燃やす。すると体内に入り込んでいた毒のスピラが焼け、消滅する。身体が幾分か軽くなる。

その時、九尾が唸りながらゆっくりと身体を起こし始めた。赤い血が滴っているも、牙をむいている。その口からは紫の炎が溢れている。蛇のように九本の尾の先にもその炎が灯っている。そして鋭い瞳は、ルーナではなくエンジを睨んでいた。

九尾が跳ね、近くの民家の壁に着地するように四足で壁に張り付く。するとエンジはルーナと九尾の間に入るようにして立った。握った銃の銃筒の中から、赤い光が煙のように流れ出ている。

エンジが連射する。銃を構えた瞬間、銃筒から漏れていた光が消えたかと思うとそこから赤い光球がいくつも飛び出す。九尾は壁を走って屋根へとのぼり駆ける。だが赤い閃光が九尾を追う。九尾は民家の端まで来ると、すぐ近くの民家の屋根へと飛び移る。と、九尾はそのまま走り続けずに、何の予兆もなく下へと飛び降りた。着地したのは噴水を越えた向こう側。噴水が壁になり、エンジは繰り返し引き金を引いていた指を止める。すると九尾は跳ね上がり、清い水が溢れ出す噴水の中央にあるオブジェの上に跳び乗った。そしてエンジへと向けて紫の炎が溢れる口を開いた。

吐き出されたのは、あまりにも巨大な紫の業火だった。エンジだけ

ではなく、ルーナをも飲み込もうと宙で広がる。

これではエンジの銃弾でも抑えきれない。ルーナは座ったままだが杖を掲げた。

しかしその腕をエンジに掴まれる。

「!?!」

一瞬身体に電撃が走ったような感覚があった。それからわずかに、どろどろした何かの感覚。

力強く引き寄せられる。突然のことに驚いたルーナは抵抗もできなかった。その力に従って立ち上がる。

エンジはルーナの腕を引っ張りつつ、瞬時にその場から数歩退いた。そしてルーナを投げるようにして自身の背後へと勢いよく回し、手放す。不意に乱暴に手を放され、ルーナはエンジの背後でふらついた。先程まで自分達がいた場所――エンジの向こうでは紫色の炎が燃え盛って地面を覆っていた。そしてその奥の噴水のオブジェには、あったはずの九尾の姿がない。

突如燃え盛る炎の中から、同色の光球が三つ、エンジを狙って飛んできた。エンジはそれに気付いて、慌てずに身体をよじって避ける。しかし、一つの光球が左肩をかすめた。左肩の部分の服が小さく音を立てて一瞬燃え、そして焼けた後からは火傷した肌が顔を出した。

――……。。

それがルーナは信じられなかった。何故あの程度の攻撃を避けられない。

エンジは傷に構わず紫の炎へと銃口を向けた。銃口からは赤い光が立ち上っている。すると地面に張り付いていたはずの紫の炎がエンジンへと迫ってきた。炎の中を良く見ると、九尾の姿があった。しかしエンジは逃げる素振りも避ける素振りもなく、その引き金を引いた。

澄んだ音が数回響く。最後の一発だけは、町中にこだました。

銃口から放たれたのは赤い光の奔流だった。エンジが最も得意とする、強力な技だ。赤く輝く奔流はうねりながら紫の炎へと迫り、捕える。そして紫色を飲み込み、全てが赤くなった。

その眩しさに、ルーナは目を瞑ってしまった。エンジの強力なスピラに、肌が粟立つ。目を閉じていても、瞼を通してその赤い光が瞳へ入ってくる。

光が徐々に治まる。それからルーナはゆっくりと目を開けた。目の前には、噴水の前で動かなくなった九尾を見下ろすエンジの姿があった。銃をホルスターにしまい、そして開いた右手で左肩の傷を押さえている。と、エンジがこちらへと振り返る。エンジは冷めた目でこちらを見ていた。するとあたりの空気が重くなる。エンジのスピラが、ルーナにのしかかろうとしている。

またか、とルーナは思う。またこの男は私に文句を言ってくる。言葉ではなくスピラのやりとりのため、なんと文句を言っているのかはわからない。しかし、相手が怒りと憎悪を抱いていることはわかる。のしかかろうとしているエンジのスピラは、まさにその塊だ。

ルーナはエンジを睨んだ。そして同じく見えないスピラで、エンジのスピラを押し返そうとする。

しかし、その時に気付いてしまった。エンジを睨んだその時に、すぐそばの噴水が眼に入る。そこで気付いてしまった。

自分の中で高まっていたスピラが、一気に冷める。そしてルーナは驚いた顔をしてエンジを見た。エンジにとって、それは驚いた顔というよりも、恐怖した顔に見えたかもしれない。

エンジの不可視のスピラが急に大人しくなる。そして驚いた顔をした。

「何だよ？」

エンジがそう言った。おそらく、思わず言葉が出てしまったのだろう。きっと、自分があまりにも驚いた顔をしているから。

ルーナは何も言わずにうつむいた。口を固く結ぶ。息が少し上がっている。毒のせいではない——噴水にある、エンジの銃弾の跡のせいだ。

噴水には銃弾の跡がいくつかあった。エンジが九尾に止めを刺す前に、走ってくる敵の足を止めようとしていくつか撃ったものだ。実際エンジは走ってくる九尾の前足を撃ち、足止めし、それで止めを刺した。

それなのに、何故噴水に銃弾の跡がある。

エンジの銃の腕はかなりいい方だ。走ってくる九尾の前足一本を狙って撃つなんて、一発引き金を引くだけでできるはずだ。しかし噴水には四つほど銃弾の跡がある。一発だけではできなかったということだろうか。もちろん、エンジンにだってミスがあることはわかる。しかしこうも四発もミスをするだろうか。何より、こんなにも大きく狙いがずれるものなのだろうか。

ルーナが顔を上げると、エンジは通りの方へと進んでいた。通りの向こうには、カロンとロロネが走ってくる姿が見えた。二人の後ろには、センフィとシギの姿も見える。エンジは四人の方へと、よろよろ進んでいく。どうやら毒が回り始めたらしい。

ルーナはエンジの後姿を見つめ続けた。そして考える。

何故狙いがずれたのか。何故単純な攻撃を避けられなかったのか。

それだけではない。

エンジに腕を掴まれたとき――妙な気配がした。気味の悪い、不吉な何かを感じた。

普段のエンジも何かがおかしい。妙な気配がする。何かがおかしい。

エンジのもとに、ロロネが走り寄って来るのが見えた。ロロネはエンジの左肩の傷を確認すると、バッグから小さな小瓶を取り出した。解毒剤だろう。これだけ対応が早ければ、数日に渡って毒が身体を蝕むことはない。

静かに溜息を吐く。しかしまだ不安の残る表情でエンジを見つめ

る。と、ロロネの持つ小瓶を見つめるエンジの左目に違和感を覚え、そこを凝視する。

赤みを帯びた茶色の瞳。いつもと変わらない瞳。しかし一瞬波打ったかと思うと、その瞳が急に黒ずみ漆黒になった。

――！

息が止まる。からん、とルーナの手から杖が離れ、地面を転がる。

しかし次の瞬間には、瞳は元の色に戻っていて。

「……」

ルーナは下唇を噛み締め、俯く。転がった杖を拾い上げる。

そしてその場から逃げるようにして、ギルド本部の中へと早足で進んだ。

第二章 静寂の兆し 終

chapter 01 (前書き)

誤字脱字やおかしな点があるかもしれません。ご了承ください。
報告してもらえるとありがたいです。

chapter 01

暗い中を一人歩く。他に誰の姿もない。

暗いといっても、暗黒であるわけではない。雲一つ無い晴れた夜空には月が輝き、地上を照らしている。

あたりからは虫や夜禽の音がする。ここ、ギルド本部の裏側にある訓練場は小さな林だ。上を見上げれば緑が広がっていて、その隙間から月光が降り注いでいる。それを頼りにルーナは木々の間を進んだ。杖を明かりにすればもっとよく見えるのだが、いまは使わず背中に背負っている。明かりをつけると目立ってしまう。誰かに見つかることだけは、避けたかった。

しばらく進むと開けた場所に出た。木々のない草地に、月光が落ちている。開けた場所の奥には的がいくつかある。どうやらここが、弓や銃の稽古場らしい。

ルーナは並んだ的へと静かに進んだ。どの的も、矢の刺さった跡や銃弾の貫通した跡がある。それを一つ一つ見て行く。すると、どの的よりもボロボロになった的があった。至る所に銃弾が貫通した黒い跡がある。しかし肝心の中央だけは貫通しておらず、無傷だ。中央のすぐ近くならいくつもの弾痕がある。狙っているのに中々当たらない、といったところだろうか。的の周辺を見てみれば、地面にも弾痕がいくつかある。

ボロボロの的に手を伸ばし、触れる。そして目を閉じて集中すると、的が温かくなってくる。この的に当たったスピラの僅かな名残が、触れた手の下へと集まってくる。この的にあるスピラの名残が、

使用者を教えてくれる。

ルーナは目を開けた。スピラの名残が集まってきた的を、そっと撫でる。そして下唇を噛みしめた。

的から手を離し、再び数々の弾痕を見つめる。

片手から本が滑り落ちた。地面に落ちた本は葉の挟みであるページを開いた。そのページに描かれた黒い馬の絵が、月光に照らされる。

「どうしよう……」

言葉が漏れる。

「どうしよう……！」

声いきゅつと高くなる。我慢できなかった。

月光に照らされた視界が歪む。眼鏡を外して目をこすると、手は涙で濡れていた。それを見ると、また視界が歪んだ。涙が溢れてくる。こぼれ落ちた涙は、落ちた本の開いたページに落下し、紙に吸われてシミになる。

もう泣かないと、十年前に決めた。泣き虫だった自分は十年前に消え去ったはずだった。それなのに涙が溢れてくる。

だから駄目なのだ。悔しさも混じって涙が止まらなくなる。

気分が悪かった。喉の奥、胸の中に、熱を持ったもやもやが渦巻

いている。吐き気すらもした。それほどに恐ろしく、焦っていた。

本を拾おうとしやがみ、眼鏡を持たない手を伸ばす。伸ばした手は震えていた。

「……そんなに焦らんでもいいだろうに」

背後から声がした。涙と震えが止まる。振り返ると、歪んだ視界の中に人影があった。ルーナは慌てて涙を拭って眼鏡をかけ、本を拾って立ち上がった。

「根っこはやっぱり泣き虫だの」

ディーモはこちらへと歩いてくると、顔を見てそう言った。だからルーナは俯いてしまった。するとまた泣きそうになる。視界に人がいないと、いつもの自分に戻れない。仕方なくルーナは顔を上げ、ディーモを見た。涙が一筋頬を伝う。しかしディーモはそれを見て満足そうに笑った。そしてボロボロの的に手を伸ばし、撫でる。

「しかしこれはよくないのお」

ディーモは目を細めて弾痕だらけの的を見下ろした。

「これを見たところ、大分きているの。死ぬまであと数日というところか」

——死ぬまであと数日。

「詳しく言えば十日ぐらいか」

――十日。

――十日で、死んじゃう。

ルーナは息を止めた。そして吸い、ゆっくりと吐く。焦燥と不安で胸がいっぱいだった。

「あなたは……知っていたんですね？ エンジのこと……」

「ああ。奴が例の任務から戻ってきた時から気付いたよ。呪いの気配ですぐわかる。ま、ほっといたが」

――どうして、あなたは。

どうしてあなたは気付いているのに放っておいたんですか？
そう聞こうとした時だった。

「お前さんが気付くと思ったのじゃ」

質問をする前に、答えが返ってきた。

「お前さんに気付かせたかったのじゃ」

「私に、ですか？」

うむ、とデューモは頷いた。そしてからかうように笑うと、開けたこの場所の中央へと進む。

「進展が欲しいだろう？ 十年続くこのケンカに」

からからと笑いながら、月光に照らされたデューモは回る。

「さてルーナ。お前はどこからことを始めればいいのかわかってるのか？ 呪いはどうやったら解けるのかわかってるのか？ 材料に何がいるのかわかってるのか？ 多分お前はまた泣いて進まないだろうから、わしから一つ、ヒントをやるぞ」

ルーナは困惑し、デイーモへと一步步み寄る。デイーモは回るのをやめて空を指さした。それは南の方角だった。

「『染まる光の呪い』——この呪いを解くに必要なものはどれも大変珍しいものじゃ。しかし、だ。この呪いを解く材料の殆どは、あの『夕闇の森』にあるんじゃないよ……光はいつも闇の中にある、ということじゃな」

「『夕闇の森』……」

それは、スピラ使い達の間でももっとも危険な地域のひとつとされる、ロゼラスの街を出た南にある森だった。

「そうじゃ。あの森は恐ろしいところぞ。心を惑わし魂を食う。だがそこに光はあるぞ。過去の記憶を頼りに進むがよい」

デイーモはルーナに背を向け、薄暗い林の中へと入っていく。そして振り返らずに五本指を見せた。

「期限はいまから五日後までじゃ。そこが限界じゃ。呪いは病と同じ、弱りきった身体に薬を与えても手遅れじゃ。——エンジの隠す呪いのことを知っているのはただ一人、お前、ルーナだけじゃ。お前だけが呪いについて知っている、お前だけが呪いを解ける。——殺される前に殺すのじゃ」

デイーモの姿が薄闇に飲まれて消えていく。そうして姿を消した。

ルーナは何もせず、聞いているしかできなかった。しかし南の空を見上げて口を固く結んだ。

「『夕闇の森』……」

電撃が走ったかのように身体が震える。幼い頃の恐怖が、記憶の奥底からよみがえってくる。暗黒に包まれた森を、一人歩いた恐怖。

——それでも、そこに光があるのなら。

——トラウマを超えなければいけない。

——借りは返さなくてはいけない。今度は私がエンジを助けなければいけない。

満天の星を見上げる。どの星も空が暗闇であるからこそ、こうして綺麗に輝いている。

何も持たない手をぎゅっと握りしめる。幼い頃に強く手を握ってもらった、あの感覚がよみがえる。

chapter 02

窓からは見える空の半分は茜色に、もう半分は紺碧に染まっていた。空を飛ぶ白い鳥の群れが、紺碧から逃げるように茜色の空へと飛んでいる。茜色の空の端には沈んでゆく太陽が、紺碧の空の端には昇りつつある欠けた月がある。

赤い夕日が家々に差し込むこの時間は、酒場『フレンフィール』が人々で賑わい混む時間帯の少し前だ。夕食にしては早い時間であるし、呑むにしてもまだ早い。

カロンとセンフィは、少し早い夕食を摂っていた。普段からよく使っている二人席のテーブルには水の入ったグラスが二つに料理の皿が五皿ある。五皿のうちすでに三皿は平らげてあって何もなく、まだ半分ほど料理の残っている皿をセンフィが、もうすでに料理がなくなってしまうような皿をカロンが突っついていた。

カロンはパスタを流し込むように食べている。果たしてしっかりと噛んで食べているのだろうか、センフィは疑問に思いつつ自分の皿のサラダにフォークを突き刺した。カツツと硬い音がする。そして口へ運ぼうと思うにも、やはり気になってしまい考え込み、フォークを握ったままもう片手で頬杖について溜息を吐いた。

「どうした？ 腹減ってないの？ オレ食べるよ？」

パスタを全て平らげたカロンが顔を上げ、首を傾げる。センフィはカロンを見据えた。

「あんた、もう四皿食べたじゃない」

「まだ食べれるよ？」

「……ほんと、よく食べるのねー」

「おう」

するとカロンはテーブルに身を乗り出し、センフィの皿へと手を伸ばしてきた。センフィは慌てて皿を持ち上げカロンの手から皿を引き離す。

「ばか。なんであたしの食べようとするの？」

「お腹すいてないんじゃないのか？」

「すいてます！ 勝手に食べようとしなideよ！」

声を上げて睨みつける。カロンは「なんだよー」と口を尖らせて元のように椅子に座った。それをセンフィは確認すると、料理の皿を元の場所に戻し、鮮やかな葉が刺さったままのフォークを握った。そして口に運ぼうとしたが、

「で、どうしたの？」

カロンが首を傾げ、こちらを見てくる。センフィは葉の刺さったフォークを前にして口を開けたまま固まる。しかしフォークを皿へと戻すと、溜息を吐いた。そして悩む。なんとやっていいのか、言葉が見つかからない。しかし据わった目をカロンに向けて答える。

「何か……へん」

「……オ、オレが!？」

カロンは目を丸くして椅子から立ちあがった。テーブルの上にある皿が揺れてぶつかり合い、音を立てる。すでに水の入っていないカロンのグラスが倒れる。一体何事か、と、店内の客の視線がカロ

ンへと集まった。しかし当のカロンは気付いていないのか、気にも留めない。両手を自らの頬や頭に当てる。

「オレ、変か! ? 確かに最近寝癖が増えた気がしなくもないんだけど……あっ! ロロのジュースを飲んだせいかな? ぬううん?」

頬を指でつねり、頭をかきむしる。そして自身の全身を見下ろし、首を傾げる。そんなカロンの様子に、センフィは思わず吹き出してしまう。

「あんたは最初っからヘンよ」

センフィは周囲を見回し苦笑いする。誰もが神妙な顔をしてこちらを見ている。

「あたしがヘンだって言ってるのは、あんたのことじゃないから……座って?」

カロンは大人しく座る。そして興味津々に、

「じゃあ、何がヘンだ?」

「うん……」

改めて聞かれて答えようとするも、センフィは言葉に詰まってしまった。

「うん、なんだろうなあ……」

この曖昧な感覚をなんとなく言っているのか、わからない。どう表現したらいいのか、よくわからないこの感覚。

「なんか……全部ヘン」

考えた末に出てきたのは、自分でも良く分からない、曖昧すぎる言葉だった。苦笑いして答えたものの、カロンはきよとした。

「全部ヘン？」

「あー、うん……何か、ヘンな感覚がするっていうか……その」

この感覚を表せる言葉を、頭の中で一生懸命に探す。しかしやっぱり見つからない。

「空気が変わった、っていうか」

「……？」

「その、とにかくヘンなのよ！ 全部が！」

「ダメ。わかんない」

カロンは笑顔でそう返してきた。だからセンフィは深く溜息を吐いてサラダにフォークを刺した。

「じゃあいいわよ、もう」

鮮やかな色をした小さな葉を口へと運ぶ。シャク、と口の中で音がした。

もうじきこの店が混み始める時間だ。夜は昼よりも混む上に、呑んで酔う者も少なくはない。妙な人間も集まってくる。自分やカロンはスピラ使いと言ってもまだ純に大人ではない上に、厄介な人間に絡まれるのは避けたい。酔っ払い達はすぐに厄介ごとを起こす。店主にも迷惑をかけたくない。そろそろ店を出なければ。

「そろそろ店でないとね。沢山の人が集まってくるわ。ちよつと待ってね、すぐ食べちゃうから」

センフィは急いでサラダを食べ始める。カロンは何も言わずに、空の皿を重ね始めた。それから倒れたグラスを立て、そこでふと、

「へんって言えばさ、最近エンジとルーナへんだよね」

「へっ？」

不意にそんなことを言われ、センフィは首を傾げた。エンジとルーナは、最近見ていないからよくわからない。しかしカロンはそのことを口に出した。

「最近、エンジもルーナも見ないんだ。センフィ見た？」

「ううん。全く見てない。任務じゃないの？」

カロンは首を振った。

「それが違うみたいなんだよねー。二人とも任務には出てないって、デイーモ言ってた」

「へえ……じゃあどっかいるんじゃないの？」

「でも街や本部を探してもどこにもいない。へんでしょ？」

ふうん、と生返事を返す。確かにそれはへんだ。しかしそれと同時に、特に気にすることではないのでは、と思う。二人がどこかでスピラのぶつけ合いをしている、よりも大変なことではない。そもそも、どこかに姿を隠してしまうスピラ使いなんて珍しくはない。ウールカは気付けばどこかへ行ってしまう、また気付けば果物を手に抱えて帰ってくる。錬金術達は薬草採取に出かける。エンジやル

「ナがない理由だって、少し考えれば分かる。」

「きっと、エンジは街の近くで実戦訓練みたいなこととしてて、ルーナはどこかで薬草探しでしょ？ 気にすることないわよ」

chapter 03

そうかもしれない、とカロンは笑った。

「ルーナはよくわかんないけど、エンジはいつも熱心だもんな。訓練かも。昔、『強くなってくる』って言って、一年ぐらい消えた事あったらしいし」

「出た。意味のわかんない噂。あれってホントなの？」

センフィはテーブルに身を乗り出した。からかうような笑みを浮かべたものの、内心ではその真偽を本当に知りたかった。スピラ使用の中でも、そんなことをするような者は聞いたことない。ましてや一年間全く姿を現さなかったという噂だ。果たしてエンジはそこまでしたのだろうか。

しかしカロンは首を横に振った。

「ホントなのかはオレも知らないよ。エンジに聞いて見ようにもさ、ちょっとためらっちゃって」

「なんでためらうのよ？」

カロンは首をすくめ、苦笑いをした。

「だって、なんでそこまでして強くなろうとするのか、わからないんだもの」

「……………」

確かに。

一年間をも姿を消してまで修行して、一体何をしたかったのだろうか。修行をするからには強くなりたかったのだろう。しかしそれで一体どうしたかったのか。

強くなることは悪いことではない。強力なスピラ使いになれたならば、魔物との戦いも楽になる。死んでしまう可能性だって低くなる。

死ぬのが怖いのだろうか。

しかしそうであれば「修行のため」と街の外へ出て、誰にも気付かれない場所に行き、一年間も姿を消すだろうか。外よりも、街の中の方が断然危険が少ない。そもそもスピラ使いは死と隣り合わせのもの。イレギュラーな者も一部いるが、死ぬのが怖いのなら、まづスピラ使いになんてならないだろう。ましてやあの『黒の日』以降にエンジはスピラ使いになり克蘭・ギルドに仲間入りした、と、センフィは聞いている。センフィ自身は体験していないが、『黒の日』はスピラ使いがいかにかに死と隣り合わせであるかを人々の目に焼けた日だ。その日以降、スピラ使いになる者は減ってしまった。そんな時期に何故エンジはスピラ使いになったのだろうか。

「……思えばエンジって、ヘンなところが多いわね」

センフィはぼつりと呟く。

一年間にも渡る失踪、スピラ使いになった時期、そして少し貪欲なほどに力を求める事。

そもそも、その一年間の修行の成果なのか、エンジのスピラは普通のスピラ使いより強い。

エンジは一体どこまで強さを求める気なのだろう。

強さを求めることに、際限はない。センフィは少し怖くなった。

と、聞きなれた子供の声が入ってきた。店の奥を見れば、厨房へと続くドアが開き、そこから十歳程の子供二人が飛び出してきた。

ジェードとシェーラだ。この街に住む双子で、シギの弟と妹だ。

どうやら二人は今日もこの店の手伝いをしていて、それがいま終わったらしい。二人は店の奥から入り口へと走りぬけると、ドアベルを派手に鳴らしながら店を出て行く。そういえば、今日彼らの兄であるシギが街に戻ってくる日だ。手伝いを終えた二人は、これからシギに会いにギルド本部へと向かうのだろう。二人が出て行く際、妹であるシェーラは自分とカロンに気がついたらしく、こちらに小さく手を振った。センフィとカロンも慌てて手を振り返したが、その時すでにシェーラは外へと出て行ってしまった。元気な様子の双子を見て、センフィは笑った。

双子に続いて、厨房から人影が出てきた。この店の店主である、ヒューモ族のネジュアだ。

「二人とも、何の話をしてるの？」

ネジュアは近くの誰も使っていないテーブルから椅子を一つ掴むと、センフィとカロンのテーブルへと持ってきて座った。雪のような髪が明かりに輝いた。銀の瞳も、無邪気な子供のように輝いている。

酒場『フレンフィール』が街の外でも有名な理由の一つが、ネジユアのこの容貌にある。もちろん料理の味が良いという噂でも有名であるが、「銀の容貌を持つ女店主」というネジユアの容貌についての噂の方が有名だろう。その言葉が表すとおり、ネジユアは銀の容貌を持っている。珍しくも美しい輝く銀の髪、銀の瞳。肌も白く雪のようで、性格は子供のように無邪気で気さくである。少し驚いてしまう容貌だが、この性格のため客は親しみやすく、そこも『フレンフィール』が有名である理由だろう。

「ネジユア、仕事は？」

カロンのネジユアに聞く。ネジユアは足を組んで椅子の背もたれに寄りかかった。そして片足でバランスを取りながら椅子を傾けて揺らす。

「ちょっと休憩。それに、何かあんた達が楽しそうに話しててさ。

何の話をしてたの？」

「楽しそうって……」

センフィは思わず苦笑いを浮かべた。楽しそうに見えたのだろう。するとネジユアは、

「なーんか真剣に話しててさ。何？　噂話？　隠し事？」

「そ、そんなじゃないわよ。エンジの話をしてただけ」

エンジの話？　と、ネジユアは首を傾げた。だからセンフィが先程までカロンと話していたことを伝えようと口を開くも、ネジユアは手でそれを遮って考える素振りを見せた。

「待つて、当てる。考えさせて」

そしてしばらく考えて、答える。

「わかった。川とか池に落ちて死にかけたんでしょ。子犬みたいになっちゃったんじゃないの？」

「子犬みたいになって何よ。違うわよ」

溺れたエンジを見たことはなかったが、思わずセンフィは笑ってしまう。

「んー、じゃあ、長年仲の悪かったルーナと仲良しになった？」

ネジュアは続けて答える。今度はカロンが否定した。

「絶対ありえないよ！ 違うよ」

「じゃあ、何？」

傾けていた椅子を正し組んだ足も元に戻してネジュアが首を傾げる。センフィはカロンと顔を見合わせ、溜息を一つして答えた。

「エンジって、ちょっとヘンって話をしてただけよ」

「ヘン？ どの辺が？ あの子は兄よりまともだけど？」

「何か色々ヘンなのよ。スピラ使いになったのが『黒の日』の直後だって言うし、一年間失踪してまで修行したって言うし……」
「あー……」

するとネジュアは笑みを浮かべた。

「成る程ね、成る程ね。確かにヘンね。うん……」

「ネジュア、何か知ってるだろ？」

妙な様子のネジュアに、カロンの立ち上がって目を輝かせた。しかしネジュアは片手で頬杖をついてカロンを見上げた。

「知らない。ドラゴンでも倒したいんじゃないの？」

「何それ。いくらエンジでも、無理があるわよ……」

センフィは苦笑いをしながらネジュアの冗談に返した。しかし、そう答えた直後にそうなのかもしれない、と考える。『黒の日』は魔物の王とも呼ばれるドラゴンをも姿を現した日だ。それも一頭や二頭だけではない。十数頭が姿を現し街を襲った。もともと姿をあまり現さない上に、現したときは十人近くのスピラ使いが協力しないと倒せない強力な魔物である。何人ものスピラ使いがこの『黒の日』に亡くなったのは、このドラゴンのためだと聞いている。そんな中、エンジはスピラ使い達が死んでいくのを見たのだろうか。そして絶望の街の中、何かがあって闘志を燃やしたのかもしれない。

そう考えると、その何かの見当は大体つく。――エンジは天涯孤独を理由に、危険な任務を自ら請け負うことが度々ある。

しかしいくらエンジでも、ドラゴンは倒せないだろう。センフィはドラゴンを見たことはないが、エンジ一人ではドラゴンは倒せないと断言できる。現に、強いスピラ使い達が多くいた十年前の『黒の日』であるが、皆ドラゴンによって亡くなっている。

「だから強くなりたいってことね……仇を取るために」

「多分ねー」

呟くとネジュアがうんうんと頷いた。しかし椅子に座ったカロン

は首を傾げている。と、カロンはふと思い出したように目を開き、ネジユアを見つめた。

「そういえばさ、エンジの話をして思い出したんだけど、ネジユアってエンジに詳しいか？」

「うん？　どうしたの突然。まあ詳しいっちゃあ、あんた達より知ってるかな。あいつの兄と友達だったし」

カロンはそれを聞くと笑った。しかし少し困った様子で、

「じゃあさ、オレ、気になってることがあってさ……」

「何？」

「その……」

カロンは何故か店の様子をちらりと見た。まるで話してはいけないことを話そうとするように。

そして口を開いた。

「エンジとルーナは昔仲良しだったって噂……あれ、ホントなのか？　信じられないんだけど」

私も信じられないよ。センフィは心の中で呆れた様子混じりで呟いた。

よく聞く噂である。どこから流れ出したのかは知らないが。

あまりにも信じられない噂だ。そもそも、エンジとルーナが出会ったのは八年前。ルーナが『ノーウェン』にやってきたそのときから、何故かすでに仲が悪かった。エンジはロゼラスの街の育ちで、

ルーナはロゼラスの街から東南にある湖の近くの村の出身だと聞いている。「昔仲が良かった」の、「昔」はないのだから、明らかに嘘の噂だ。

こんな噂を信じているのかと思うと、カロンのことが少し不安になってくる。このくらいは分かってもらわなければならぬ。

しかし、ネジュアは笑って答えた。

「なんだ、そんなことか——本当のことよ。いまものすごい仲悪いけど」

chapter 04

誰もいない広いエントランスに声が響く。その声はギルド本部全体へと反響するほどだった。

「いいから医務室に来るのーっ！　くーるーのーっ！！」

ロロロネは半ば悲鳴のような叫び声を上げてエンジの右腕を力尽くで引っ張り、一階の廊下へと連れていこうとする。相当力んでいるらしく、筆のような尾も上を目指して逆立ち伸びていた。しかしそれでも非力だった。エンジはいくら引っ張られてもそれ以上の力で抵抗し、連れていかれまいと、また一步、エントランスから本部裏の訓練所へと続く扉へと進んだ。

「心配ねえって言うてるだろうが！　ちょっと疲れて倒れただけじゃねえか！」

振り返って顔を真っ赤にしたロロロネに怒鳴る。するとロロロネは犬歯を見せて怒鳴り返してきた。

「ちょっとどころじゃなく疲れてるんでしょ！　じゃなきゃ倒れないよ！　いいから大人しく医務室来るの！」

ぐい、と不意にロロロネの腕に力が入り、エンジはバランスを崩してロロロネへとよろける。しかし抵抗をやめない。すぐに引っ張り返すと目指す扉へとまた一歩歩む。すると今度はロロロネがバランスを崩してよろけた。その隙を期に、エンジはまた数歩扉へとロロロネを引きずりつつ進む。しかしロロロネは手を放そうとしない。

「俺のことは心配しないでいい！　いま誰か怪我してんだろ？　それで訓練所まで薬草取りに来たんだろ？　だったらそいつの相手してろよ、俺のことはほっとけて！！」

「だめええっ！　休みたくなけても、気付け薬飲むだけでいいから来るの！　こらっ！　外いーかーなーいーのーっ！　医務室なのーっ！」

「あーもーキーキーうるせえな！　いい加減放せ！」

エンジはロロロネに引っ張られている腕を思い切り振った。生じた遠心力がロロロネの身体を襲う。するとロロロネはあつけもなく右腕から手を放し、広いエントランスの中央へと転がった。萎えたかのように床に俯せに倒れる。

扉のドアノブに手をかけ、エンジは扉を開く。すると外からエントランスへと風が流れ込む。

「じゃあなロロ。早く医務室へ戻りやがれ——」

そうからかうように笑いながらエンジは振り返ったが、その瞬間、からかいの表情が非常に困った様子の苦笑いになってしまった。

エントランスの中央で座り込むロロロネが、いままで見たこともないような目つきでこちらを睨んでいた。泣き出す一歩手前のような、非常に悔しそうな目をして、歯を食いしばっている。心なしか、大きな垂れ耳の根本が立っている。尾も先程よりもずっと上を目指して立っている。

「いいいい……」

犬のように唸っている。しかし低い声ではない、妙に高い声で唸

っている。

「……何だよ」

流石に驚き、エンジは足を止めてしまう。ロロロネは唸り続けている。

「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii……」

何を伝えたいのかはわからないが、激怒していることに違いない。

エンジはロロロネへと向き直り、腰に手を当てて見下ろす。何故ロロロネがこんなにも躍起になって怒っているのか、その理由が見当もつかない。確かに自分は訓練中、気がついたら倒れていた。おそらく長時間連続してスピラを使い続けたため、スピラの調子が狂っただけのことだ。いまに始まったことではない。昔はよくスピラの調子を狂わせた。そのときロロロネには「少し休んで」と声をかけられ注意されるだけで済んだのだが、いまのようにこうも騒がなかった。ましてや激怒するなんて考えられない。久しく倒れたからこうも騒いでいるのだろうか、と、考えられるが、それにしてもおかしい。

「iiiiiiiiiiiiiiii……」

一体何故躍起になっているのか？

と、不意にロロロネは唸るのを止めて、背後を振り返った。ロロロネの後ろには、上の階へと続く階段がある。

「ウールカ！ ウールカ！ 手伝って、エンジ投げて！」

階段の上に人影が一つあった。レイモン族のウールカが、いつものようににこにこ笑いながらこちらを見下ろしている。

やばい、とエンジは瞬時に感じた。

開いた扉へと慌てて駆け込む。しかし一步外に出たとたん、恐ろしいほどの力で服の襟首を捕まれ、同時に景色が飛ぶ。そして激しい衝撃が全身を襲ったかと思うと、エンジは座り込んだロロネの横で仰向けになっていた。身体の中にあつた空気が、衝撃に吐き出される。

「う、うえ……」

ゆっくり起き上がって先程まで立っていた扉を見ると、そこにはウールカの姿があつた。いつもにこにこ笑い、兎やウロウ族の垂れ耳を髭髯させる帽子を被った、レイモン族のスピラ使い。どうやら自分は、この男に投げ飛ばされたらしい。

「数秒前まで階段にいたのに……速過ぎるだろ……」

エンジは驚きつつも呆れた溜息を吐きながら痛む身体を起こした。確かにウールカは数秒前まで階段の上にいたのだ、自分が振り返って外へと一步踏み出すのにかかったのは数秒だけ。その数秒の間にウールカは自分の背後までやって来た。速過ぎる。普段背負っているはずの巨大な槌を持っていないからだろうか。

ウールカは首を傾げてエンジを見下ろした。そしてロロネへと視線を移す。

「ウールカありがと！」

ロロロネはぴょんと立ち上がると、ウールカに笑顔を返した。ウールカもにこにこ笑っている。

「エンジ、医務室行くよ！」

ロロロネはエンジへと手を差し伸べる。エンジは溜息を吐くと、その手を受け取り立ち上がった。しかし、

「行かねーよチビ」

再び扉へと向かって進む。だが扉の前にはウールカが立っていて。

「ウールカ、そこどけ」

エンジは吐き捨てるように言う。しかしウールカは何も言わず、にこにこ笑っている。ウールカの身長はエンジよりもある。まるでウールカは、こちらを馬鹿にするように見下ろしている。

「ウールカ、どけて」

しかしウールカは動こうとしない。いい加減腹が立ってきたエンジは、思わず怒鳴った。

「ウールカ！ 邪魔だと言ってん——」
「うー？」

ようやくウールカが言葉を発したかと思うと、その手がエンジの襟首へと伸びてきた。がしりと力強く掴まれる。だからエンジは何

も言えなくなった。

これ以上何かすると、また投げられてしまう。

エンジは諦めの表情で振り返った。ロロロネが笑っている。

「医務室」

「……ちっ」

思わず舌打ちしてしまう。ウールカの手を払いのけ、ロロロネへと向き直る。

「行けばいいんだろ、行けば」

ロロロネは嬉しそうに跳ね、そして一階の廊下へと進む。エンジも大人しくその後が続く。振り返るとそこにウールカの姿はなく、どこに行ったのかと見回すと、いつの間にか階段を上がって上の階へと姿を消すのが見えた。一体いつの間にあそこまで移動したのだろうか。

「速過ぎるだろ、あいつ」

感心を通り越して呆れの溜息がでてしまった。

chapter 05

医務室へ向かうロロロネの背を追う。尾がロロロネ自身とは別の生き物のように揺れている。何故だろう、今日の揺れ方は、いつもの揺れ方と違う気がする。

医務室はエントランスからそう離れてはいない。だから二人はすぐに医務室のドアの前へとやって来た。ロロロネはドアを開け中に入り、エンジンもそれに続く。薬のような独特のにおいが鼻を突く。そう広くはない静かな医務室だが、入ってすぐには薬の棚がいくつも並んでいる。その棚の前で、一人の少女が焦った様子で薬を探していた。確かこの子は、新入りの錬金術師だ。

「……どっかに座って待ってて」

ロロロネは新入りの錬金術師を見ると、エンジンに振り返った。そして焦っている少女の横に立つと「この棚じゃないよ、こっちの棚にあるよ」と少女を連れて別の棚までやって来て、そこにある小さな紙袋を手取る。その後薬の使い方について少女に教え始めるが、何を言っているのかわからず、エンジンは医務室の奥へと向かった。医務室は仕切りによって薬棚が並ぶ部屋とベッドが並ぶ部屋に分けられている。エンジンは仕切りを挟んだ向こうへと進んだ。

窓のカーテンは閉められていた。しかし僅かな隙間から夕日が差し込み白いシーツの上にオレンジ色を落としている。カーテンが閉められているというのに、部屋全体がオレンジ色だった。と、奥のベッドに人影がある。ベッドに入ってはいるものの、上半身を起こしてこちらを見ている。エンジンは何も言わずにそのベッドへと近づいた。

「……なんだあ？」

ベッドにいたのはシギだった。そういえば、今日任務から帰ってくる予定であったのをエンジは思い出す。しかし帰ってきたシギのこの姿を見ると、任務はどうもつらいものだったらしい。シギは頭に包帯を巻いていた。簡易な服の下から見える胸にも包帯が巻かれている。袖を捲かれた右腕にも包帯が巻かれてあって、それだけではなく全身のところどころに絆創膏を貼られていた。

「おい、なんだ、やばい怪我したのか？」

シギは何も答えようとはしなかった。相変わらず無表情だ。しかし、

「お前はなんでここにいる」

「なんでって……」

質問を返され、エンジは困惑する。医務室に用があるから、とは言いたくなかった。エンジは腕を組んでシギを睨んだ。

「なんだっていいだろ」

だがそう答えた瞬間、仕切りの向こうからロロロネがやって来て、

「訓練所の、誰も来なさそうなところで倒れてたの。起こしたら起きたけど」

「おい！　ロロ！　何喋ってんだ！」

「練習してるところを誰にも見られたくないからってあんな場所で頑張っ倒れて、ボクが来なかったら、きっと誰にも見つけてもら

えなかったね、エンジ」

ロロロネは片手に透明の液体が入った小瓶を握り、もう片手には手乗りサイズの鍊金釜を乗せていた。シギのいるベッドの端に座ると、小瓶をエンジへと手渡した。

「はいこれ、気付け薬。全部飲んでね」

そしてロロロネは膝の上に釜を置くと、ポケットから大きな葉を数枚取り出し釜の中へと押し込むようにして入れた。それは、先程ロロロネが採取していた薬草だった。薬草を加えた釜の中を、ロロロネは銀の薬匙でかき混ぜる。

「シギもうちよつと待っててね、これ練金したら薬になるから」

「どうやら、あの薬草はシギのためのものだったらしい。と、ロロロネがこちらの視線に気がついたのか顔を上げた。

「うーん……どっかの誰かさんがさ、沢山傷薬を作ってくれてあったんだけど、それじゃあシギの傷に効かないんだ」

エンジは思わず眉を曇らせた。

「傷薬が効かないって、どんな怪我してんだ……」

すると、シギは無言で右腕の包帯を取り始めた。そうして現れたシギの腕に、エンジは声を漏らしてしまった。シギの腕には、青黒い小さな斑点がいくつもあった。その斑点の中央からは、黒く輝く水晶のようなものが飛び出している。それは皮膚を突き破って生えてきたかのようで、水晶の根本からは血が流れ出ている。シギの腕

は、血の流れる筋と青黒い斑点、そしてその中央で輝く水晶に侵されていた。

「何だよこれ……」

エンジはシギの腕をまじまじと見つめる。気味の悪いものだった。ロロロネも苦い顔をした。

「腕の中に魔物のスピラの塊を植え付けられたみたい。しかもただのスピラならよかったけど、これ、発芽してるんだよね」

「そんなことあるのかよ」

「植物性の魔物の中でも、上位の魔物はこうやって人間にスピラを植え付けるんだって」

ロロロネはそう答えると、釜の縁に手を添えた。すると釜を中心に小さな魔法陣が現れる。魔法陣はくるくると回転する。

エンジはそんな錬成模様を見ながらシギの隣のベッドに座り、受け取った小瓶のコルクを抜いた。そして一気に中身を飲み干す。気付け葉はひどく苦く、熱い。口の中に流れ込むと、喉を焼くようにして流れ落ちてゆく。堪えて全てを飲み干すと、空になった小瓶をシギのベッド脇の小さなテーブルに置いた。そして立ち上がり、廊下へと続くドアへと歩き出す。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

するとロロロネは釜を押しつけるように乱暴にシギに手渡した。釜を中心に現れていた魔法陣が消え失せる。ロロロネはベッドから飛び降りるとエンジを追い、その服の背を掴んだ。エンジは振り返りロロロネを見下ろす。

「何だよ」

「どこいくの？」

「さっきのところ」

「ダメ。休むの。また倒れる」

ロロロネはぐいとエンジの服を引っ張った。エンジの手をはいた。
た。

「気付け薬飲むだけでいいって言ったよな、お前。だからここにはもう用はねえ。戻らしてもらおうぞ」

「だめえっ！ 無理しないで休むの」

「無理してねえって」

エンジはロロロネを無視して先へと進む。ロロロネはエンジの先へ回ると立ちふさがった。

「休むの！」

何故か必死の様子のロロロネを見下ろし、エンジは溜息をつく。
全く、訳が分からない。

「お前、何で今日そんなに躍起になってんだ？」

「いいから休むの！」

ロロロネは答えようとしない。というよりも、いまの問いを聞いていたのだろうか。

「ロロ……」

「うるさい！」

ロロロネの叫びが医務室に響く。何事かと、新入りの錬金術師の少女がこちらを見ている。いまのロロロネには、何を言っても怒鳴られそうだ。いったいどうしたというのだ。

「お前――」

「外だめ！ 休んで！」

「お前一体どうした――」

「だめっ！ また死んじゃったらどうするの！！」

――『また』？

ロロロネが何を言っているのか、エンジには理解できなかった。しかし、周囲を見回してすぐにその言葉の意味に気がついた。ロロロネは叫んだとたん、顔を青ざめさせた。そしていままでの勢いはどうしたのか、申し訳なさそうに俯いた。エンジにはない、エンジの背後のシギにだ。振り返ってシギを見ると、シギはいつものように無表情だったが俯いていた。

シギは今日任務から戻ってきた。強いスピラ使いであるが、こんな深手を負って。それほどに敵が強かったのだろう。しかしもちろんシギは一人で戦った訳ではないはずだ。他のスピラ使いと協力したに違いない。だがこれ程の傷を負っている。スピラ使い数人でも、手を焼く危険な魔物だったのだろう。

何があったのか、想像が出来た。

「……誰が」

エンジは言葉を探す。しかし見つからない。

「……誰が」

「――新入りの、魔法使いだ。おそらくエンジは会ったことがない、な」

エンジの半端な問いに、シギが答える。

「本当はウールカと二人だけで任務に出るつもりだったが、同じ魔法使いだから見習いたいと一緒にいった。任務の対象の魔物はそう強いものではなかった予定だったし……」

「それでとんでもないのに当たったってか？」

「……食い、殺されて、しまった」

「そうか」

胸の奥に妙な感覚が生まれる。冷たく締め付けるような、妙な感覚。それは胸の奥にもたれるようにして居座り、息を詰まらせる。

ロロロネが躍起になる理由もわかった。ロロロネはもう、誰かが死ぬなんて考えたくないのだ。

「シギごめん、エンジごめん」

ロロロネは俯き、震えていた。

「ボク、その子と仲良かったんだ……ウロウだったし……。ボク、ちょっとおかしかったね、ヘンだったね」

シギのベッドへと戻り、元のように座る。シギから練金釜を受け取ると、大人しくかき混ぜ始める。一度は消えた魔法陣が再び現れ、釜を中心に回り始める。やがて釜の中から小さな光が溢れ漂う。

エンジは溜息を吐き、何も言わずにシギの隣のベッドへと戻り腰を下ろした。

と、医務室のドアが開く音がした。足音がこちらへとやってくる。仕切りの向こうから姿を現したのはウールカだった。この場に似合わない、いつもの笑顔を浮かべている。しかしその手には、銀の小さなプレートをしっかり握っていた。スピラ使いの墓標となる、プレートだ。

ウールカはこちらまで来ると、そのプレートと長い銀の針をシギに差し出した。シギは青黒い斑点に侵された腕を伸ばし、黙ってそれを受け取る。プレートには、中央を空けて模様が刻まれている。この模様は種族によって違う。

シギはまるでそのプレートの重さを確かめるように手のひらに乗せ、見つめた。そして静かに、プレートの上に針の先を滑らせる。死んでしまった仲間の名前を、刻んでいる。それが終わると再び見つめる。こうして名前を刻まれたプレートは、本部裏にある深い泉に投げ入れられる。大抵のスピラ使いの遺体は収容できない。だから、その泉が皆の墓となる。

いつかは自分もこのプレートに名前を刻まれ、泉に投げ入れられる。そう思うと、エンジは妙な気分になった。死ぬのが怖いわけではない。そんなものはスピラ使いになると決めたときに覚悟し、受け入れた。しかし胸の奥で居座っていた冷たい感覚が粘着性を持った水のように伸び広がり、胸を締め付ける。冷たさが胸全体に浸透する。それは、この空気の重さに似ていた。息は普通にしている、しかし何故か息苦しいと感じる。カーテンの隙間から差し込む夕日が、妙に眩しく輝かしい。

「……シギ、いまから墓の泉に行く？」

ロロロネは釜の中身を混ぜるのを止め、シギに問う。

「薬、できたよ。泉行く前にする？　後にする？」

シギは顔を上げ、閉められたカーテンの隙間から覗く夕日を見た。そして銀のプレートを枕の下に押し込み、針をウールカに返す。

「……泉は後で。『フレンフィール』で手伝いを終える時間だ、弟達が来るかもしれない、今日戻ってくると伝えたから。薬は……すぐ終わるのか？　弟達に見せられたものじゃないんだが」

「すぐ終わるけど、多分かなり痛いよ？　いい？」

シギは黙って頷いた。ロロロネは一旦釜をシギに渡して棚のある仕切りの向こうへ行くと、大きなバットを持って戻ってきた。釜を受け取るとそれをベッド脇の小さなテーブルの上に置き、バットをシギの膝の上に置いてシギの腕をその上まで持ってきた。

「痛いよ、絶対痛いよ。我慢してね」

ロロロネは釜の中身を薬匙ですくうと、シギの青黒い斑点の浮き出た腕にかけてゆく。その薄い黄緑色をした液体の薬がシギの腕の青黒い斑点、その中央にある水晶のようなものに触れると、じゅつと音を立てて煙が上がった。シギは無表情だが、腕が震えている。しかし水晶のようなものは煙を上げると、溶けて失せていった。

ウールカはエンジの隣に座ると、やはりにこにこしながらそんな様子を見ていた。エンジはウールカをちらりと見る。するとウール

カはこちらへと顔を向けた。やはりにこにここと笑っていた。と、ウールカの帽子の下から、包帯が覗いていることに気付く。ウールカも、何かしらの怪我をしているらしい。もしかすると、見えない部分にはシギ同様に大きな怪我があつて、それを隠しているのかもしれない。しかしウールカはそれでも笑っている。シギが大きな怪我を負ってしまったても笑っている。仲間が死んでしまったいまでも笑っている。――まるで、悲しんでばかりいられない、と言っているようだった。

chapter 06

すでに漆黒に染まった雲一つない空には、数え切れないほどの小さな星が宝石のように輝いていた。その中で昇りつつある月は、銀色に輝いている。満月ではないものの、今夜の空は明るかった。

賑わってきた『フレンフィール』を出たカロンとセンフィは、そこから大通りへと続く路地を歩いていった。路地には人氣がなく、そよ風が静かに流れている。普段は薄暗いものの、今日は空が明るいため、そう暗くはなかった。

「結構長く話してたんだな、オレら。ほら、お月様があんなところにあるぞ」

頭の後ろで手を組み上機嫌に歩いていたカロンが、不意に立ち止まって欠けた月を指差す。月は、空の低くもなく高くもない場所に浮かんでいる。

「……月って、食べたらいしそうだよなあ。金ぴかの月はもちもちしてそう。銀ぴかの月は氷みたいに冷たそう」

カロンはどうしていつも食べることを考えているのだろう。センフィはカロンの背後で苦笑した。

「あんたが月食べちゃったら、大変なことになるわよ。夜に月がなくなったら真っ暗になっちゃうじゃない。そしたら、あんた達レイモン族はみーんな夜何にも見えないわよ」

「それは大変だなあ。オレら暗いと何も見えないから……」

カロンは困った表情を浮かべるとその場にくるくると回転した。こうも軽々しく振舞われると、彼の背負った大剣がおもちゃのように見える。カロンはぴたりと動きを止め、空を仰ぐと言った。

「それにしても、噂、本当だったんだな」

そうして、カロンにしては珍しい表情——真面目な表情を浮かべた。だからセンフィは目を丸くして、

「あんた、そういう顔できるんだ」

「そういう顔ってなんだよー」

次の瞬間、センフィは思わず小さく笑ってしまった。カロンが真面目な顔をしている、と再認識すると、思わず吹いてしまった。カロンはそんなセンフィを見ると、頬を膨らまし、目を座らせてセンフィを睨んだ。

「ごめん」

センフィはただ一言謝った。しかしカロンを見ると、先程の真面目な表情が思い出される。笑いがこみ上げてくるもそれを耐え、センフィは深呼吸をして満天の星を見上げた。

「……でも、噂、本当だったわね。信じられないわ」

カロンの真面目な顔を抑え、先程のネジュアの話思い出す。仲の悪いエンジとルーナは昔仲がよかったという噂。まさかネジュアその真実を知っているとは思わなかった。そもそも、この噂はデマであるとセンフィは思っていたし、周りもそう思っているはずだ。あの仲の悪い二人に、仲が良かった時期があるなんて、誰も考えら

れないし想像できない。しかしネジュアが言うのなら、二人が仲良しだったというのは本当なのだろう。ネジュアは嘘をつかない。

『ルーナもこの街の出身なのよ？』

ネジュアは首をかしげながらそう言った。

『なんか、みんなあの子が東南の村出身だとか言ってるけど、ルーナはこの街の孤児院で育ったの。本当よ、あたし、その頃からあの子と知り合いだったもん。それで十歳くらいの時にこの街を出て、そこにいる錬金術師に弟子入りしたんだ。で、魔法を学んで、この街に戻ってきたってわけ。そのせいでみんな、ルーナが東南の村出身だと思ってるんだね』

ネジュアはにやにやと笑いながら語った。

『小さい頃のルーナってね、いまみたいに……なんていうんだろう、かつこよくないって言うか、そう、引込み思案で消極的な子だったのよ。それで孤児院では他の子の仲間に入れなくて、それだけじゃなくていじめられっ子で、いつも一人で本を読むか泣いている子だったの。で、対するエンジは孤児院では人気者、子供達を中心だった。街から孤児院へやってきては、そこでみんなと遊んでいたのよ』

そこで溜息をついて、しかしネジュアは話を続けた。

『そこである日ねえ……何があったのか知らないけど、エンジは他の子と遊ぶのをやめて、いつも一人だったルーナと遊ぶようになったのよ。何があったのかは本当にわかんないけど……多分、ルーナがいじめられてるところをエンジは見たんだと思う。ほら、あいつ、

地味に正義感強いでしょ？ だからきつと、ルーナをいじめからかばって、その成り行きで遊ぶようになったんだと思う。十年経ったいまでも思い出せるなあ……引っ込み思案で内気のルーナの手を引いて、エンジが街を走ってるの。そういえば、理由は分からないけどルーナが街の外に行っちゃって、それを聞いたエンジがすぐ探しに街の外へ飛び出した、なんてこともあったなあ』

信じられない話だった。

いまは非常に仲の悪いあの二人。そんな二人に仲が良かった時期があったなんて、誰が信じるのだろうか。衝撃だった。特にエンジとルーナが手をつないで遊んでいたなんて、想像できない。どう考えても、いまの仲が悪い姿しか考えられない。

じゃあ何で今はあんなにも仲が悪いの？ と、センフィは聞いてみた。しかしそこでネジュアは首を傾げ、腕を組んだ。銀髪が揺れる。

『あたしもよくわかんないのよね。気づいたら、ものすごく仲が悪くなっていたんだもの』

ネジュアですら、その理由を知らなかった。

「……あの二人、昔は仲が良かったのなら、なんで悪くなっちゃったんだろうね」

センフィは溜息をついて先へと進む。するとすでに進んでいたカロンは歩きながら振り返った。そして声を漏らしながら考える。しかし首を振って、

「あの二人があんなにもケンカしてるんだ、理由なんて、オレ、わかんないや」

と、そう言った瞬間、カロンは立ち止まって正面を見た。センプイも思わず立ち止まる。カロンは薄暗い路地の先を見つめている。

「シェーラだ」

カロンがそう言うのと同時に、薄暗い向こうから小さな人影がこちらへと走ってきた。小一時間ほど前、『フレンフィール』で手伝いを終え店を出て行った双子の妹、シェーラだ。シェーラは息せき切ってカロンとセンプイへと走ってくる。その幼い顔はひどくつらそうな表情を浮かべていて、泣いている。シェーラはカロンの前まで来ると立ち止まった。手を膝につき、激しく咳き込む。

「ど、どうしたのシェーラ？」

カロンはしゃがみ込み、シェーラの顔を覗き込む。センプイはシェーラまで駆け寄ると、咳き込む小さな背をさすった。相当急いで走ってきたのだろう、シェーラは何か言おうとするが、咳のせいで言葉を発せずにいる。

「シェーラ、ちょっと落ち着いて」

センプイはシェーラに優しく声をかける。シェーラは涙で濡れた顔を上げ、そしてセンプイと目が合うとまた泣き出し、咳き込む。涙がぼたりと音を立てて地に落ちる。と、カロンが周囲を見回している。センプイが首を傾げると、カロンは眉をひそめた。

「ジェードは？」

そう言われ、センフィも気づいた。ジェードとシェーラは、いつも一緒の双子だ。しかし、兄であるジェードの姿がない。

「ジェ、ジェードは……」

シェーラが言葉を発する。しかしまたすぐに咳き込み、言葉が続かない。

「ゆっくり息をするの。無理に喋ろうとしないで」

センフィはシェーラの背をさすりながら彼女を見下ろした。シェーラはしばらく肩で息し続け、咳が大分治まってくると、顔を上げ二人に叫んだ。

「ジェードを、助けて……!」

シェーラは震えながらセンフィの服の裾をつかんだ。

「お兄ちゃんに会いに行こうとしてたら、広場に友達がいて、そしてジェード友達に馬鹿にされて、それで怒って……友達が『夕闇の森』行っ来いって言うから、『夕闇の森』に行っちゃった!!」
「え、本当？」

カロンが顔を強ばらせてシェーラを見下ろす。シェーラは目をこすりながら黙って頷いた。

「センフィ、これまずくない？ 『夕闇の森』ってメチャクチャ危険だって言われてる——」

「うん……」

二人は顔を見合わせた。『夕闇の森』といえば、この街の近くにある森のことだ。非常に危険だと、教えられている。二人はしばらく何も言わずに互いを見ていたが、カロンは立ち上がるとシェーラに尋ねた。

「シェーラ、シギにこのことを話した？」

「話して、ない。お兄ちゃんには、心配させたくないから……」

するとシェーラはぽろぽろとまた泣き出す。

「お願い、ジェードを助けて！ もう、カロンとセンフィくらいしか、頼る人がいなくて……」

カロンは、ぽん、とシェーラの頭を撫でた。そしてセンフィを見る。センフィは苦笑いしながら答えた。

「急がなきゃね。いまから街の外に出れば、ジェードが森に着く前に追いつくかもしれない」

「おう。森に入られる前に捕まえないと」

そうカロンが言った瞬間、シェーラは電撃が走ったかのように震えた。カロンが驚いてシェーラを見下ろす。シェーラは、真っ青になっていた。

「ご、ごめんなさい……」

唐突に、謝る。

「ジェードが森に行ったの、大分前なの……しかも、家の子馬に乗

って……だから多分、もう森に……」

シェーラの言葉に、思わずセンフィは声を上げた。

「大分前って……どうしてその時にあたし達の所へ来なかったのよ！？」

「だ、だって……お兄ちゃんに言おうかどうか、困っちゃって……それに、あたし、ジェードがいないと何にもできないから……！」

そこまで言うと、シェーラはわっと声を上げて泣き出した。路地に幼い泣き声が響く。センフィは号泣する幼いシェーラを強く抱きしめた。

「ほらほら、落ち着いて、ジェードはあたし達が探してくるわ」

センフィが顔を上げると、カロンはすでに走り出していた。こちらを振り返って手を振っている。

「ギルドから馬を借りてくる！ センフィはシェーラを連れてギルドに来て！ もしすぐに馬借りられたら、センフィ達迎えに行くから、それでシェーラをギルドに預けてから『夕闇の森』に行こう！」

センフィは黙って頷いた。カロンは笑うと、路地の向こうへと走っていく。

「いい？ あたし達『夕闇の森』に行ってくるから、ギルドのみんなに何が起こっているか話してね。お願いよ。シギにも言うのよ、言われた心配よりも、言われない心配の方が重いんだから」

泣きじゃくるシェーラは黙って頷いた。セنفイは笑うと、シェーラの手を引いて路地を進んだ。

chapter 07

『夕闇の森』について、詳しいことはわからない。恐ろしい場所であることと、奥地には素晴らしい薬草が多く生息している、という噂しか知らない。

何故詳しいことが分からないのか――それは、森の奥まで入り込んで戻ってきた者がいないからだ。だから誰も詳しいことを知らない。何が恐ろしいのか、一体どんな薬草が生えているのか、誰もわからない。そもそも、恐ろしいのは確かなのだろうが、素晴らしい薬草が生えているという噂の真偽が怪しい。森の奥に入り込んで戻ってきた者はいないというのに、何故そんな噂があるのだろうか。

「ちょっと寒いね」

センフィを乗せたままカロンは馬から降りると、風に舞うこの葉を見つめた。そして静かに待ちかまえるようにしてある『夕闇の森』の入り口を見つめる。まるで奈落へと続く入り口のようにだった。木々の間から見える闇は、じっとそこに居座り、こちらを見つめているかのようだ。しかしカロンはあまり恐怖を感じなかった。それよりも、視界の悪さに目を細める。

「中、やっぱり真っ暗なんだな。ロロからライト借りてきて間違いなかったな」

カロンは首にかけたペンダントを手にとると、その飾りにしては大きな水晶を手握る。すると水晶は輝き、夜を照らす。本当は依然ロロロネが使っていた虫の触角のようなライトがよかったのだが、このペンダントをロロロネから渡された。あのライトは、現在改良

中らしい。

鬱蒼とした森の入り口には、小さな馬が待つようにしてこちらを見ていた。恐らくジェードの乗ってきた馬だろう。近くにジェードの姿はない。きっと、何のためらいもなく森の中に入って言ったに違いない。

「センファイ急ごう。ジェード、きつともう森の奥だ」

カロンは少し焦った様子で振り返った。しかしそこにセンファイの姿はなく、センファイはいまだに馬に跨っていた。前方に、今さっきまでカロンが座っていた場所を空けたまま、手綱を握ることもなく呆然と座って『夕闇の森』を無表情で見つめている。

「センファイ？」

どうしたのだろうとカロンが声をかけると、センファイは我に返ったように目を見開いてこちらを見てきた。そして慌てて馬から降りると、カロンの隣へとやってくる。

「ごめん、ちょっとぼうつとしてた……」

呆けていたにしても、明らかにおかしい。カロンは眉をひそめてセンファイの顔を覗き込んだ。よく見ると、いつもよりセンファイの顔は青い。血の気を失っている。

「……どうかしたか？ 何か、死にそうだぞお前」

カロンが心配すると、センファイは難しい顔をして『夕闇の森』を睨んだ。森から流れてきた冷たい風が二人の間を流れていく。

「変な感じがするの、この森。なんていうか……この森自体が一つのスピラ、みたいなの……なんだろう……」

「お前、ここで待ってるか？」

「ここまで来たんだから行くしかないじゃない……」

センフィが諦めた様子で先へと進む。首にかけたカロンと同じペンダントの水晶に手を触れると、明かりをつける。そして森の中へと入っていく。カロンは慌ててセンフィを追うと、センフィの前を歩いた。

「オレがお前の前を歩く。何か来たら、すぐに反応できるからな」
「うん、任せる。何か感じたらすぐに言うから」

森の中へと二人は進んだ。入った瞬間、まるで洞窟の中に入ってしまったかのように辺りが真っ暗になる。心なしか、空気も冷たい。振り返ると入り口がぼっかりと開いていて、そこから月光が差し込んでいて明るい。自分達が乗ってきた馬と、恐らくジェードが乗ってきたであろう馬が、こちらを見ていた。しかし、しばらく歩くと入り口はあつという間に小さくなって見えなくなり、森の暗闇が二人にのしかかった。

一歩踏み出すたび、靴の下で落ち葉や枝が折れる音がする。ペンダントの明かりで周囲を照らすと、辺りは普通の森のようだった。コケやキノコを生やした木々が点在し、シダのような植物が地面を覆っている。しかし、上を見上げるとそこは真っ暗だった。葉の間から月光が差し込んでもおかしくないのに、とカロンは思った。それと同時に気付く。何故月光が差し込んでこないのか、それはこの森の木々の枝や葉が異常なほどに生い茂り、空を隠しているからだ。

カロンはふと、地面を明かりで照らしてみた。地面には何枚か木々の葉が落ちている。葉のほとんどは緑色だが、数枚は何故か赤い。そこで近くの木にある低い枝を見てみると、そこに生えた緑の葉に混じって、赤い葉もあることに気付いた。

「センフィ見てよ、葉っぱが二色だ――」

カロンは不思議そうに言った。その次の瞬間、何かの妙な鳴き声が森の奥から聞こえてきてカロンは顔を上げた。高い笛のような、どこことなく不安になるような鳴き声だ。しかし場所は遠い。カロンは振り返ってセンフィを見た。

「何かいるみたいだけど、遠い……よ？」

しかし、そこにあるはずのセンフィの姿はなく。

「あれ？ センフィ？」

センフィがいつの間にか消えた。カロンは慌てて周囲を見回す。しかし暗いこともあり、センフィらしき人影はどこにも見当たらない。

「センフィどこ？」

来た道を引き返し、センフィの姿を探す。一体どこではぐれてしまったのだろうか。いつはぐれてしまったのだろう。こんな鬱蒼とした森ではぐれてしまえば、再会するのが難しいかもしれない。

カロンは歩くのを止めてその場に立ち止まると、目を瞑って周囲の音に集中した。下手に動くより、感覚を使って探すべきだろう。

風が枝や葉を揺らす音、何かの動物の鳴き声、様々なものが聞こえる。その中で、人の歩く音を探して神経を研ぎ澄ます。しかし聞こえてきたのは――小さな笑い声。

――誰かが笑ってる？

子供のような、高い笑い声だった。誰かが忍び笑いをしている。

ジェードだろうか、と、とっさにカロンは思った。しかし笑い声は複数聞こえる。

「一体何が――」

顔を上げた、その瞬間だった。

森の奥から切羽詰ったような甲高い悲鳴が聞こえてきた。悲鳴は森全体に響き渡る。

センフィの悲鳴だった。

森がざわつく。カロンは背の大剣を手にとると、悲鳴のした方へと駆け出した。センフィに何かあったらしい。

「センフィ！ どこ！？」

カロンは闇雲に先へと駆ける。しかし、いくら進んでもセンフィの姿はない。と、木に絡み付いていたツタの一本がうねったかと思うとあたかも蛇のように身をくねらせカロンへと飛んできた。驚いたカロンはとっさに立ち止まり、飛んできたツタを剣で払う。

「な、何だよ！」

予期せぬことにカロンは叫んだ。他のツタも、突然うねったかと思うとカロンへと殺到してくる。

カロンは目を見開いてそのツタを見ていた。しかし、すぐに横へと転がる。カロンへと迫り来ていたツタはそのまま地面へと突っ込む。しかし、それでも諦めずカロンを追ってくる。だからカロンは慌てて立ち上がると、地面に衝突したいくつものツタに向かって大剣を振り下ろした。何本ものツタが、あっさりと切り落とされる。先を切られたツタは、その切り口から青緑色の汁を滴らせながら身をよじり、森の奥へと逃げていく。しかしまだツタは残っている。カロンは再び大剣を振り、まだ襲ってくるツタを切り捨て走り出す。こいつらを相手にしている暇はない、いまはセンフィを探し出すのが先だ。

ツタはもう追ってこなかった。走りながら背後を振り返ると、いままですき進んできた暗闇がある。そして正面を見ればまた暗闇。しかしカロンは走り続けた。

だが、頭上から笑い声が聞こえてきて、カロンは足を止めた。

「誰だ!？」

上を見上げる。するとそこには、木の枝に座る小さな影があった。人形ほどの大きさで、濃い緑のマントに身を包みフードを被っている。顔は明らかに人の顔ではない。猫のように長いひげを生やし、目は赤に鋭く光っている。耳まで避けた大きな口も真紅で、カロンを見て笑っている。

不気味な妖精がそこにいた。一匹だけではない。よく見るとあちこちにいます。皆木の枝に腰を下ろし、口の端を吊り上げてカロンを見下ろしている。

chapter 08

この妖精達がセンフィに何かしたのだろうか。カロンは大剣を強く握り、上空の妖精達に向かって叫んだ。

「おい！ お前ら！ センフィをどこやったんだ！？」

しかし妖精達は何も答えず、笑い声を大きくするばかりだ。と、その姿が透けるようにして、ぽつりぽつりと消えていき、全ての妖精が姿を消してしまった。カロンが慌てて周囲を見回すも、もう要請の姿は一つもない。しかし笑い声はまだ聞こえる。

と、突如木々が音を立てて揺れた。木々だけではない、地面も揺れている。葉が何枚も落ち、地面に降り注ぐ。

——地震？

カロンは立っていられなかった。よろめき、地面に膝をついてしまう。地震の中、まだあの妖精達の笑い声が聞こえる。あいつらの仕業だろうか、とカロンは顔を上げたが——目を見開いて周囲を見回した。

空を覆いつくし月光をも塞いでしまう木々。その木々が、移動している。

地面が波を打つ。すると木々はその波に乗って移動する。そうして、カロンがいままで進んできた道を塞いでいく。この森は生きている。とっさにカロンはそう思い、慌てて立ち上がると駆け出した。地面を覆う落ち葉が増え、足が滑る。しかしカロンはよろめきなが

らも走った。この森は危険だ、早くセンフィとジェードを探して脱出しなければ。胸の上で、ペンダントの明かりが弾む。

だがカロンが行く先に、木々が移動してきた。道を塞ぐようにして立った木は、生やした枝を下に向けて更に道を塞ぐ。そしてどこからともなくツタが這ってくると、また道を塞ぎ、カロンへと伸びてくる。これでは先に進めない。カロンは足を止めると、他の道へと走った。しかしその道も木々がやってきて塞いでしまう。

背後からはいくつものツタが迫ってくる。逃げ道はもうなかった。カロンはその木々が作り上げた袋小路に背を向けると、向こうから迫り来るいくつものツタへと向けて剣を構える。ふと足下を見れば、白くて長い何かが転がっている。白骨だ。恐らく、人間の。

顔を上げると、ツタがすぐそこまで迫っていた。ツタはカロンの前で立ち上がると、あたかもカロンに覆いかぶさるようにして襲い掛かった。

その瞬間、カロンは自身のスピラを解放した。スピラは体内で一気に燃え上がる。

無意識に目を見開く。大剣を握る腕が、勝手に動き出す。大剣は宙を滑り走る。

次の瞬間、迫り来ていた全てのツタの先が木っ端微塵になり消滅した。全てが切り落とされ、ツタはもたえるようにして身を震わせると木々の間へと引っ込んでいく。

それでも身体が敵を追おうと、無意識に動こうとする。そこでカロンはスピラを抑えると、勝手に動こうとしていた止まった。

道を塞いでいたツタが退いていく。カロンはその間を走った。急がなければ、またやってくる。だが、すぐに止まってしまった。道はまた塞がれていた。振り返っても道は塞がれている。どこを見ても塞がれている。閉じ込められてしまった。

ならば、木々を切り倒すまでである。カロンは大剣を振りかぶると、一本の木へと向かって振り下ろした。しかし――振り下ろすよりも先に、背後で爆発が起こった。

振り返ると、全てを塞いでいた木々の壁に穴が開いていた。そこでは白い炎が燃えて揺らいでいる。何が起きているのか、カロンは理解できなかった。

「こちらへ」

白い炎の向こうから声がした。

「こちらへ」

カロンはためらうことなく炎の中へと突っ込んだ。暗闇から白へと景色が変わり、眩しさに目を閉じる。そして炎の中を抜けると地面に転がった。膝をつき身体を起こすと、すすだらけになった顔を上げた。

「……ルーナ？」

そこは木々の開けた場所だった。だが空は相変わらず木々の枝と葉が埋めている。小さなドームのような場所だった。その中央で、ルーナが座り込んでいた。

——なんでルーナがここに？

ここしばらく姿を見ていなかった魔法使いが目の前にいた。一体、何をしていたというのだろうか。だがそんな疑問も、ルーナの腕の中を見た瞬間、頭から吹っ飛んでしまった。

ルーナは、片手に杖を握っているも、ぐったりとしたセンフィを抱えて座り込んでいた。

「センフィ！！」

安心は一瞬だけだった。すぐに不安に変わってしまう。カロンは大剣を投げ出し二人へと駆け寄った。そしてセンフィの顔を覗き込む。センフィは目を硬く瞑り、顔を青ざめさせている。

死人の顔のようだった。怖くなった。センフィが死んだなんて、考えられなかった。

「ルーナ、センフィは、センフィは——」

カロンは助けを求めるようにしてルーナを見た。言葉が震えた。手も震えている。しかしルーナは笑って答えた。

「生きてます。安心してください」

だがカロンは信じられなかった。それほどに、センフィの表情は死人のものに近かった。

「でも、でも死んじゃってるみたいな顔してる……どうしよう……」

「どうしよう……！」

「気絶してるだけですよ、だから安心してください」

「本当？」

「はい」

よく見れば、センフィは息をしていた。それを見てカロンはようやく溜息について安心した。みたところ、たいした傷もなさそうである。

「よかったあ……本当によかったあ……」

安心すると、全身の力が抜ける。と、背後で轟音がした。振り返ると、先程までできていた木々の壁を、移動してきた新たな木々が塞いでいた。燃えていた白い炎にはツタが伸び覆って消火している。カロンは急いで立ち上がると、投げ出した大剣を拾い構えた。だがルーナは、

「襲ってきませんよ。この森は賢いですから、勝てない相手に歯向かってきません」

ルーナを見れば苦笑いを浮かべていて。

「この森を一回燃やしましたから」

「……え？」

「この森を安全に歩くには、力を見せつけておかないといけないんです。だから燃やしました。手間がかかった上に、燃やしてもすぐ復活してしまいましたが。でも少なくとも私のそばにいれば、この森も下手に手を出してきませんよ」

ルーナが笑顔で言う。ルーナの魔力であれば、森を燃やすのは容

易いことだったのだろう。しかし大胆なことをする。カロンは思わず苦笑した。

「ルーナそれやりすぎじゃん？」

そして頭も大分落ち着き、改めて思う。カロンは首を傾げて聞いた。

「てか、なんでルーナここに？」

するとルーナは何故か難しい顔を浮かべた。

「ちょっと用がありましたね……あなた達は、ジェードを探しに来たのでしょうか？」

不意にルーナに言い当てられ、カロンは驚いた。そしてまた焦る。

「何で知ってんだ？ 言う通りなんだけど……ジェード見た？ あいつ、一人でこの森入っちゃったみたいなんだ……！」

すると、ルーナの背後から、小さな人影が出てきた。それは紛れもなくジェードだった。ジェードは、何か恐ろしいものを見たような表情を浮かべてカロンを見ている。

「ジェード……！」

カロンが思わず声を漏らす。ルーナが溜息を吐く。

「森が騒がしいと思ったら、この子が入り込んでいましたから、助けましたの。あなたとセンフィはこの子を探しに来たのでしょうか？」

センフィを見つけてすぐそう思いました……でも、センフィをこの森に連れてくるべきではなかったですね。この森は人を不安にさせる要素で満ちています、感覚のいいセンフィには耐えられませんよ」

森に入る直前の、青ざめたセンフィを思い出す。やはり置いてくべきだったのだ。カロンは申し訳なくなり、俯いた。

「あなたもあなたです」

ルーナはジェードへと視線を移す。ジェードは声をかけられ、びくりと身を震わせた。しかしルーナは容赦しない。

「カロンやセンフィ、私がいたからいいものの、勢いで危険に突っ込むなんて、どうしてそんなことをするんですか。下手したらいま頃死んでいたかも知れないんですよ」

ジェードは口を固く結び、俯いた。

「ご、ごめんなさい……」

ジェードの口調は震えていた。ルーナはそれを聞いて、深く溜息を吐く。その溜息に、カロンは妙なものを感じた。呆れの溜息ではないような気がした。

「カロン、センフィをお願いします」

ルーナがカロンを見上げる。カロン大剣を背負うと、センフィを腕に抱えて立ち上がった。そしてルーナも立ち上がる。ジェードはルーナから離れカロンへと駆け寄ると、カロンの服の裾を固く握っ

た。

「外まで案内します。ついて来て下さい」

ルーナはカロンに背を向けると、先へと進んでいく。木々やツタが、行く手を阻む様子はもうなかった。それどころか、木々は移動してルーナの進む道を作っている。

カロンは黙ってルーナの後を追った。そうしてしばらく歩くと、外へと出た。そこは森の入り口だった。二頭の馬が一行を見て嬉しそうに目を輝かす。上空を見れば、満天の星が広がり月が輝いている。

「外だあ……」

カロンは空を仰ぎ、深呼吸する。そしてジェードを見下ろし、

「さあ、帰ろう。シギとシェーラが心配してるぞ」

ジェードは黙ってうなずいた。そして自身の子馬へと駆け寄る。カロンもぐったりとしたセンフィを馬に乗せ、そして自身も馬に乗る。だが、ルーナが森から離れないのに気がついた。

「あれ、ルーナ帰らないの？」

ルーナは苦笑いを浮かべた。

「私はまだ用がありますので……先に戻っていてください」

用とは一体何なのだろうか。気になるも、カロンは何も言わずに

頷いた。いまはセンフィの身が心配だった。センフィはいまだに目を覚まさない。

「わかった……気をつけて」

カロンは馬を操りルーナへと背を向ける。そしてジェードについてくるように目で言うのと、走り出した。

ルーナは小さくなっていくカロンとジェードの姿を見ながら溜息を吐く。そして月を見上げ、森の中へと戻っていった。

chapter 09

ひどく息苦しく、エンジは目を覚まし飛び起きた。激しい動悸に耐えられず、胸に手を当てうずくまる。まるでスピラを使いすぎてしまった後のようだった。呼吸は荒く、激しく乱れている。滝のような汗が流れている。身体全体が、小刻みに震えている。三日前訓練場で倒れてしまった時と同じだった。突然動悸が激しくなり、息苦しくなり、倒れてしまった。

だが、今回は気を失うことはなかった。しばらくすると呼吸が整ってきて、動悸も治まってくる。身体の震えも止まった。しかしエンジは胸に手を当てうずくまったまま、ベッドの上から動こうとしなかった。

自室の中は真っ暗で何も見えず、おそらくまだ夜中であるのだろう。静かだった。

エンジは身体にかかった毛布をどけると、ベッドから降りて、部屋の窓へと向かった。閉められた窓を開ければ部屋の中に夜風が入り込む。汗をかいていたこともあり、風は身を切るかのように冷たいが、とても心地よかった。エンジはしばらく、窓のそばで夜風に当たった。窓の外を見ても、真っ暗でよくわからない。空を見ても漆黒である。しかしエンジは深く溜息を吐くと、その漆黒の空をぼんやりと見上げた。今晚は曇っているらしい、いつもは月がよく見えるのに。

と、何か違和感を覚え、エンジは外から部屋の中へと視線を向けた。真っ暗の部屋の中、廊下へと続くドアがあるはず場所の向こうに、人の気配を感じる。

間違いない。部屋の外で誰かが立っている。

部屋の外の気配は、エンジの部屋のドアの前から一向に動こうとしない。自分に用があるのだろうか、とエンジは思うも、それなら何故ノックせずにいるのかと考える。そもそも、どうして夜中にやってきたのだろう。寝ているかもしれないのに。一体誰なのだろうか。

そう思った矢先に、部屋のドアをノックされた。やはり自分に用があるらしい。一体誰がどうしてこんな時間にやってきたのだろう。エンジは疑問に思いつつも静かにドアまで進み、ドアノブに手を伸ばした。そしてドアを開けようとするも、そこで固まってしまった。

ドアの向こうの気配が、考えられないものだった。

普段自分に敵意むき出しのスピラを押しつけてくる相手が、何故か今はスピラを押さえてそこにいる。

エンジはドアを開けることができなかった。だからといって無視することも、スピラを放出して相手を押すこともできなかった。それほどに予想外のことで、思考が停止してしまった。エンジはドアノブに手をかけたまま、何もせず、何もできなかった。

しかし、

「――エンジ」

名前を呼ばれ、何故か背筋に冷たいものが走った。その声は紛れもなくルーナの声で。

こうして名前を呼ばれたのは、何年ぶりのことだろうか。

ドアの向こうにいるのは、確かにルーナだった。

「開けてください」

ルーナが淡々とした口調で言う。しかしエンジはそれでも動かない。ドアノブを握ったまま、ドアを見つめる。だがしばらくして、

——あいつが俺に、何の用だ。俺はお前に用はない。

ふつふつと、怒りが沸いてきた。何故こいつの命令に従わなくてはならない。何故こいつと顔を合わせなければならない。そんな道理はどこにもない。

だからドアから離れて無視をしようと思うも、身体が言うことを聞かない。ドアノブから手を放そうとしない。何故か怖かった。

ルーナが怖い、と思っている訳ではない。ルーナに逆らってはいけない、と思っている訳ではない。

むしろ、自分はルーナを越えていなければいけない。

十年前の記憶が脳裏によぎって暴れ出す。忘れたくても忘れてはいけない記憶。トラウマのような、それ。

「開けてください」

開けてはいけない。

しかし気付けば身体が勝手に動き、ドアを開いていた。

廊下は部屋と同じく明かり一つないようで、真っ暗だった。しかしすぐそこに人影が立っているのだけはわかる——ルーナだ。

一体何の用で来たのだろう。一体何を思っているのだろう。

ルーナの表情を伺う。しかし暗くて全く見えない。全てが暗く、何も見えなかった。

ドアを開けてしばらくして、ルーナは何もしようとはしなかった。言葉を発する様子もなければ、スピラを発する気配もない。動く気配もない。ただそこに立っている、それだけだった。

エンジンも何もできずに、暗闇の中のルーナを見つめた。

物音一つもない暗闇の中、二人は何もせずに立っていた。

しばらくして、滴の落ちる音がした。一滴、二滴と、暗闇の中で音がする。ルーナが顔を上げたように見えた。

「……これが見えないんですね？」

不意にルーナが口を開いた。一体何のことを言っているのか、エンジンにはわからなかった。

「今晚は満月で、こんなにも明るいというのに、これが見えないんですね？ 視界は真っ暗なんですね？」

——今晚は満月で明るい？

そんなはずはなかった。現に先程窓の外を見たとき、空は曇っていて満月なんてなかった。部屋の中だって月光はないし明かり一つもなく、暗闇だ。

一体ルーナは何を言っているのだろうか。

その直後、エンジは脇腹に異変を感じた。

全身の体温が一瞬にして下がったかと思うと、脇腹だけがじわじわと熱くなり、それが全身へと伝わっていく。脇腹が燃えるように熱く、痛い。全身から気持ちの悪い汗が出てくる。脳の奥も熱くなり、吐き気がこみ上げてくる。

「あ……？」

襲いくる全ての感覚に耐えられず、エンジはうずくまった。脇腹に手を当てると、何かが刺さっていて、そこから熱い液体が溢れだしていた。

暗闇だった視界が、何故が段々と明るくなってくる。そうして脇腹を見れば、そこにナイフが深々と刺さっていた。そしてそこから溢れ出す黒い液体は血であるのだろうか。

頭がぼんやりとしてきた。全てのものが激しく襲いかかる気持ちの悪い感覚に飲まれていく。何もわからなくなっていく。

わかることはただ一つ。

自分はルーナに刺されたのだ。

何故、なんのためになど、考える余裕もなかった。身体が痙攣している、息苦しい。エンジはナイフが刺さったままの脇腹を押さえ、床に倒れる。

ルーナを見上げる。先程まで真っ暗闇で見えなかったルーナの姿が、いまは月明かりに照らされてよく見える。しかしそれも徐々に見えなくなってくる。

最後にルーナの表情を見る。ルーナは泣いているような表情をしていた。いや、怒っているようにも見える。

ルーナの背後に、ディーモの姿が見えた。

そこまでが限界だった。その直後、感覚は全て消え、意識すらも暗闇に飲み込まれてしまった。

第三章 暗闇の囁き 終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4727x/>

Red Shot ー二人のスピラ使いー

2011年11月27日17時54分発行